

上林イシガネ遺跡 末松遺跡

2023

石川県野々市市教育委員会



平成28年度調査 全景航空写真（南から）



平成28年度調査 2区・3区中世遺構（南東から）



平成29年度調査 1区全景（北西から）



平成30年度調査 1区全景航空写真（北西から）



令和2年度調査 1区全景航空写真（北から）



令和3年度調査 1区全景航空写真（右が北）



令和3年度調査 2-1区全景航空写真（南から）



令和3年度調査 2-2区全景航空写真（北から）



上林イシガネ遺跡 末松遺跡

2023

石川県野々市市教育委員会

例 言

- 1 本書は、野々市市教育委員会が実施した上林イシガネ遺跡・末松遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 上林イシガネ遺跡の所在地は、上林三丁目、中林一丁目地内である。末松遺跡の所在地は、末松一・三丁目、中林一・二・三・五丁目地内である。今回の調査対象地は野々市市中林土地区画整理事業の都市計画道路建設地である上林三丁目、中林二・三丁目である。
- 3 調査原因は、野々市市中林土地区画整理事業による都市計画道路建設（四十万末松線、堀内上林線）である。
- 4 調査は、野々市市中林土地区画整理組合からの依頼を受けて、平成28（2016）～平成30（2018）年度、令和2（2020）～令和4年度（2022）年度に野々市市教育委員会が実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書作成である。
- 5 調査に係る費用は、野々市市中林土地区画整理組合が負担した。
- 6 現地調査は平成28～平成30年度、令和2・3年度に実施した。遺跡名・期間・面積・担当は次のとおりである。
 - (1) 平成28(2016)年度（上林イシガネ遺跡）
期間：平成28年9月16日～同年11月30日
面積：1,570㎡
担当：西村 慈子
 - (2) 平成29(2017)年度（末松遺跡）
期間：平成29年11月7日～平成30年1月23日
面積：600㎡
担当：西村 慈子
 - (3) 平成30(2018)年度（末松遺跡）
期間：平成30年9月10日～同年12月12日
面積：589㎡
担当：田村 昌宏・巖地 孝大
 - (4) 令和2(2020)年度（末松遺跡）
期間：令和2年6月25日～同年9月30日
面積：560㎡
担当：西村 慈子
 - (5) 令和3(2021)年度（末松遺跡）
期間：令和3年7月26日～同年12月6日
面積：755㎡
担当：徳野 裕子
- 7 出土品整理は平成28～平成30年度、令和2・3年度に実施した。

- 8 報告書の作成作業の担当は以下のとおりである。
- 第1章～第3章 西村 慈子
 第4章～第6章 腰地 孝大
 第7章第1～2節 徳野 裕子
 第7章第3節・第8章 田村 昌宏
 出土品写真撮影・報告書執筆補助は花田 和希（野々市市教育委員会会計年度任用職員）である。
- 9 本書についての凡例は下記のとおりである。
- (1) 遺構実測図その他の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標第Ⅷ系に準拠している。
 - (2) 上林イシガネ遺跡のグリッド杭は(X=56.280, Y=-50.370)を原点(A, 1) とし、西方向へ2, 3…、北方向へB, C…を付した。
 - (3) 末松遺跡のグリッド杭は(X=56.630, Y=-50.920)を原点(1, A) とし、東方向へB, C…、南北方向へ2, 3…、北方向へ-2, -3…を付した。
 - (4) 水平基準は海拔高であり、T.P.(東京湾平均海面標高)による。
 - (5) 出土遺物番号は、本文・観察表・挿図実測図・写真図版に対応する。
 - (6) 挿図の縮尺は土器・石器については、S=1/3、金属品についてはS=1/2または現寸である。
 - (7) 写真図版における遺物の縮尺については統一していない。
 - (8) 土層図・遺物観察表の色彩注記は、「新版標準土色帖」に拠った。
 - (9) 遺構名称の略号は以下のとおりである。
 溝：SD 土坑：SK 小穴：P 竪穴建物・竪穴状遺構：SI 掘立柱建物：SB
 欄列：SA 自然河川：NR 不明遺構・風倒木痕・その他：SX
 - (10) 挿図の実測図にある網かけ表現は下記の通りである。また、炭化物及び油煙痕は黒塗である。
：赤彩 ：内黒
 - (11) 参考文献は巻末に一括して記載している。
- 10 調査に関する記録と出土遺物は、野々市市教育委員会が一括して保管・管理している。

目 次

第1章 調査の経緯と経過	1	第6章 令和2(2020)年度の調査成果	59
第1節 調査に至る経緯	1	第1節 調査の概要	59
第2節 調査の経過	2	第2節 遺構	59
第3節 出土品の整理と報告書の作成	4	1. 1区	59
第2章 遺跡の位置と環境と過年度の成果	4	2. 2区	75
第1節 位置と地理的環境	4	第3節 出土遺物	75
第2節 歴史的環境	7	第7章 令和3(2021)年度の調査成果	82
第3節 過年度の調査成果	8	第1節 調査の概要	82
上林イシガネ遺跡		第2節 遺構	82
第3章 平成28(2016)年度の調査成果	13	1. 1区	82
第1節 調査の概要	13	2. 2-1区	84
第2節 遺構	13	3. 2-2区	91
1. 1区	13	第3節 出土遺物	95
2. 2区	14	第8章 総括	103
3. 3区	17	第1節 上林イシガネ遺跡の調査成果まとめ	103
4. 4区	19	第2節 末松遺跡の調査成果まとめ	103
第3節 出土遺物	24	引用・参考文献	104
末松遺跡		写真図版	
第4章 平成29(2017)年度の調査成果	31	報告書抄録	
第1節 調査の概要	31		
第2節 遺構	31		
1. 1区	31		
2. 2区	35		
第3節 出土遺物	43		
第5章 平成30(2018)年度の調査成果	48		
第1節 調査の概要	48		
第2節 遺構	48		
1. 1区	48		
2. 2区・3区	53		
第3節 出土遺物	53		

挿図目次

第1図 野々市市中林土地区画整理事業 都市計画道路発掘調査位置図	2	第38図 SD3・4・5・6、SI428・429 平面・断面図	51
第2図 野々市市位置図	4	第39図 P170・180・186・237・250・257 平面・断面図	52
第3図 遺跡分布図	5	第40図 2区・3区平面図	54
第4図 末松遺跡・上林イシガネ遺跡発掘調査範囲図	9	第41図 平成30年度末松遺跡出土遺物実測図1	55
		第42図 平成30年度末松遺跡出土遺物実測図2	56
第5図 平成28年度調査区配置略図	13	第43図 令和2年度調査区配置略図	59
第6図 1区1トレンチ・2トレンチ平面略測図・土層柱状図	14	第44図 1区平面図1(北側)	60
第7図 2区平面図	15	第45図 1区平面図2(南側)	61
第8図 調査区北壁・東壁土層断面図	16	第46図 SI531 平面・断面図	62
第9図 3区平面図	18	第47図 SD1・2 平面図	66
第10図 3区北壁土層断面図	19	第48図 SD1・2 断面図	66
第11図 3区西壁土層断面図	20	第49図 SK5・419・7・8 平面・断面図	67
第12図 3区 SD1 土層断面図	21	第50図 SK9・16・18・11・19 平面・断面図	68
第13図 3区 SD1 小刀出土平面・断面図	21	第51図 SK20・21・136・13 平面・断面図	69
第14図 SK25・26 平面・断面図	21	第52図 SK12・17 平面・断面図	70
第15図 4区平面図	22	第53図 SK171・172・173、P108 平面・断面図	71
第16図 3区・4区 SD1 及び中世遺構平面図	23	第54図 SI174・175、SK252 平面・断面図	72
第17図 4区北壁土層断面図	23	第55図 SI254・255、SK256 平面・立面・断面図	73
第18図 平成28年度上林イシガネ遺跡出土遺物実測図1	25	第56図 SK22・128・15 平面・立面・断面図	74
第19図 平成28年度上林イシガネ遺跡出土遺物実測図2	26	第57図 2区平面図	76
		第58図 令和2年度末松遺跡出土遺物実測図1	77
第20図 平成29年度調査区配置略図	31	第59図 令和2年度末松遺跡出土遺物実測図2	78
第21図 1区平面図	32	第60図 令和2年度末松遺跡出土遺物実測図3	79
第22図 SB1 平面・断面図	33		
第23図 SD85・86・87、SK89 平面・断面図	34	第61図 令和3年度調査区配置略図	82
第24図 SD106 平面・断面図	34	第62図 1区平面図	83
第25図 2区平面図1(南側)	36	第63図 SK8 平面・断面図	84
第26図 2区平面図2(北側)	37	第64図 2-1区平面図	85
第27図 SD640 平面・断面図	38	第65図 SI102、SK166 平面・断面図	86
第28図 SB2 平面・断面図	39	第66図 SB1 平面・断面図	87
第29図 P501・284・268・250・197・185 平面・断面図	39	第67図 SB2 平面・断面図	88
第30図 SB3 平面・断面図	40	第68図 SA1 平面・断面図	89
第31図 SB4 平面・断面図	41	第69図 2-2区平面図	90
第32図 SB5 平面・断面図	42	第70図 SA2 平面・断面図	91
第33図 平成29年度末松遺跡出土遺物実測図1	44	第71図 SA3・4 平面・断面図	92
第34図 平成29年度末松遺跡出土遺物実測図2	45	第72図 SB3 平面・断面図	93
		第73図 SB4 平面・断面図	94
第35図 平成30年度調査区配置略図	48	第74図 令和3年度末松遺跡出土遺物実測図1	97
第36図 1区平面図1(南側)	49	第75図 令和3年度末松遺跡出土遺物実測図2	98
第37図 1区平面図2(北側)	50	第76図 令和3年度末松遺跡出土遺物実測図3	99

表 目 次

第1表 野々市市遺跡一覧表	6	第11表 令和2年度遺物観察表(土器)	80
第2表 平成28年度遺物観察表(土器)	27	第12表 令和2年度遺物観察表(石製品)	81
第3表 平成28年度遺物観察表(石製品)	28	第13表 令和2年度遺物観察表(金属製品)	81
第4表 平成28年度遺物観察表(金属製品)	28	第14表 令和3年度1区遺物観察表(土器)	100
第5表 平成29年度遺物観察表(土器)	46	第15表 令和3年度1区遺物観察表(金属製品)	100
第6表 平成29年度遺物観察表(土製品)	47	第16表 令和3年度2区遺物観察表(土器)	101
第7表 平成29年度遺物観察表(石製品)	47	第17表 令和3年度2区遺物観察表(土製品)	102
第8表 平成29年度遺物観察表(金属製品)	47	第18表 令和3年度2区遺物観察表(石製品)	102
第9表 平成30年度遺物観察表(土器)	57	第19表 令和3年度2区遺物観察表(金属製品)	102
第10表 平成30年度遺物観察表(石製品)	58		

図 版 目 次

巻頭図版1 平成28年度調査(上林イシガネ遺跡) 平成28年度調査 全景航空写真(南から) 平成28年度調査 2区・3区中世遺構(南東から)	3区 北壁土層断面(南東から) 3区 サブトレンチ1 SD1 (e-f) 断面(西から) 3区 サブトレンチ2 SD1 (g-h) 断面(北から)
巻頭図版2 平成29・30年度調査(末松遺跡) 平成29年度調査 1区全景(北から) 平成30年度調査 1区全景航空写真(北西から)	写真図版3 平成28年度調査(上林イシガネ遺跡) 3区 SD1 (i-j) 断面(北から) 3区 西壁土層断面(北東から) 3区 SD1 (k-l) 小刀出土状況(東から) 3区 P3 土層断面(南から) 3区 SK25・26 遺構検出状況(東から) 3区 SK25 遺物出土状況(東から) 3区 SK25・26 完掘状況(東から) 3区土層遺構面検出状況(南西から)
巻頭図版3 令和2・3年度調査(末松遺跡) 令和2年度調査 1区全景航空写真(北から) 令和3年度調査 1区全景航空写真(右が北)	写真図版4 平成28年度調査(上林イシガネ遺跡) 4区 全景(南東から)
巻頭図版4 令和3年度調査(末松遺跡) 令和3年度調査 2-1区全景航空写真(南から) 令和3年度調査 2-2区全景航空写真(北から)	写真図版4 平成29年度調査(末松遺跡) 1区 全景(北から)
写真図版1 平成28年度調査(上林イシガネ遺跡) 1区 1トレンチ全景(東から) 1区 1トレンチ西壁土層断面(東から) 1区 2トレンチ全景(南西から) 1区 2トレンチ西壁土層断面(東から) 2区 全景(北西から)	写真図版5 平成29年度調査(末松遺跡) 1区 SD85・86(西から) 1区 SD86・87、SK89(東から) 1区 SD85 遺物出土状況(西から) 2区 調査区南端全景(SD640以南)(北から) 2区 調査区南半全景(SB2付近)(南から) 2区 調査区北半全景(SB3・4付近)(南から)
写真図版2 平成28年度調査(上林イシガネ遺跡) 3区 全景(南東から) 3区 西半全景(完掘状況)(北東から)	

2区 調査区北端全景 (SB5 付近) (南から)

2区 調査区北端東西トレンチ全景 (西から)

写真図版6 平成29年度調査 (末松遺跡)

2区 調査区北半 東壁土層 (南西から)

2区 調査区南半 東壁土層① (西から)

2区 調査区南半 東壁土層② (西から)

2区 調査区南半 東壁土層③ (西から)

2区 SD640 土層断面 (北西から)

2区 P268 遺物出土状況 (南から)

2区 P185 遺物出土状況 (東から)

2区 SK533 土層断面 (南から)

写真図版7 平成30年度調査 (末松遺跡)

1区 全景垂直航空写真 (右が北)

1区 SD1・2・3 完掘 (南から)

1区 全景 (北から)

1区 全景 (南から)

1区 南西部 (東から)

写真図版8 平成30年度調査 (末松遺跡)

1区 P237 遺物出土状況1 (南東から)

1区 P237 遺物出土状況2 (南から)

1区 P250 遺物出土状況 (西から)

1区 SD4・5 完掘 (西から)

1区 SI428 土層断面 (北西から)

1区 SI429 土層断面 (西から)

2区 南半全景 (南から)

3区 全景 (北から)

写真図版9 令和2年度調査 (末松遺跡)

1区 SD1・2 完掘 (北東から)

1区 SI531 (堅穴住居) 遺物出土状況 (南から)

1区 SK419・5 完掘 (北西から)

1区 SK7 完掘 (北東から)

1区 SK8 完掘 (北東から)

1区 SK9 完掘 (南から)

1区 SK16 完掘 (北東から)

1区 SK18 土層 (南から)

写真図版10 令和2年度調査 (末松遺跡)

1区 SK11・9 完掘 (南東から)

1区 SK20・136 完掘 (北東から)

1区 SK13 完掘 (北東から)

1区 SK21・258 完掘 (南東から)

1区 SK12・17 完掘 (東から)

1区 SK171・172・173・P108 完掘 (北西から)

1区 SK173 遺物出土状況 (南西から)

1区 SK174・175 土層断面 (南から)

写真図版11 令和2年度調査 (末松遺跡)

1区 SI254・255、SK256 完掘 (南東から)

1区 SI254・255 土層断面 (西から)

1区 SK22 遺物出土状況 (北から)

2区 全景 (南から)

1区 全景 (南から)

写真図版12 令和3年度調査 (末松遺跡)

1区 全景 (北から)

1区 全景 (南から)

1区 SK8 遺物出土状況 (北東から)

2-1区 SI102 (堅穴住居) 完掘 (南西から)

2-1区 SBI・2 (北西から)

写真図版13 令和3年度調査 (末松遺跡)

2-1区 全景 (南から)

2-2区 全景 (南から)

写真図版14 令和3年度調査 (末松遺跡)

2-2区 SB3・4、SA3・4 (北西から)

2-2区 全景 (北から)

〈出土遺物〉

写真図版15 平成28年度調査 (上林イシガネ遺跡)

写真図版16 平成28年度調査 (上林イシガネ遺跡)

写真図版17 平成29年度調査 (末松遺跡)

写真図版18 平成29年度調査 (末松遺跡)

写真図版19 平成30年度調査 (末松遺跡)

写真図版20 平成30年度調査 (末松遺跡)

写真図版21 令和2年度調査 (末松遺跡)

写真図版22 令和2年度調査 (末松遺跡)

写真図版23 令和3年度調査 (末松遺跡)

写真図版24 令和3年度調査 (末松遺跡)

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

本調査は、野々市市中林土地地区画整理事業施行地区内における都市計画道路（四十万末松線）と都市計画道路（堀内上林線）建設工事に伴い、野々市市教育委員会が実施したものである。

野々市市中林土地地区画整理事業施行地区は、野々市市西南部地域にあたる。元は水田が広がる農業振興地域であったが、近隣に石川県立大学等が立地する特性から「金沢都市計画区域マスタープラン」において、産業拠点（産・学・官の連携による新産業の創出を図る複合拠点）及び住居ゾーン（居住環境の改善や土地の有効利用に努めるゾーン）として位置付けられており、産業や良質な住宅地と豊かな都市近郊農地とが調和した住みよい地域づくりのモデルフィールドとしての市街地形成を求める地区として計画されたことから、土地地区画整理事業による整備を行い、道路・公園等の公共施設を配置し、適正な土地利用の誘導により、良好な市街地形成を図ることを目的に野々市市中林土地地区画整理事業が計画された。

このことから、野々市市中林土地地区画整理事業施行予定区域30.9ha内の埋蔵文化財の有無を確認するため、平成25年12月2日付けで野々市市産業建設部長から野々市市教育委員会教育長宛に土地地区画整理事業施行予定区域内の埋蔵文化財の分布調査の依頼が出され、平成26年3月20日付けで同予定区域内での分布調査を行う旨の回答をした。これに基づき、野々市市中林土地地区画整理事業施行予定区域内に試掘坑を設定し、同年11月20日～12月12日に54箇所、平成27年12月1日～12月9日に30箇所の計84箇所を試掘調査を実施した。その結果、以前より施行区域西側に存在していた末松遺跡が施行区域内にまで広がることを確認したほか、新たに上林イシガネ遺跡を発見した。

前述の分布調査の結果から、野々市市中林土地地区画整理組合、野々市市産業建設部都市計画課（現建設部都市整備課）、野々市市教育委員会の間で協議を行い、遺跡の範囲内で整理事業設計図に基づく道路等建設部分、河川・調整池・水路・公園緑地等などのうち十分な保護層が確保できない部分については、発掘調査等による記録保存措置を施す旨で合意し、平成28年8月8日付けで野々市市と野々市市中林土地地区画整理組合との間で「野々市市中林土地地区画整理事業の埋蔵文化財に関する協定書」が交わされた。

これを受け、野々市市中林土地地区画整理組合と野々市市教育委員会の間で協議を行い、平成28年から複数年かけて上林イシガネ遺跡、末松遺跡の発掘調査を実施することで合意した。

都市計画道路（四十万末松線）については、道路部分の東隅が埋蔵文化財包蔵地（上林イシガネ遺跡）である。上林イシガネ遺跡は平成28年度に記録保存措置のうち、現地調査を実施した。文化財保護法第93条第1項に基づく届出は、平成28年8月1日に野々市市中林土地地区画整理組合理事長から提出されたものを平成28年8月8日付け教文第156号により野々市市教育委員会教育長から石川県教育委員会宛に進達した。これを受けて平成28年8月8日付け教文第1731号により野々市市中林土地地区画整理組合理事長宛に石川県教育委員会教育長から埋蔵文化財発掘調査を実施する旨の通知がなされた。

都市計画道路（堀内上林線）についても、道路部分の3分の2が埋蔵文化財包蔵地（末松遺跡）である。末松遺跡は平成29年、平成30年、令和2年、令和3年までの4カ年に渡って記録保存措置のうちの現地調査を実施した。ただし、当該道路は既設道路であり、現状の道路幅を拡幅する事業設計であったことから、発掘調査は拡幅する範囲のみを実施した。文化財保護法第93条第1項に基づく届出は、平成28年9月9日に野々市市中林土地地区画整理組合長から提出されたものを平成28年9月12日付け教文第274号により野々市市教育委員会教育長から石川県教育委員会宛に進達した。これを受けて平成28年9月12日付け教文第1735号により野々市市中林土地地区画整理組合理事長宛に石川県教育委員会教育長から埋蔵文化財発掘調査を実施する旨の通知がなされた。



第1図 野々市市中林土地画整理事業都市計画道路発掘調査位置図

第2節 調査の経過

1. 平成28年度調査（上林イシガネ遺跡）

平成28年8月1日に野々市市中林土地画整理組合から発掘調査の依頼があり、同日付で発掘調査承諾書が提出された。平成28年8月8日付で野々市市と野々市市中林土地画整理組合との埋蔵文化財発掘調査の受委託契約を取り交わした。文化財保護法99条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査報告は平成28年9月9日付け教文第270号で野々市市教育委員会から石川県教育委員会へ報告した。

現地調査は9月17日より大型重機掘削を開始した。調査区は4つに分かれることから、重機掘削は複数回に分けて行っている。9月30日に作業員による人力掘削を開始し、遺構検出と遺構掘削を行った。同時進行で個別遺構の記録や写真撮影等を実施し、11月18日にラジコンヘリコプターによる空中写真測量を実施した。その後、一部追加調査や記録を行い、11月28日に資機材の洗浄や搬出作業を行い、11月30日に完全撤収を確認して現地調査を完了した。

2. 平成29年度調査（末松遺跡）

平成29年4月12日に野々市市中林土地画整理組合から発掘調査の依頼があり、4月13日付で発掘調査承諾書が提出された。平成29年8月21日付で野々市市と野々市市中林土地画整理組合との埋蔵文化財発掘調査の受委託契約を取り交わした。文化財保護法99条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査報告は平成29年9月

28日付け教文第300号で野々市市教育委員会から石川県教育委員会へ報告した。

現地調査は11月7日より大型重機掘削を開始した。11月10日に作業員による人力掘削を開始し、遺構検出を行った。1区のドローンによる略測平面用撮影は11月13日、ボールによる測量撮影は11月28日に行った。同時進行で個別遺構の記録や写真撮影等を実施し、2区のドローンによる略測平面用撮影は11月28日、ボールによる測量撮影は天候と遺構掘削の進行状況を加味しながら12月4日、12月15日、12月21日に行った。その後、一部追加調査や記録を行い、平成30年1月9日に資機材の洗浄や搬出作業を開始し、1月23日に完全撤収を確認して現地調査を完了した。

3. 平成30年度調査（末松遺跡）

平成30年4月10日に野々市市中林土地地区画整理組合から発掘調査の依頼があり、同日付けで発掘調査承諾書が提出された。平成30年7月10日付けで野々市市と野々市市中林土地地区画整理組合との埋蔵文化財発掘調査の受委託契約を取り交わした。文化財保護法99条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査報告は平成30年9月14日付け教文第319号で野々市市教育委員会から石川県教育委員会へ報告した。

現地調査は9月13日より大型重機掘削を開始した。調査区は3つに分かれることから、重機掘削は複数回に分けて行っている。1区は9月18日に作業員による人力掘削を開始し、遺構検出を行った。

1区のドローンによる略測平面用撮影は9月20日、9月25日に行い、10月30日にラジコンヘリコプターによる空中写真測量を行った。その後、11月8日まで追加調査や記録を行った。

2・3区の重機掘削は既存のアスファルトカット除去も含め11月15日より開始し、11月20日に作業員による人力掘削を開始し、遺構検出を行った。同時進行で個別遺構の記録や写真撮影等を実施し、2区のボールによる測量撮影は11月21日、3区のドローンによる略測平面用撮影は11月27日に行い、ボールによる測量撮影は12月3日に行った。その後、12月5日に資機材の洗浄や搬出作業を行い、12月12日に完全撤収を確認して現地調査を完了した。

4. 令和2年度調査（末松遺跡）

令和2年4月1日に野々市市中林土地地区画整理組合から発掘調査の依頼があり、5月7日付けで発掘調査承諾書が提出された。土地権利の関係から、1区は令和2年5月7日付け、2区は令和2年7月10日付けで野々市市と野々市市中林土地地区画整理組合との埋蔵文化財発掘調査の受委託契約を取り交わした。文化財保護法99条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査報告は令和2年6月26日付け教文第133号で野々市市教育委員会から石川県教育委員会へ報告した。

1区は7月9日より大型重機掘削を開始した。7月13日に作業員による人力掘削を開始し、遺構検出を行った。同時進行で個別遺構の記録や写真撮影等を実施し、ドローンによる略測平面用撮影は7月16日に行い、8月22日にラジコンヘリコプターによる空中写真測量を実施した。その後、一部追加調査や記録を行い、9月30日に資機材の洗浄作業を行い、8月31日に現地調査を完了した。

2区は9月1日より大型重機掘削を開始した。9月7日に作業員による人力掘削を開始し、遺構検出を行った。同時進行で個別遺構の記録や写真撮影等を実施し、ドローンによる略測平面用撮影は9月8日に行い、9月16日にラジコンヘリコプターによる空中写真測量を実施した。その後、一部追加調査や記録を行い、8月26日に資機材の洗浄作業、9月30日に撤去作業を行って現地調査を完了した。

5. 令和3年度調査（末松遺跡）

令和3年2月1日に野々市市中林土地地区画整理組合から発掘調査の依頼があり、令和3年4月1日付けで発掘調査承諾書が提出された。耕作期間の関係から、休耕地である1区は令和3年4月1日付け、現耕作地である2区は令和3年6月1日付けで野々市市と野々市市中林土地地区画整理組合との埋蔵文化財発掘調査の受委託契約を取り交わした。文化財保護法99条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査報告は令和3年6月25日付け教文第173号で野々市市教育委員会から石川県教育委員会へ報告した。

1区は8月11日より大型重機掘削を開始した。同日より作業員による人力掘削を開始し、遺構検出を行った。同時進行で個別遺構の記録や写真撮影等を実施し、ドローンによる略測平面用撮影は8月12日に行い、8月30日にラジコンヘリコプターによる空中写真測量を実施した。同日に資機材の洗浄作業を行い、9月2日に現地調査を完了した。

2区は10月4日より大型重機掘削を開始した。農道の関係から調査区を2つに分けて調査し、重機掘削も複数回に分けて行った。10月7日に作業員による人力掘削を開始し、遺構検出を行った。ドローンによる略測平面用撮影は10月8日と10月27日に行い、個別遺構の記録や写真撮影等を実施し、10月22日と11月19日にラジコンヘリコプターによる空中写真測量を実施した。その後、一部追加調査や記録を行い、11月29日に資機材の洗浄、撤去作業を行って12月6日に完全撤収を確認して現地調査を完了した。

第3節 出土品の整理と報告書の作成

1. 出土品整理

出土遺物の整理作業は平成28年～令和4年度に実施した。作業は遺物の洗浄、注記、分類、接合、実測、実測図のトレース作業などである。また、上林イシガネ遺跡からは完形の小刀1点が出土しており、平成28年に株式会社吉田生物研究所に委託して金属製品の保存処理等を行った。

2. 報告書の作成

平成28年～令和4年度に出土品の整理作業と並行して実施した。挿図・図版の作成、出土遺物の写真撮影、原稿執筆、編集作業を行った。執筆作業は文化財担当職員が行い、報告書は令和5年3月に刊行した。

第2章 遺跡の位置と環境と過年度の成果

第1節 位置と地理的環境

野々市市は石川県のほぼ中央、石川平野の要地に位置する。市域は白山を源とする県下第一級河川手取川によって形成された手取川扇状地の北東扇中部から扇端部に位置しており、市内の標高は最も高い地点で標高約50m、最も低い地点で標高約10m前後である。市の大部分は扇状部にあたり、南高北低の緩やかな斜面となる地勢を有している。

市の大きさは南北約6.7km、東西約4.5km、面積13.56㎡と県内で最も面積の小さい自治体である。近年では、土地区画整理事業によって市街地の拡大が進み人口も増え続け、現在では約54,000人を数える。

昭和30年代までは郊外の農村地域であり主産業も稲作農業であったが、昭和40年代の高度経済成長期以降は、金沢市に隣接している地理的条件から商業施設や住宅地としての開発が進み、現在に至る。

本書で取り上げる上林イシガネ遺跡・末松遺跡は野々市市南西部に位置している。現在はほぼ平坦な地形であるが、古くは手取川から派生する多くの小河川が氾濫を繰り返すことによる凸凹の地形で、島状地形といわれる微高地と、河川である微低地、またその氾濫原が混在している。当区画整理地内に郷用水と富郷用水が流れていることからわかるように、遺跡からは古代から近世まで小河川の氾濫が繰り返されている様子が認められた。



第2図 野々市市位置図



第3図 遺跡分布図 (S=1/30,000)

0 S=1/30,000 500m

第1表 野々市市遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	種別	時代
1	御経塚シンデン遺跡 御経塚シンデン古墳群	御経塚	集落 古墳	縄文 弥生 古墳 中世
2	御経塚経塚	御経塚		
3	御経塚遺跡	御経塚	集落	縄文 弥生 古墳 古代 中世 近世
4	御経塚オウツ遺跡	御経塚 長池	集落	弥生 中世
5	横江古屋敷遺跡	長池	散布地 集落 古墳	弥生 古墳 古代
6	長池カネヅリ遺跡	長池	集落	弥生 古墳
7	長池ニシタンボ遺跡	長池	集落	縄文 弥生 古墳 中世 近世
8	長池キタノハシ遺跡	長池	集落	縄文 弥生 中世 近世
9	野代遺跡	野代	散布地	縄文
10	野代オノヤシキ遺跡	野代 二日市町	散布地	
11	二日市イシハジ遺跡	二日市町	集落 その他の墓	縄文 弥生 古墳 古代 中世 近世
12	三日市ヒガシタンボ遺跡	三日市町 稲部	集落	弥生 古代 中世
13	三日市A遺跡	三日市町 二日市町	集落 その他の墓	縄文 弥生 古代 中世 近世
14	稲部フクベエタ遺跡	稲部	散布地	
15	稲部シウ	稲部	散布地	
16	稲部シチタン遺跡	稲部	集落	古代
17	稲部ウラドリ遺跡	稲部	集落	古代
18	鹿ヶ部タ遺跡	鹿部 徳用町	集落	弥生 古代 中世 近世
19	豊沢藤田遺跡	鹿部	集落 散布地	縄文 古代 中世
20	徳用クヤダ遺跡	徳用町 徳町	集落	縄文 弥生 古代 中世
21	徳用チャヤ遺跡	徳用町	集落	
22	上宮寺跡	神野	社寺	中世
23	神野大塚古墳	神野	古墳	古墳
24	神野大塚遺跡	神野	集落	縄文 弥生
25	神野タチナカ遺跡 神野阪跡	神野	集落 城館	縄文 弥生 中世
26	神野ウマワタリ遺跡	神野	集落	弥生 中世
27	神野ヨカイテザカイ遺跡	神野	集落	弥生
28	横川一本町遺跡	本町	集落	弥生 古墳 中世
29	本町ジョウダ(遺跡)	本町		
30	本町ノバサンマイ遺跡	横京町	散布地	
31	本町シラガ遺跡	本町	散布地	
32	高橋セボネ遺跡	高橋町	散布地 集落	縄文 弥生 古墳 古代
33	山川館跡	高橋町 本町	散布地 城館	縄文 中世
34	高橋ウバガタ遺跡	高橋町	集落	弥生
35	原が丘ゴシヨ遺跡	原が丘 高橋町	散布地 集落	弥生 古代 中世
36	裏塚館跡	住吉町 原が丘	散布地 城館 その他の墓	縄文 古代 中世 近世
37	原が丘ヤラダ遺跡	原が丘	散布地 集落	縄文 古代 中世
38	原が丘ハワイゴ遺跡	原が丘	散布地 集落	縄文 弥生 古代 中世
39	菅原キツネヤヅ遺跡	菅原町	集落	中世 近世
40	堀内館跡	堀内	散布地 城館	縄文 中世 近世
41	木平寺オドノカ遺跡	木平寺	集落	古代 中世 近世
42	田尻シタ遺跡	田尻町	集落	縄文 中世 近世
43	田尻ナフシロ遺跡	田尻町	集落	縄文 中世
44	蓮花寺アカグロ遺跡	蓮花寺町	集落	縄文 古代 中世
45	田中ノダ遺跡	蓮花寺町 穂町	集落	弥生 古墳
46	徳久ジョウダ遺跡	穂町	集落	弥生 古墳 古代 中世
47	三林館跡	下林	城館	中世
48	下林ノンジョウウケ遺跡	下林	集落	古代 中世
49	三納トヘイダゴシ遺跡	三納	集落	縄文 古代 中世
50	三納アラミヤ遺跡	三納 矢作 粟田	集落	縄文 古代 中世
51	藤平田ノカシキ遺跡	藤平田	集落	弥生 古代 中世
52	三納ニシヨリ遺跡	三納 粟田	集落	縄文 弥生 中世 近世
53	粟田遺跡	粟田 藤平 中林	集落	縄文 古代 中世 近世
54	清金アガト遺跡	清金 末松	散布地 集落	縄文 弥生 古墳 古代 中世
55	末松菅原遺跡	清金	集落 城館	古代 中世
56	末松福正寺遺跡 福正寺跡	末松	集落 社寺	古墳 古代 中世
57	末松ダイカン遺跡	末松	集落	縄文 弥生 古墳 古代 中世
58	末松B遺跡	末松	集落	古代
59	末松庵寺跡	末松	散布地 集落 社寺	縄文 弥生 古墳 古代 中世 近世
60	古元堂館跡	末松	城館	
61	末松C遺跡	末松	散布地	古代
62	末松古墳	末松	古墳	古墳
63	末松館跡	末松	城館	中世
64	末松遺跡	末松 清金 中林	散布地 集落 その他の墓	縄文 弥生 古墳 古代 中世
65	大館館跡	末松	散布地 城館	古代 中世
66	末松前跡	末松	城館	
67	法壽寺跡	末松	社寺	中世
68	末松しりわん遺跡	末松	集落	古代 近世
69	下新庄ララ子遺跡	新庄 中林 上林	集落	古代
70	下新庄タナカダ遺跡	新庄	集落	古代
71	下新庄フルナフシロ遺跡	新庄	散布地 集落	弥生 古代
72	上林新庄遺跡	上林 新庄	集落	古墳 古代
73	上林古墳	新庄	古墳	古墳
74	上林テラダ遺跡	上林	集落	古代
75	上新庄ニシワラ遺跡	新庄 上林	集落	弥生 古墳 古代
76	新庄カキノキダ遺跡	新庄	集落	古墳 中世
77	上新庄チャソバ遺跡	新庄	集落 古墳	弥生 古墳 古代
78	上林遺跡	上林	集落	弥生 古代
79	安養寺遺跡	上林	集落	弥生 古代
80	上林キドグ子遺跡	上林	集落	
81	上林イシガネ遺跡	上林	集落	古代 中世

第2節 歴史的環境

縄文時代では扇状地の地下を流れる豊かな伏流水に恵まれた地域である市域北部の手取川扇状地扇端部に縄文時代後・晩期の集落遺跡が数多く分布する。なかでも国指定史跡御経塚遺跡(3)は周辺集落の母村的役割であったと考えられ、出土品の一部は重要文化財に指定されている。一方末松遺跡周辺では明確な縄文遺跡はないが、北西に約2km離れた長竹遺跡・乾町遺跡(白山市)では縄文晩期末葉の集落跡が確認されており、また北東約2km離れた粟田遺跡(53)では石器の母岩と剥片が集中する石礫原が確認されたことから、石器製作等の生産活動であったと考えられる。生活痕跡は確認されていないものの、周辺の遺跡の分布状況から当地が生活圏内であった可能性は高い。

弥生時代前・中期の遺跡は少ないが、弥生時代後期になると市域各所に数多くの集落遺跡が形成される。末松遺跡周辺では末松廃寺跡から保存状態の良い弥生後期後半の甕が出土していることから、未確認であるが弥生集落が存在していると考えられる。

古墳時代の遺跡は少なく、集落遺跡は数えるほどであるが、市域北部の御経塚シンデン遺跡(1)からは古墳時代前期の集落跡とともに前方後方墳と方墳で構成された御経塚シンデン古墳群が確認されている。

また末松遺跡から南東1.8kmにある上新庄チャンバチ遺跡(77)から古墳時代前期の前方後方墳1基、方墳1基が確認されている。

古墳時代後期末葉になると、市域南部において市内唯一の横穴式石室である上林古墳(73)が造られるほか、末松大兄八幡神社境内の方墳である末松古墳(62)や末松遺跡(64)から周溝跡が数基認められるなど、狭い範囲に複数基の小墳墓が造られたことがわかっていく。

古墳時代の集落は南東約1kmにある上新庄ニシウラ遺跡(75)で古墳時代前期の集落が確認されているほか、末松遺跡内から古墳時代中期の竪穴建物が確認されている。

古代は、末松遺跡周辺は国指定史跡末松廃寺跡を筆頭に多くの遺跡が分布し、末松遺跡群とも称される。

7世紀後半に法起寺式の伽藍配置をもつ末松廃寺が創建され、末松廃寺周辺に7世紀後半～8世紀にかけて集落が形成される。末松遺跡群より南東側に分布する遺跡群(上林新庄遺跡(72)、下新庄アラチ遺跡(69)、粟田遺跡(53)等)では、8世紀から9世紀にかけて一帯の大規模開発が最盛期を迎える。

末松遺跡群では、末松ダイカン遺跡(57)からは同時期の近江系と丹波系の土師器甕を伴う竪穴建物が複数確認されている他、製塩土器や輪羽口なども出土している。末松福正寺遺跡(56)からは竪穴建物が複数確認されており、壁に柱と考えられる痕跡が認められるものやカマドの一部であると考えられる凝灰岩が出土している。なお、両遺跡で確認された竪穴建物は南東角にカマドを設ける青野型住居である。清金アगतウ遺跡(54)からは竪穴建物と掘立柱建物が多数確認されており、包含層内からではあるが土馬の脚部が出土している。これらのことから、末松遺跡群で確認される集落遺跡は、そもそもの在地集落が居住地として勢力が拡大して規模が大きくなったのではなく、末松廃寺の建立に際して外部からの人的流入があったと考えられる特徴的な遺跡群である。

このほか、国指定史跡東大寺領横江荘遺跡 荘家跡上荒屋遺跡(白山市・金沢市)といった初期荘園遺跡が形成され、古代北陸道が確認された三日市A遺跡(13)からは道路方向を意識した大型掘立柱建物が認められる。

中世になると扇状地開発に伴って林氏や富樫氏などの在地領主武士団が興った。市内では数多くの館跡が見つかっており(富樫館跡(36)、押野館跡(25)等)、在地領主層の館跡とその周辺に広がる宅地区画などの様相がわかる。

生活集落は、14世紀頃まではごく小さな集団であり、散村的なものであったようであるが、その後大きく集村化する。この集落が、現在の市内旧村の原形であり、今も居住域単位として機能している。

末松遺跡周辺では清金アगतウ遺跡から13世紀前半の金属製品(鉄製犁先)や土師器皿を使用した祭祀遺構があるほかは14・15世紀の溝等が確認される程度であり、明確な集落跡は認められていなかったが、今調査のうち、令和2年度に中世集落の一端を確認できた。これは後に述べる。

近世には、農村が点在する金沢城下の近郊地かつ北国街道の宿場町のひとつであり、金沢城下から京都へ向かう北国街道沿いには駅馬などが整えられた「野々市宿」が置かれ、交通の要所としても栄えた。

第3節 過年度の調査成果

末松遺跡群は、石川県立大学や国道157号線敷設の関係で末松廃寺跡周辺の開発が進んだ際に発見された遺跡群である。現在の末松遺跡は、もとは「末松A遺跡」であって、平成14年以降からは末松遺跡と呼称が統一されている。周辺の末松B遺跡、末松C遺跡は令和4年時点では継続して利用されている。

以下には、末松A遺跡及び末松遺跡の過去の調査成果の概要を記す。詳しくは各報告書を参照されたい。

昭和60(1985)～昭和62(1987)年には、一般国道157号鶴来バイパス改築工事に先立ち、計9,400㎡の発掘調査が行われた。7世紀後様から8世紀前半の堅穴建物を中心とした集落跡が確認された。この堅穴建物は所謂「青野型住居」と呼称される住居形式で、舟波型や近江型の土師器煮炊き具も出土するなど特定の集団が居住していたことがわかった。それに続く8世紀後半以降の掘立柱建物を中心とした集落跡も確認された。また、同時期の礫を用いた護岸施設をもつ大溝も確認された。(柿田・布尾2005)

昭和62(1987)年に石川県農業短期大学(現石川県立大学)の農業資源研究所増築に先立ち、315㎡の発掘調査が行われ、古代の高地と道路状遺構が確認された。(北野1989)

平成4(1992)年に国道157号線西側にて、民間開発に伴う80㎡の発掘調査が行われ、その際には8世紀中ごろの土坑やピットが確認された。(横山2001)

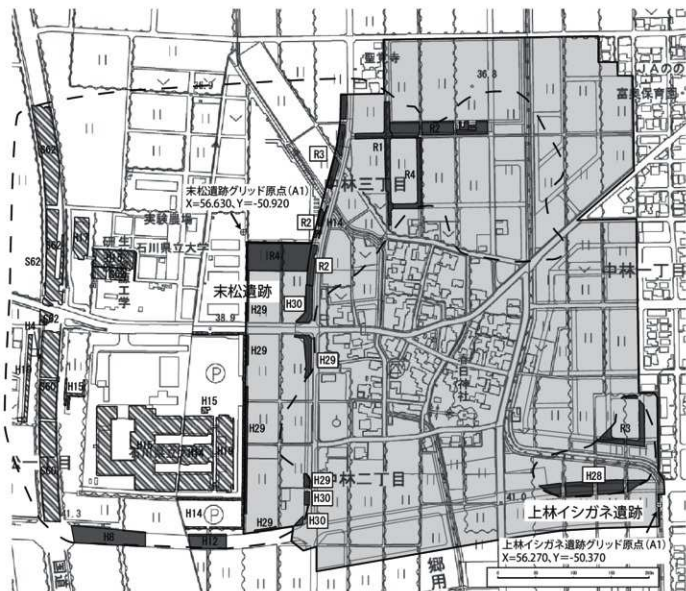
平成8・12(1996・2000)年には、ふるさと農道緊急整備事業として2,600㎡の発掘調査が行われた。遺構は溝や土坑で、遺物も少ない。集落の縁辺部と考えられる。(野々市町教育委員会2017)

平成10(1998)年には農村活性化住環境整備事業として、国道157号線と末松大兄八幡神社の間に800㎡の調査が行われ、微高地と微低地の間を9世紀以降の2間×3間の方形掘方を持つ掘立柱建物1棟、8世紀の堅穴建物1棟、中世の畝状遺構や多数の土坑・ピット、溝跡、河川跡が確認された。(安・立原・藤井2000)

平成14・15(2002・2003)年には、石川県立大学整備工事として14,685㎡の発掘調査が行われ、7世紀後葉から10世紀の集落跡が確認された。堅穴建物や掘立柱建物は確認されているが、遺構は北部に集中し、南部は旧河道や荒地である。明確な堅穴建物や掘立柱建物と判断されたものは少ないが多量の土坑やピットが検出されている。また、多数の土坑に切られて残存状態は良好ではないものの、古墳の周溝跡が複数確認された。また、中世の畝溝に切られて明確ではないものの、東西方向の道路状遺構なども確認された。(財)石川県埋蔵文化財センター2006)

平成17・19(2005・2007)年には、石川県立大学大学院棟建設工事及び大学連携インキュベータ整備工事として3,500㎡の発掘調査が行われた。平成17年調査は、遺構は希薄であり、遺物は少ないが、調査地南東で行われた昭和62年及び平成15年に行った際に確認された道路状遺構の延長にあたると思われる8世紀後半から9世紀の側溝の一部が確認されている。

平成19年調査は、墳墓の周溝と考えられる円形・方形の溝が複数確認された。この周溝跡は西隣の平成15年調査で確認された周溝と群を成す様相を呈している。7世紀前半の堅穴状遺構や奈良時代以降の畝状遺構、中世以降の集石土坑のほか、調査区を南北に縦断する道路状遺構と、西隣の平成14年調査で確認された東西方向の道路状遺構の延長部分も確認された。(財)石川県埋蔵文化財センター2009)



- 遺跡範囲
- 土地区画整理事業施行範囲
- 野々市市発掘調査範囲
- ▨ 石川県教育委員会発掘調査範囲
- で示した調査区は本書で報告

第4図 末松遺跡・上林インシガネ遺跡発掘調査範囲図

上林イシガネ遺跡

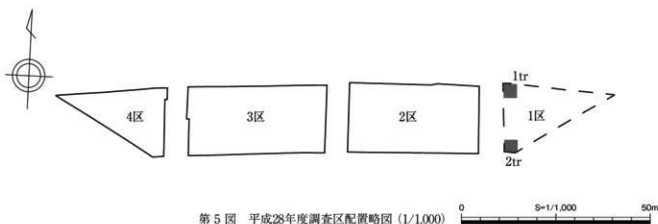
第3章 平成28(2016)年度の調査成果

第1節 調査の概要

1. 調査区と調査方法

調査区は上林イシガネ遺跡南辺に位置する。上林イシガネ遺跡は富樫用水の周辺に広がる遺跡であって、その広がり、富樫用水の南北方向の流れが一旦西方向に折れ、中林集落に当たる手前で再び北方向に流れを変える周辺にあたる。当地域は近世以降、農業が主産業であって大規模な後世の削平などはないが、富樫用水が蛇行するその中にあることから、古くからの小河川等の後背湿地や氾濫原などの影響を受けている可能性があると考えられた。

調査区は1～4区に分けて調査を行った(第5図)。これは当時の農業水路の関係で区切ったもので、地形等は関係ない。また、遺構番号は各調査区で遺構種別ごとに付番している。



第5図 平成28年度調査区配置略図(1/1,000)

第2節 遺構

1. 1区(第6図)

1区は、重機掘削の時点で自然河川の後背湿地であると判断した。現表土・床土の下はグライ化した細砂・微砂が主体となる粘質土層が堆積しており、掘削中は壁面から湧水して壁が崩落する危険があった。

このことから1区は土層断面のみを記録するトレンチ調査に止めた。なお、当初は1区北東隅に3トレンチも設定したものの、掘削中に壁面が崩壊して記録ができなかったことから、ここには1・2トレンチの成果のみを掲載する。

(1) 1トレンチ

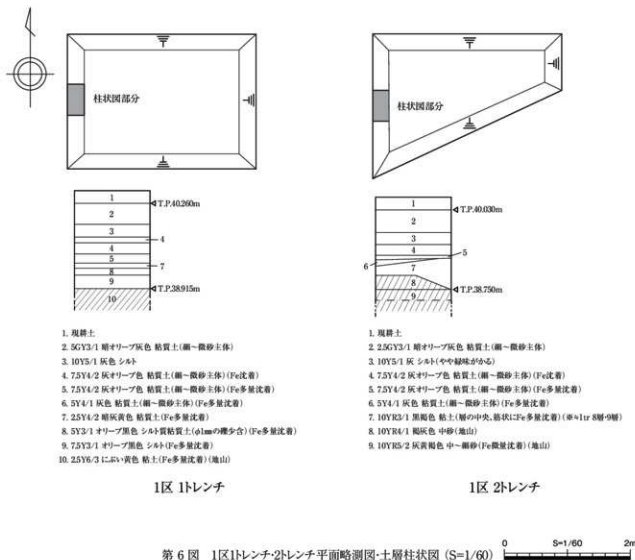
東西3.0m×南北2.0mのトレンチである。層位は、厚さ約0.2mの現代耕土以下に約1.0mのグライ化した細砂・微砂主体の粘質土が堆積する。グライ化した粘質土層には鉄分が多量に沈着し、しまりも良い。水流の痕跡が堆積土中に認められないことから後背湿地であったことがわかる。下層には約0.3mのシルト質粘質土の植物腐植土層が堆積する。遺構・遺物は確認できなかった。

(2) 2トレンチ

東西3.0m×南北2.0mのトレンチである。層位は、厚さ約0.2mの現代耕土以下に0.7～0.9mのグライ化した細砂・微砂主体の粘質土が堆積する。1トレンチと同じくグライ化した粘質土層には鉄分が多量に沈着し、しまりも良い。同じく水流の痕跡が堆積土中に認められなかった。下層には0.3～0.5mの粘土となった植物腐植土層が堆積する。層中では縦筋状に多量の鉄物が沈着し、植物根に付着した褐鉄鉱のような形状を有していた。1トレンチと同じく遺

構・遺物が確認できなかった。

これらのことから、1区付近には現在の林口川と同じように河川が近くあって、当地はその後背湿地であったと考えられる。



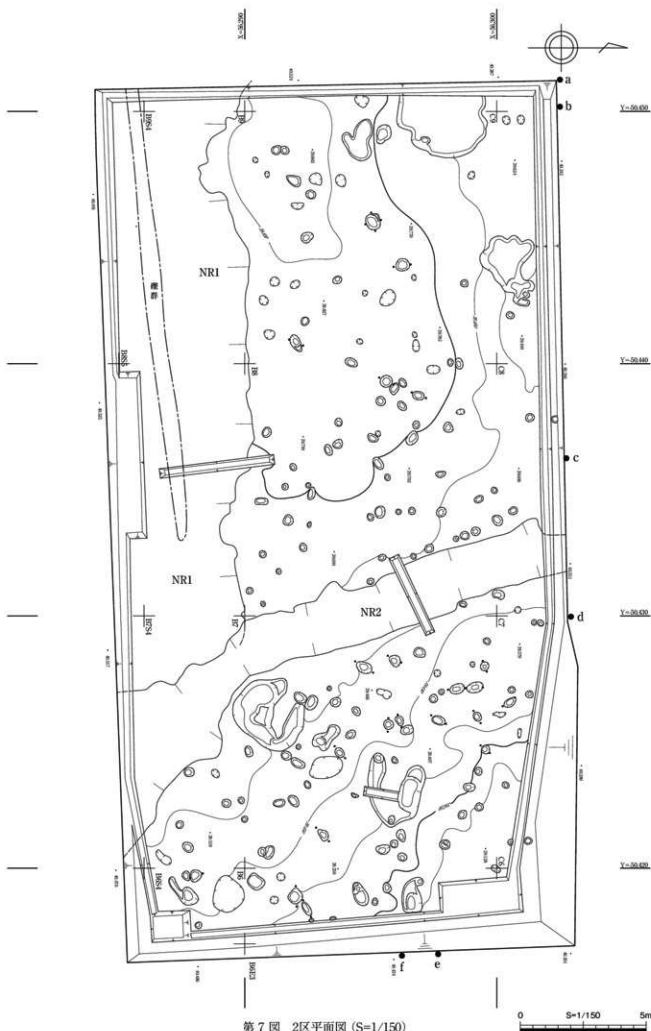
2. 2区 (第7・8区)

東西約33m×南北約17.5mの調査区である。調査前は平坦な水田であったが、遺構を検出した旧地形は現在と大きく異なる。南高北低の緩やかな斜面であることは野々市市の地勢と同じくするが、調査区北西の標高が約39.65m、調査区北東の標高が約39.15mと、約30mの東西距離中に0.5mもの標高差があり、東に向かって一気に落ち込む地形である。この落ち込みを鞍部としないことは、この落ち込みを西端として東側には1区で確認した後背湿地になると判断したことによる。

自然河川であるNR1・2の他、SK・Pなどの人工的な掘削坑は確認できるものの、柱痕などは確認できなかった。標高が高い調査区西半では検出した地山に巨礫が多く含まれていた。大きな方形ないしは不定形土坑が散見されるが、これらは深さ10cm未満の自然な凹みである。標高が低い調査区東半では検出した地山に礫は含まれていなかった。いくつかの馬蹄形をした凹みを確認したが、埋土の堆積状況からこれらは風倒木痕であると判断した。

SK・Pは地山の上に堆積する黒色腐植土堆積を切るようであるが(第8図北壁土層断面参照)、遺構埋土が黒色腐植土層の再堆積であることから平面で検出することは困難であり、検出面は全て地山直上で行った。

遺物は土師質の小片などが少量出土したものの、年代等の判断ができるものではなかった。



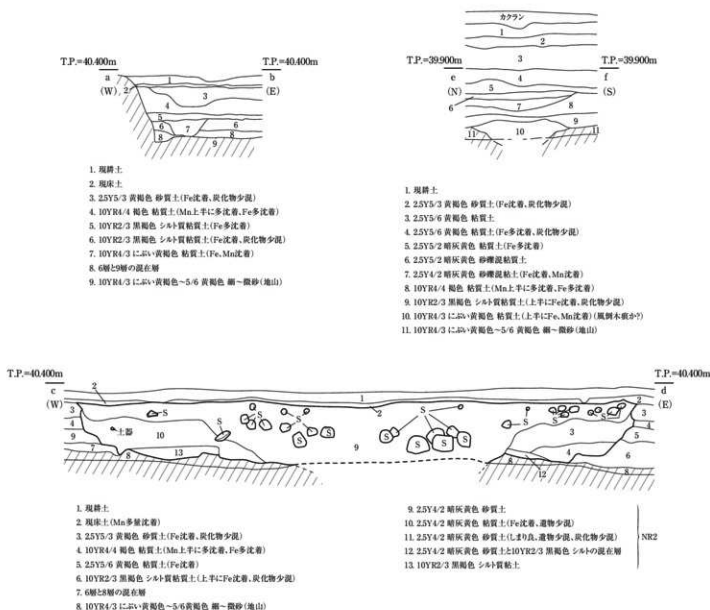
NR1

調査区南側4分の1を占める近世の自然河川である。現耕作土・床土直下で遺構上端が検出でき、拳大の礫が多く混じる。後に述べる3・4区でもNR1の延長が確認できることから、上林イシガネ遺跡の南限となる東西方向にのびる自然流路であると考えられる。

調査区内で検出したのは流路の北肩であり、南肩にあたる部分は調査区外であることから、NR1全体の幅は不明である。

NR2

調査区のはほぼ中央を流れる近代流路である。NR1と同じく現耕作土・床土直下で遺構が検出できるが、NR1を切ることで、NR2の埋土が周囲の自然堆積土を千切るようにまきこみ、かつ人頭大礫が多量に混じること、近代陶磁器などの遺物少量認められることから、河川の氾濫による鉄砲水のようなものであったと考えられる。



第8図 調査区北壁・東壁土層断面図 (S=1/40)

3. 3区 (第9～15図)

東西約35m×南北約17.5mの調査区で、2区と異なり調査区内の標高は39.80m前後でフラットである。

NR1が調査区南側を占める他、SK・Pが地山直上堆積の黒色腐植土堆積を切っている点や風倒木痕が多い点は2区と同じであるが、地山に礫が含まれなくなるグリッドC11付近より以西は黒色腐植土層が厚くなる。そしてグリッドB12N9より以西では黒色腐植土層が明確に複層化してそれぞれが遺構面として認識できるようになり、上層遺構面と下層遺構面の2面に分けて調査を行った。

上層遺構面は遺構埋土と遺構面の違いが明確である。小穴を複数基と土坑を2基、区画のためと考えられる溝を1条検出した。また遺構からは遺物も多く出土した。

下層遺構面は遺構埋土が黒色腐植土層の再堆積で、調査区壁面では地山の上に堆積する黒色腐植土堆積層を切っていることを確認できるが、平面で検出することは困難であり、検出は全て地山直上で行った。埋土はすべて単層であり、土師質の小片や須恵器の小片などが少量出土したものの、年代を特定できるものはなかった。

よって、下に記す遺構は全て上層遺構面のものである。

SD1 (第12・13・16図)

南北方向に2条、東西方向に1条延びる溝である。南北溝は、東側溝をSD1(東側)、西側溝をSD1(西側)、東西溝をSD1(南側)とした。

SD1(東側)は長さ12mの溝で、N10°-Wと西に振っている。当初遺構があることに気づかず北側の一部上半を欠損させてしまったが、掘方が明瞭なところでは、溝幅約1.0m、深さ0.3～0.4mでU字形の掘方である。埋土の最下層ではラミナが認められることから、継続的な水の流れがあった後に埋没したことがわかった。溝底からは全長25.7cmの小刀が出土している。小刀は完形であり、ラミナが認められる堆積層中に置かれた状態で出土したことから、溝に水が流れている段階で意図的に溝底に小刀を置き納める行為がなされたと考えられる。(第13図)

SD1(西側)は長さ11mの溝で、N10°-Wと西に振っている。掘方が明瞭なところでは、溝幅約0.9m、深さ約0.2mで台形の掘方である。SD1(西側)の南端上半はNR1によって切られているが、SD1(西側)の南全体がNR1に削られたのではなく、SD1(西側)の南限が当初よりこの状態であったと考えられる。(第12図)

SD1(南側)は長さ8mの溝で、2条の南北溝を結ぶ溝で切り合うことはない。掘方が明瞭なところでは、溝幅約0.8m、深さ0.2mでU字形の掘方である。(第12図)

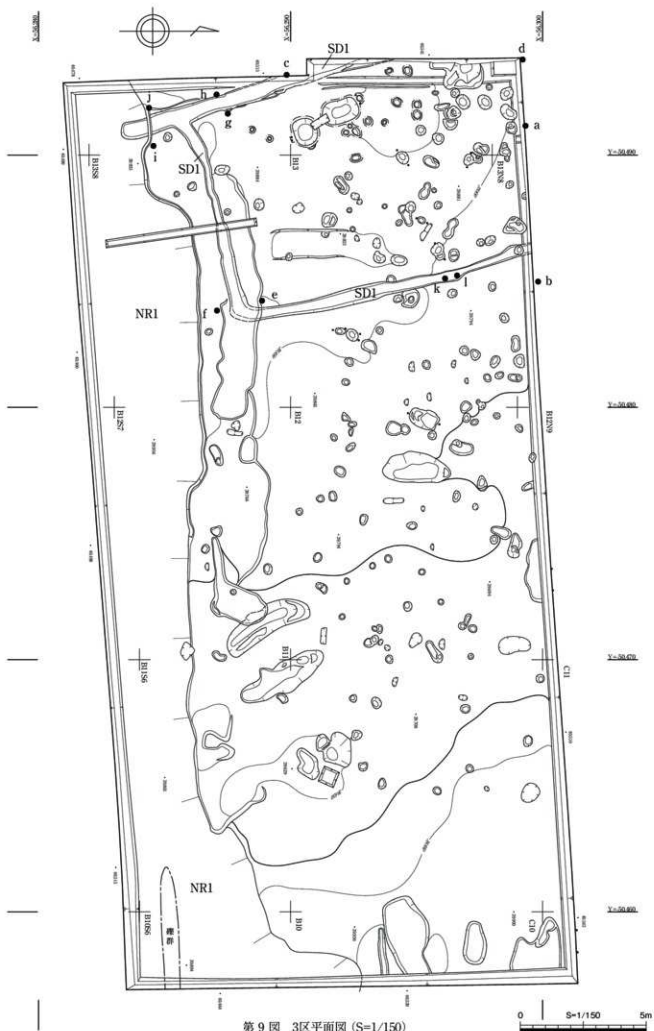
以上のことから、SD1は区画溝であって、その区画内にピットや土坑などが集中している。またSD1埋没後はその上に厚さ約20cmの盛土整地が行われており、区画溝の特殊性を示すといえる。(第11図)

SD1からは14世紀後半の土師器皿が出土しており、区画溝が機能したのほぼ同時期であると考えられる。

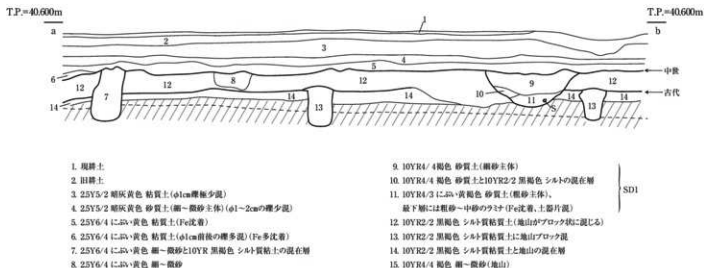
SK25・26 (第14図)

SK25は直径14cm、短径90cm、深さ50cmの楕円形土坑である。遺構検出後に約10cm程度全体を下げたところ、20個程度の拳大～人頭大の巨礫を土坑内一面で確認した。その後の遺構掘削を行う段階で、調査担当者の指示に誤りがあり、石積部分の図面及び写真等の記録を仕損じた。よって土層断面の石積部分については担当者のスケッチを基に復元したものである。石積みの下からは底部が欠損したほぼ完形の珠洲焼の播鉢が口縁を上にして出土していることから、何らかの土器埋納遺構であると考えられる。

SK26は直径104cm、短径90cm、深さ30cmの円形土坑である。SK26と並んでおり、埋土も同じであるが遺物等は出土していない。



第9图 3区平面图 (S=1/150)



第10図 3区北壁土層断面図 (S=1/40)

4.4区 (第16・17図)

東西約28m×南北約18mの三角形をした調査区で、3区と異なり調査区内の標高は東高西低である。3区西端の地山標高が39.80m前後であったが、農業水路を挟んで西隣する4区東端の標高は40.0m前後であり、1～4区の中で最も標高が高い。調査区西端は標高が約39.5m前後である。

遺構は希薄であるが、4区の特徴として、他調査区にて確認された黒色腐植土層が極薄い、または全く確認できなかった。また、地山の標高が高いため、現地表面から地山面までが約30cm程度であったこともあり、遺構面の標高が高い4区は、東隣の3区と異なり、近代以降の攪乱が大きく影響を及ぼしている特徴をもつ。

遺構検出面はすべて地山直上で行った。

NR1 (第15図)

調査区東側の南北方向に延びる幅約2.5m～5.0m、深さ0.4mの近世の自然河川である。現耕土のほぼ直下で遺構を検出した。

NR1は2・3区の南側を占めていたNR1と同じであり、2・3区のNR1が当調査区南東付近で大きく流れの向きを変えて南北方向の自然流路になったと考えられる。この流れの変化の理由については不明であるが、先述したように東側の地山が急な斜度をもって標高が高くなることが一因とも考えられる。

SD1 (第16図)

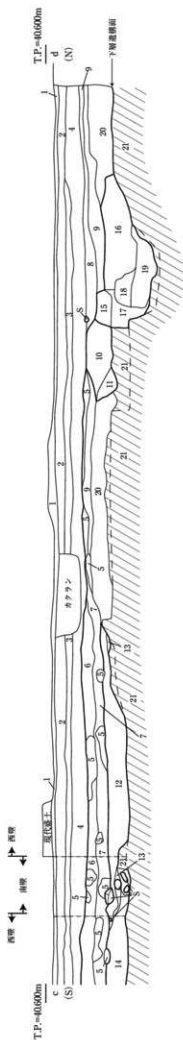
南北方向に延びる1条の溝である。3区で検出した上層遺構面の区画溝であるSD1 (東側)・SD1 (西側)と同規模の溝で、長さ15.0m以上、N10°-Wと西に振っており、軸方向も類似している。このことから、これら3条の溝が本来の区画溝であったと考えられる。

溝幅は約50cm、深さ約15cmで台形の掘方である。現表土直下に遺構上端が確認でき、その壁面断面でみると、本来の溝幅は70cm、深さは25cmでより明確な台形であったことがわかる。遺構埋土の最下層は粗砂層で、ラミナは確認できないが3区SD1 (東側)の埋土と土質が類似する。

遺物は出土しているが、年代を決定できるものではない。

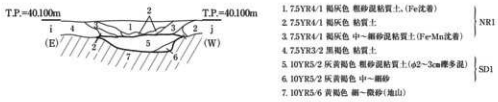
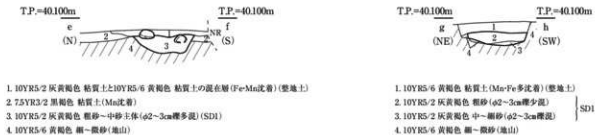
SK1 (第17図)

4区のうち、明らかに人為的な土坑はこれだけである。直径2.5m、深さ0.48mの土坑である。調査区北壁に接しているが、出土した遺物が近世磁器であったため、これ調査区の拡張は不要と考え、記録に留めた。

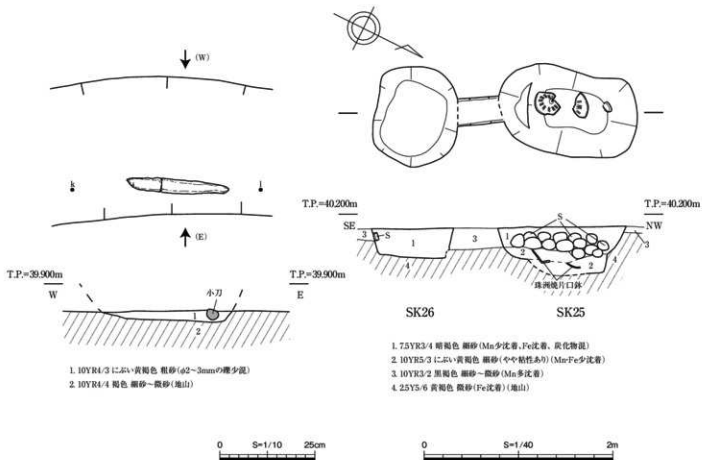
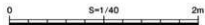


1. 凝結土
 2. 砂礫土
 3. 2.5Y7.2 相区黄色 粘質土 (Fe 沈着)
 4. 2.5Y5.2 相区黄色 粘質土 (6.1mm 層厚少量)
 5. 2.5Y6.4 に近い黄色 礫-細砂
 6. 10Y65.6 黄褐色 粘質土
 7. 10Y65.3 に近い黄褐色 砂礫粘質土 (Mn 沈着)
 8. 2.5Y6.4 に近い黄色 粘質土 (Fe 沈着)
 9. 2.5Y6.4 に近い黄色 粘質土と 10Y72.2 黄褐色 シルトの混在層 (6.1mm 層厚の礫多量、Fe 多沈着)
 10. 10Y81.4 褐色 砂礫粘質土と 2.5Y6.4 に近い黄色 粘質土の混在層
 11. 2.5Y6.2 相区黄色 砂質土 (中-細砂主体、Mn 沈着)
12. 10Y81.3 に近い黄褐色 砂質土 (細砂主体、土器片混)
 13. 10Y81.4 褐色 砂質土 (細砂主体)
 14. 10Y81.1 褐色 細砂主体砂礫層 (6.5mm 層厚の礫多量)
 15. 10Y82.2 黄褐色 シルト質粘質土と 堆山の混在層
 16. 10Y82.2 黄褐色 シルト
 17. 10Y82.2 黄褐色 シルト質粘質土と 堆山の混在層 (Mn 沈着)
 18. 10Y82.2 黄褐色 シルト質粘質土と 堆山の混在層
 19. 10Y82.2 黄褐色 シルト質粘質土と 堆山の混在層
 20. 10Y82.2 黄褐色 シルト質粘質土 (6.2-3cm の堆山アフラワラ混)
 21. 10Y81.4 褐色 礫-細砂 (堆山)

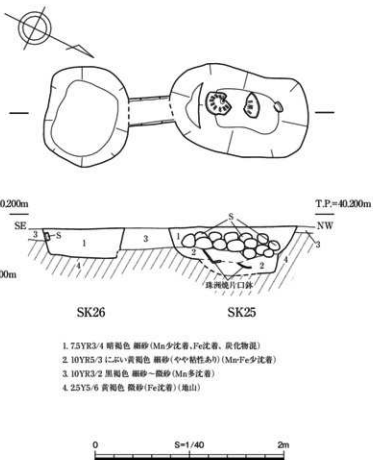
第 11 図 3区西崖土層断面図 (S=1/40)



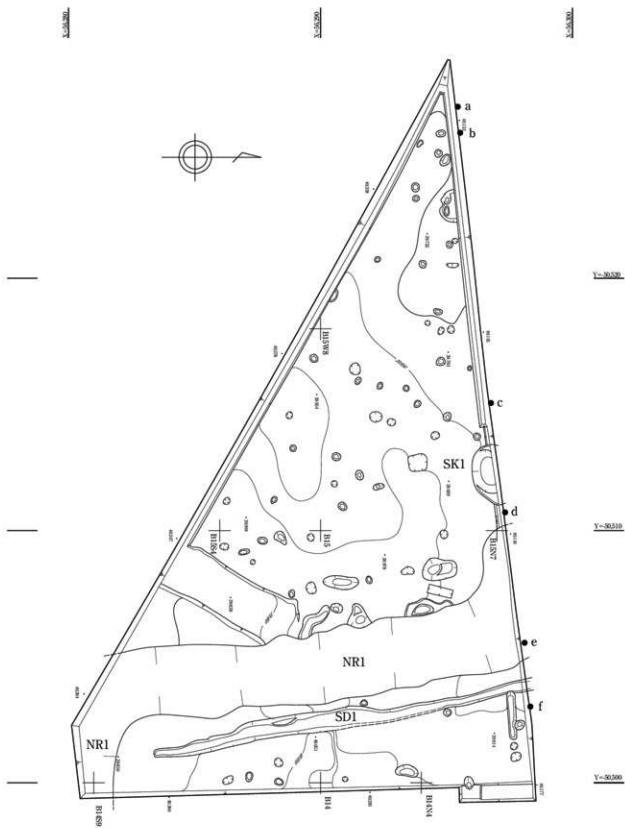
第 12 図 3区 SD1 土層断面図 (S=1/40)



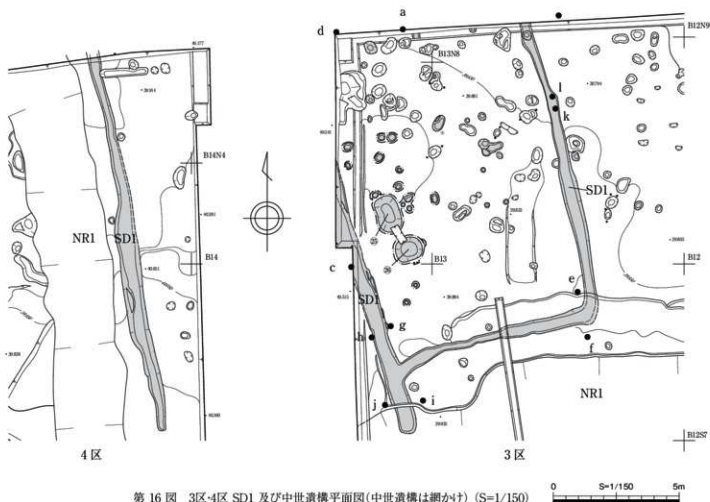
第 13 図 3区 SD1 小刀出土平面-断面図 (S=1/10)



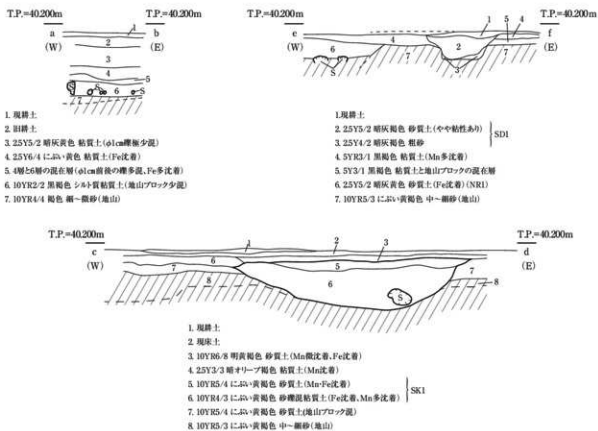
第 14 図 SK25・26 平面-断面図 (S=1/40)



第 15 图 4区平面图 (S=1/150)



第16図 3区・4区 SD1 及び中世遺構平面図(中世遺構は網かケ) (S=1/150)



第17図 4区北壁土層断面図 (S=1/40)

第3節 出土遺物(第18・19図)

1は調査区の含包層に混入していた縄文土器で、八日市新保式の浅鉢小片である。

2～19は3区の上層遺構面から出土した遺物である。

2～4はピットから出土した土師器である。2がもっとも残存率がよく、14世紀後半頃のものと考えられる。

5・6は3区の整地土から出土した土器で、6の須恵器頸部は混入品であると思われるが、5は古瀬戸灰釉平塚の口縁部である。

7～10はSK25から出土した土器である。10は祭祀的埋置をされていた珠洲焼の播鉢である。図版15でみてわかるとおり、実物の内面は使用痕跡が強く、卸目は摩耗している。また、底部の欠損は意図的な穿孔というよりも使用による欠損で、それを利用したとも考えられる。14世紀前半のものとする。

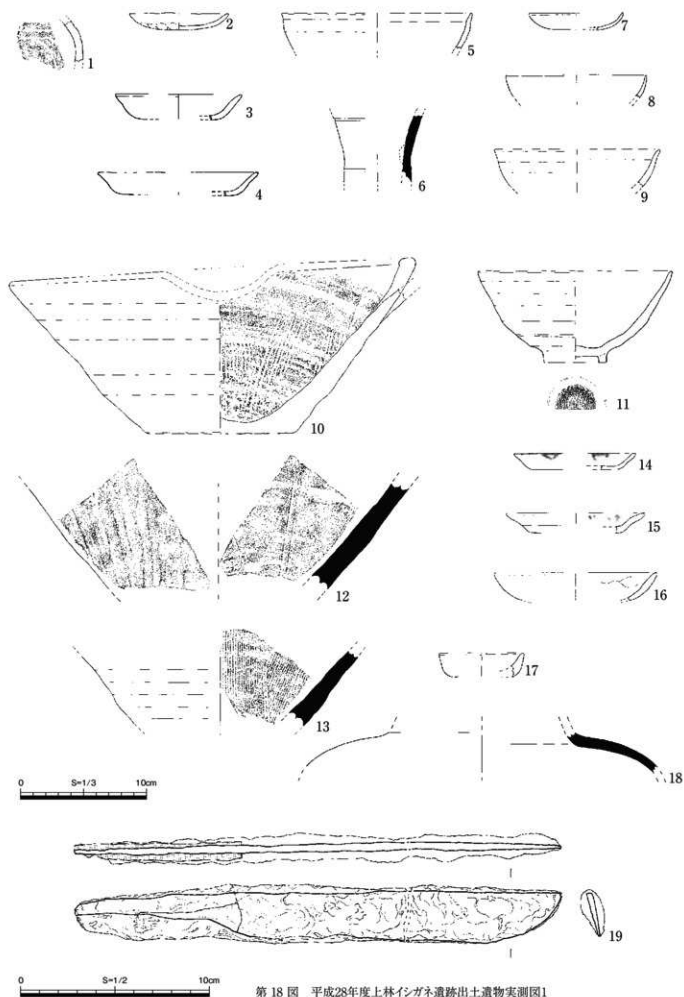
11～13は3区SD1(西側)から出土した土器である。11の古瀬戸灰釉平塚は調査区の拡張中に出土したもので、SD1の最上層から出土したか整地土から出土したか不明瞭な点がある。しかし、漆継痕跡が明瞭に残り全体の1/2が出土した。高台は付高台で、体部下半に回転ケズリの痕跡を残す。14世紀後半頃のものと考えられる。

14～16は3区SD1(南側)から出土した土師器で、14・15は灯明皿である。これも14世紀後半頃のものと考えられる。

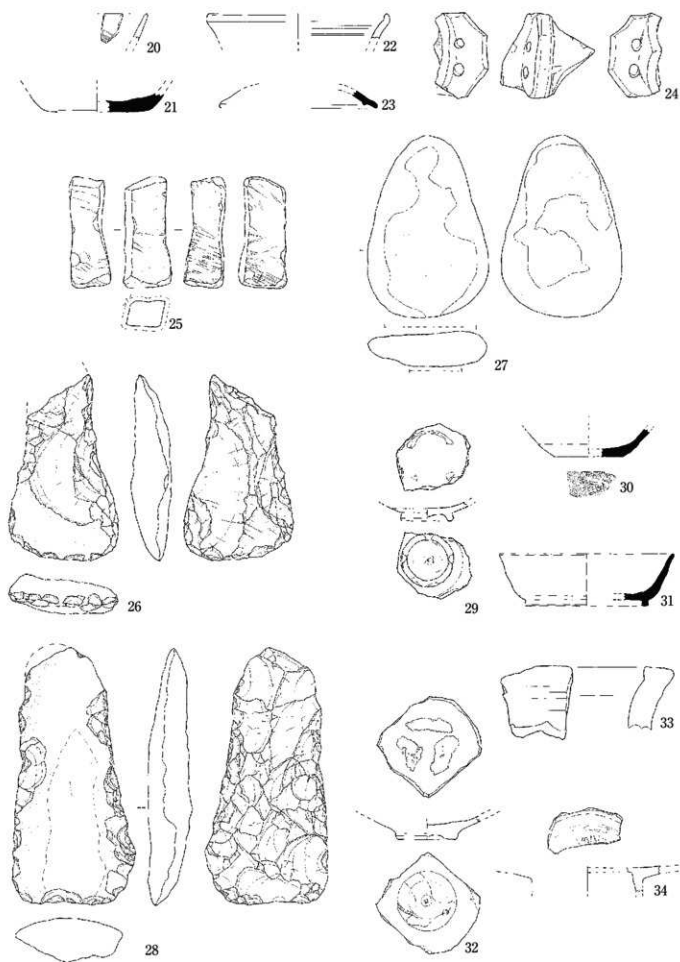
17～19は3区SD1(東側)から出土した遺物で、19の小刀については先に述べたとおりである。

25は3区の上層遺構面検出の際に出土した砥石である。

その他は状態の良いもの、年代の基準となるものを選んで掲載した。



第 18 図 平成28年度上林イシガネ遺跡出土土遺物実測図1



第19図 平成28年度上林イシガネ遺跡出土遺物実測図2

0 S=1/3 10cm

第2表 平成28年度遺物観察表(土器)

番号	遺構 出土位置	器種	口径 (mm)	残存高 (mm)	底径 (mm)	調整(外)		調整(内)	色調(外) 色調(内)	残存率	備考
						調整(外)	調整(内)				
1	3K 西側拡張	縄文土器 浅鉢 口縁	—	—	—	調整(外)	調整(内)	沈線文、縄文	10YR7/4C2灰・黄橙	小片	沈線
	調整(外)					調整(内)	無文				
2	3K 中世P	土師器 皿	80.0	130	—	調整(外)	調整(内)	ナデ	7.5YR6/6橙	1/6	全体に歪みあり
	調整(外)					調整(内)	ナデ、ユビオサエ	2.5YR7/6橙			
3	3K 中世P	土師器 皿	100.0	200	—	調整(外)	調整(内)	ナデ	5YR7/6橙	口縁1/7	
	調整(外)					調整(内)	ナデ	5YR7/6橙			
4	3K 中世P	土師器 皿	120.0	180	—	調整(外)	調整(内)	ナデ	7.5YR7/3C2灰・橙	1/12	
	調整(外)					調整(内)	ナデ	7.5YR8/3浅黄橙			
5	3K 中世整地土	陶器(古瀬戸) 埴	150.0	—	—	調整(外)	調整(内)	回転ナデ	5Y7/2灰白	1/12	
	調整(外)					調整(内)	回転ナデ	5Y7/2灰白			
6	3K 中世整地土	須恵器 瓶 頸部	—	—	—	調整(外)	調整(内)	回転ナデ	5Y4/2灰オリーブ	頸部1/4	沈線2条 自然釉
	調整(外)					調整(内)	回転ナデ	5Y4/3暗オリーブ(自然釉)			
7	3K SK 25	土師器 皿	74.0	130	460	調整(外)	調整(内)	ナデ	7.5YR7/4C2灰・橙	1/3	
	調整(外)					調整(内)	ナデ	7.5YR7/4C2灰・橙			
8	3K SK 25	土師器 皿	(1120)	—	—	調整(外)	調整(内)	ナデ	5YR7/6橙	小片	
	調整(外)					調整(内)	ナデ	5YR7/6橙			
9	3K SK 25	陶器(古瀬戸) 天目茶埴	(1300)	—	—	調整(外)	調整(内)	回転ナデ	10YR2/1黒	口縁部小片	鉄軸
	調整(外)					調整(内)	回転ナデ	7.5YR3/3暗褐			
10	3K SK 25	珠洲焼 播鉢	325.0	141.0	1200	調整(外)	調整(内)	回転ナデ	2.5Y7/1灰白	ほぼ完形	底部へつ切り直 片口欠損、跡目11本
	調整(外)					調整(内)	回転ナデ	10YR7/2C2灰・黄橙			
11	3K SD 1 (西濃)	陶器(古瀬戸) 埴	154.0	73.0	500	調整(外)	調整(内)	回転ナデ	7.5Y7/2灰白	1/2	底部赤切り痕あり 漆継ぎ痕断面に残る
	調整(外)					調整(内)	回転ナデ	7.5Y7/2灰白			
12	3K SD 1 (西濃)	加賀焼 播鉢	—	(800)	—	調整(外)	調整(内)	縦方向へつナデ	2.5Y7/1灰白	小片	跡目4~5本
	調整(外)					調整(内)	ヨコナデ	2.5Y7/1灰白			
13	3K SD 1 (西濃)	珠洲焼 播鉢	(2200)	(600)	—	調整(外)	調整(内)	回転ナデ	7.5Y6/1灰	小片	跡目20本
	調整(外)					調整(内)	跡目	7.5Y6/1灰			
14	3K SD 1 (南濃)	土師器 灯明皿	96.0	130	700	調整(外)	調整(内)	ナデ	7.5YR8/4浅黄橙	1/8	煤付着
	調整(外)					調整(内)	ナデ	7.5YR8/4浅黄橙			
15	3K SD 1 (南濃)	土師器 灯明皿	110.0	160	700	調整(外)	調整(内)	ナデ	7.5YR7/4C2灰・橙	1/8	煤付着
	調整(外)					調整(内)	ナデ	7.5YR8/4浅黄橙			
16	3K SD 1 (南濃)	土師器 皿	(1300)	—	—	調整(外)	調整(内)	ナデ	10YR7/4C2灰・黄橙	口縁1/12	煤付着
	調整(外)					調整(内)	ユビオサエ、ナデ	10YR6/4C2灰・黄橙			
17	3K SD 1 (東濃)	土師器 坏	66.0	—	—	調整(外)	調整(内)	ナデ	5YR6/8橙	1/6	
	調整(外)					調整(内)	ナデ	5YR6/8橙			
18	3K SD 1 (東濃)	須恵器 壺(胴部)	—	—	—	調整(外)	調整(内)	回転ナデ	2.5Y6/1黄灰	小片	肩部径(194mm)
	調整(外)					調整(内)	回転ナデ	5YR5/1褐灰			
20	4K SK 1	青磁 碗	—	—	—	調整(外)	調整(内)	—	7.5YR6/2灰オリーブ	小片	貫入あり
	調整(外)					調整(内)	—	7.5Y3/2灰オリーブ			
21	4K SK 1	須恵器 坏	—	—	82.0	調整(外)	調整(内)	回転ナデ	10YR7/4C2灰・黄橙	底部1/3	焼成不良
	調整(外)					調整(内)	回転ナデ	2.5Y7/3浅黄			
22	4K SK 8	土師器 浅鉢 口縁	(1420)	—	—	調整(外)	調整(内)	ヨコナデ	7.5YR6/6橙	小片	
	調整(外)					調整(内)	カキメ	7.5YR7/6橙			
23	4K SK 8	須恵器 坏壺	124.0	—	—	調整(外)	調整(内)	回転ナデ	10YR6/2灰黄褐	1/12	
	調整(外)					調整(内)	回転ナデ	10YR6/3C2灰・黄橙			

番号	遺構 出土位置	器種	口径 (mm)	残存高 (mm)	底径 (mm)	調整(外)	色調(外)	残存率	備考
						調整(内)	色調(内)		
24	3区	須恵器 双耳瓶	最大長 680	最大幅 760	—	回転ナデ、ナデ	5Y4.2/7オリーブ白 然釉	小片	耳部は完形
	回転ナデ					5Y6.1/灰(自然釉)			
29	3区 NR 1	陶器 埴	—	—	420	回転ナデ	10YR8.2/灰白	高台部完存	トチン痕 削りだし高台
	回転ナデ					10YR8.2/灰白			
30	3区 NR 1	須恵器 無台坏	—	—	540	回転ナデ	25Y7.1/灰白	1/4	底部糸切ノ痕 一部自然釉付着
	回転ナデ					25Y7.1/灰白			
31	3区 NR 1	須恵器 有台坏	1360	420	980	回転ナデ	25Y7/灰白	1/4	
	回転ナデ					25Y7/灰白			
32	4区 NR 1	陶器 埴	—	—	460	回転ナデ	7.5YR7.3/3.5黄 橙	底部完存	トチン痕、回転ヘラ起こし
	回転ナデ					7.5Y6.2/2.5オリーブ			
33	4区 NR 1	陶器(越前焼) 甕	—	—	—	ヨコナデ	5YR4.1/灰褐	小片	自然釉 部分的に降灰
	ヨコナデ					5YR4.1/灰褐			
34	4区 NR 1	陶器(古瀬戸) 埴?皿?	—	—	—	回転ナデ	2.5Y6.4/2.5黄 黄	底部1/6	輪割がけあり(重ね焼き痕)
	回転ナデ					2.5Y7.3/浅黄			

第3表 平成28年度遺物観察表(石製品)

番号	遺構	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石 材	備考
	出土地点							
25	3区	石製品	89.0	39.0	33.0	140	凝灰岩	上部欠損 下部欠損
	上層遺構検出面							
26	3区	石製品	149.0	87.0	32.0	345	凝灰岩	上部欠損
	遺構検出							
27	2区	石製品	145.0	96.0	29.0	540	凝灰岩	
	遺構検出							
28	2区	石製品	205.0	98.0	35.0	740	砂岩	上部欠損
	NR 1							

第4表 平成28年度遺物観察表(金属製品)

番号	遺構	器種	全長 (mm)	元幅 (mm)	重さ (mm)	重量 (g)	備考
	出土地点						
19	3区	鉄製品	257.0	32.0	17.0	147.1	木木質残存
	SD 1(東溝)						

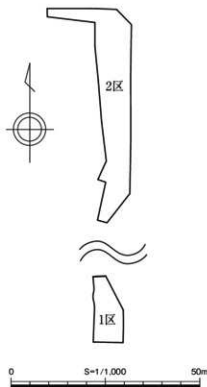
末松遺跡

第4章 平成29(2017)年度の調査成果

第1節 調査の概要

平成29年度の発掘調査範囲は都市計画道路堀内上林線拡幅範囲のうち、中林交差点の南西(2区)及びその南側(1区)である。

発掘調査は1区から開始した。地山面まで重機で掘り下げ、遺構検出し、遺構を掘削した。遺構番号は種別を問わず通し番号を附番した。いずれの遺構も半裁またはベルトを残して掘削し、土層を確認したうえで必要に応じて図化、写真等の記録作業を実施した。



第20図 平成29年度調査区配置略図
(S=1/1,000)

第2節 遺構

1. 1区(第21図)

1区は遺跡南側の南北17.3m、東西8mの調査区である。地山検出面の地形はほぼ平坦であった。北東隅は事前の試掘調査で遺跡範囲外と判断した。検出した遺構は掘立柱建物1棟、溝4条及び小穴である。

SB1(第22図)

調査区中央から南側で検出した南北3間、東西1間の掘立柱建物である。北西隅の柱は調査区外に伸びるため確認できなかったが、東西5.1m、南北7.8mを測り、柱間は南北が2.5から2.7mであるのに対して東西が5.1mと広い。方位はN15°-Wとやや西に振る。検出した柱穴は検出面から大凡60から90cm程度掘り込み、周辺の小穴と比べても特に深い。北東隅のP89はSD87に切られていることから、この溝より先行する建物と考えられる。柱穴から出土した遺物がないため直接時期を限定できる根拠はないものの、後出する溝SD87から土師器有台埵(第33図37)が出土している。

SD85・86・87(第23図)

重複する3条の溝状遺構である。内SD85とSD87は北東-南西方向に並行して伸び、SD86はほぼ直交する。SD85は幅80から100cm程度、深さは検出面から30cm程度と浅いものである。SD87は幅約85cm、深さは25cm程度とSD85より若干細いものである。溝間は芯々距離で1.5m程度である。SD86は南北2.3m、幅60cmほどの溝状遺構である。掘り込みは20cm程度と他の溝と比べ浅い。

先後関係は土層の観察からSD86が古く、SD85とSD87が後出する。また先述の掘立柱建物SB1のP89がSD87に切られる。

出土遺物はSD85から須恵器坏蓋(第33図36)、SD87から土師器有台埵(同図37)が出土している。

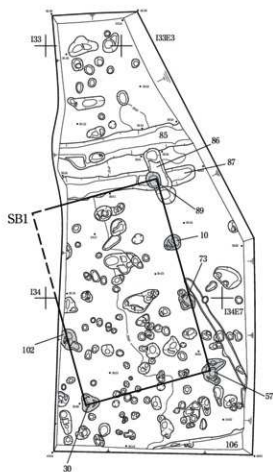
SD106(第24図)

調査区南東隅で検出した溝状の遺構である。遺構の大半が調査区外に伸びるため形状は不明であるが、北東-南西方向に伸び、SD85とほぼ同じ方向である。

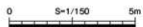


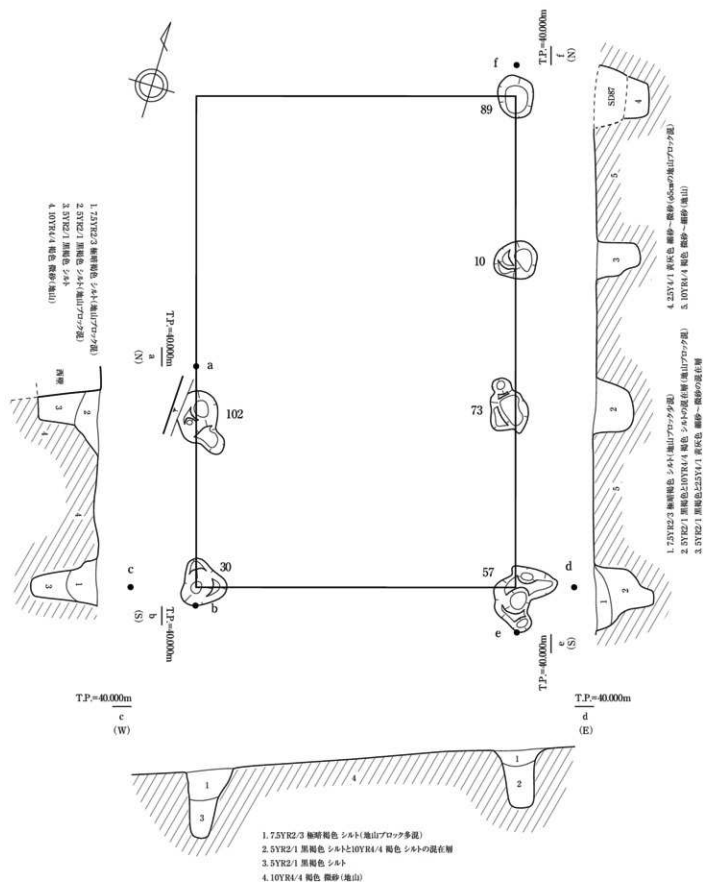
X-9339

X-9338



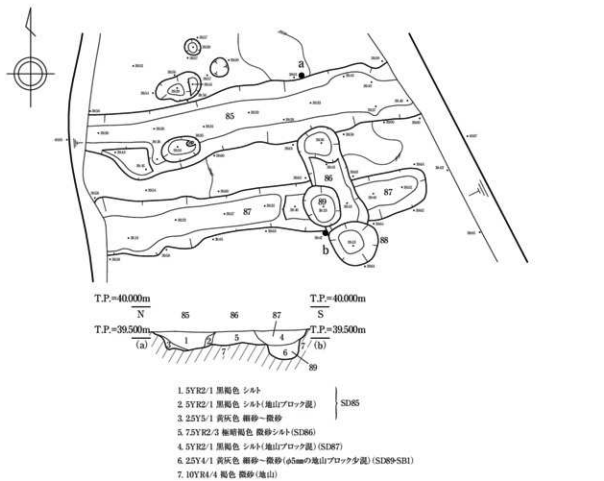
第 21 图 1区平面图 (S=1/150)



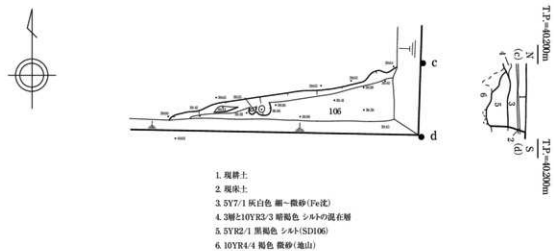
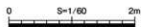


第22図 SB1平面・断面図 (S=1/60)

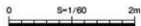




第 23 図 SD85-86-87, SK89 平面・断面図 (S=1/60)



第 24 図 SD106 平面・断面図 (S=1/60)



2. 2区 (第25・26図)

南北56m、幅9mほどの南北方向にのびる調査区で、北西隅から西にL字状に屈曲する。遺構密度は1区と比べて全体として非常に高く、小穴が隙間なく密集している。検出した遺構は掘立柱建物4棟、溝1条、小穴などである。小穴の中にはほぼ完形の土師器壺が底部付近から出土したものがあつた。以下に主な遺構について概要を記す。

SD640 (第27図)

調査区南側で検出した東西方向の溝である。調査区壁で確認できた最大幅は3m、深さ90cmと幅広く掘り込みの深い溝である。断面形状は中段でテラス状の平坦面を持ち、底部は平坦である。土層堆積も概ね水平堆積で人為的に埋没した痕跡は認められず、また水流を示す痕跡も認められなかった。出土遺物は内面黒色有台碗の底部(第33図56)が出土している。

P501 (第29図)

調査区中央付近で検出した小穴である。SB4の内側に位置している。不整形な平面プランで掘り込みも検出面から約12cm程である。覆土中から土師器壺(第33図43)が出土している。外面が赤彩され、胎土に海綿骨針を多く含む。

P284 (第29図)

調査区北側の東壁際で検出した小穴である。不整形な平面プランで掘り込みは地山検出面から28cm程である。覆土中から土師器有台碗(第33図48)が出土している。

P268 (第29図)

調査区北側の中央部で検出した小穴である。長軸36cm程の平面楕円形で、掘り込みは20cm程と浅いものである。底部から完形の土師器皿(第33図39)が伏せた状態で出土している。9世紀後半頃のものと考えられる。

P250 (第29図)

調査区北側の西壁際で検出した小穴である。長軸46cm程のやや不整形な平面円形で、掘り込みは42cm程である。土師器有台碗(第33図47)が出土している。

P197 (第29図)

調査区北側で検出した長軸46cm程のやや不整形な平面円形で、掘り込みは最も深い点で検出面から40cm程である。土師器有台碗(第33図45)が出土している。

P185 (第29図)

調査区北側のSB5南側で検出した小穴である。南北で2基の小穴が切りあつており、南側のより深いものから10世紀前半頃のものと考えられる完形の土師器壺(第33図42)が出土している。2基合わせて長軸56cm程、掘り込みは最も深い点で約40cmである。



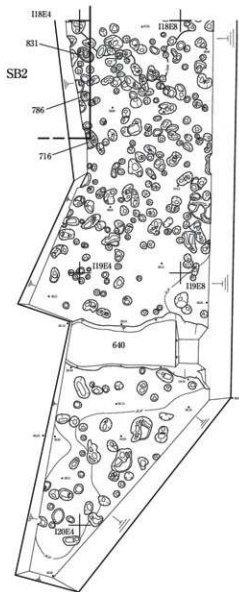
X-5640B

X-5640B

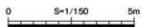
X-5640A

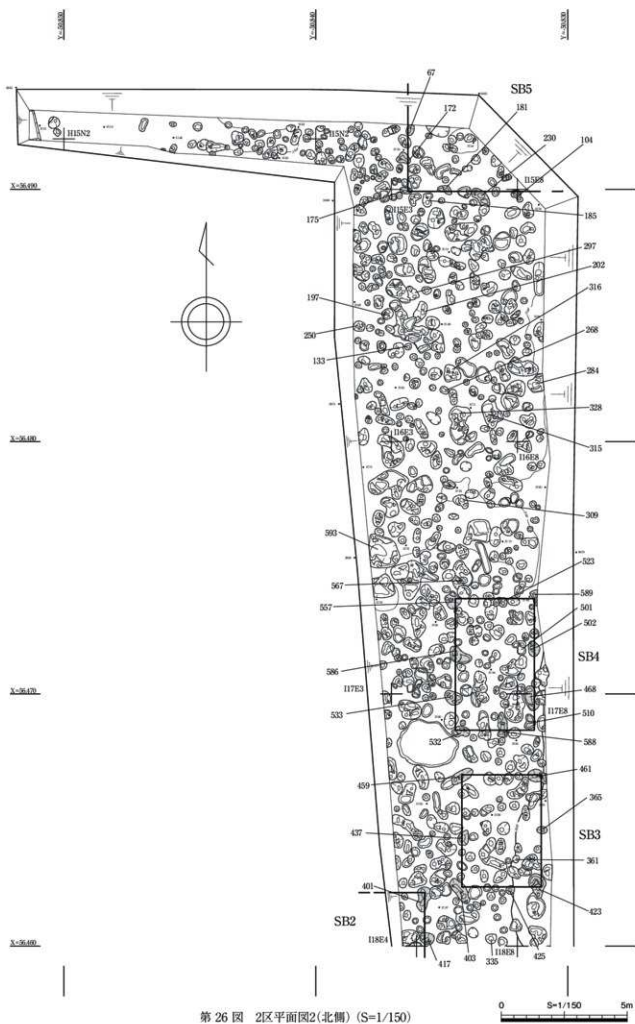
X-5640C

X-5640D

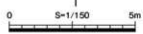


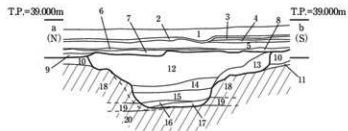
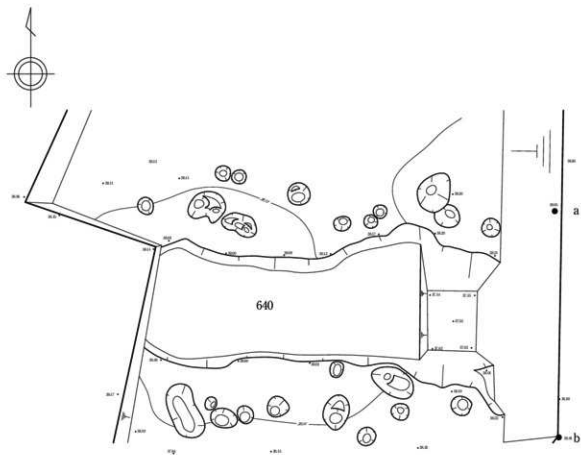
第 25 図 2区平面図1(南側) (S=1/150)





第 26 图 2区平面图2(北側) (S=1/150)

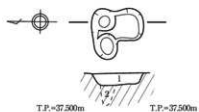




- | | |
|----------------------------------|--------------------------------------|
| 1. 現耕土 | 11. 9層と地山の混在層 |
| 2. 現耕土 | 12. 10YR4/2 灰黄褐色 微砂(φ1~20cmの礫層、炭化物混) |
| 3. 10YR6/8 明黄褐色 粘質土(Fe沈着)(田耕土) | 13. 12層と地山12の混在層 |
| 4. 10YR5/4 に近い黄褐色 微砂(Fe沈着)(田床土) | 14. 10YR4/4 灰黄褐色 微砂混シルト(炭化物少混) |
| 5. 10YR5/8 黄褐色 微砂(Fe沈着)(田耕土) | 15. 10YR4/4 褐色 シルト(φ5cm礫混) |
| 6. 10YR5/4 に近い黄褐色 微砂(Fe多沈着)(田床土) | 16. 2.5Y3/2 黒褐色 シルト(Fe沈着) |
| 7. 10YR5/8 黄褐色 細~微砂(Mn沈)(田耕土) | 17. 2.5Y6/2 に近い黄色 シルト(Fe沈着) |
| 8. 10YR4/3 に近い黄褐色 シルト | 18. 10YR4/4 褐色 微砂(地山) |
| 9. 10YR4/4 褐色 シルト(炭化物少混、遺物混) | 19. 10YR4/1 暗灰色 細砂(地山) |
| 10. 10YR4/2 灰黄褐色 粘質土(遺物混) | 20. 礫層(φ5~10cmの礫)(地山) |

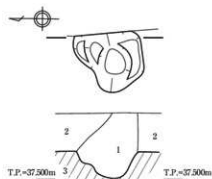
第 27 図 SD640 平面・断面図 (S=1/60)





1. 7.5YR2/3 黒褐色シルト
2. 10YR4/4 黒褐色微砂(地山)

P501



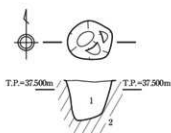
1. 5YR3/1 黒褐色と5YR4/1 褐色の混在層粘質土(地山ブロック状)
2. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
3. 10YR4/4 褐色微砂(地山)

P284



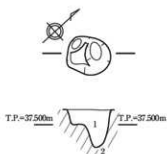
1. 5YR2/1 黒褐色シルト(地山ブロック状)
2. 10YR4/4 黒褐色微砂(地山)

P268



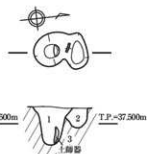
1. 5YR2/1 黒褐色シルト
2. 10YR4/4 黒褐色微砂(地山)

P250



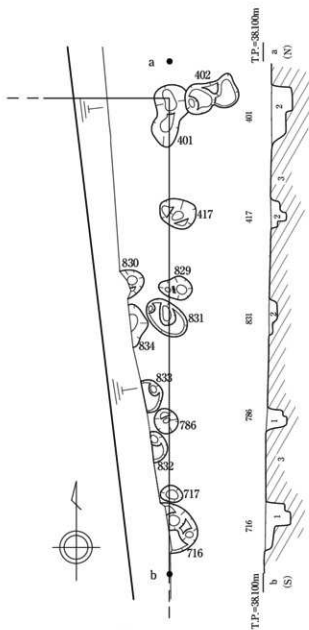
1. 5YR2/1 黒褐色シルト
2. 10YR4/4 褐色微砂(地山)

P197



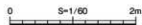
1. 5YR2/1 黒褐色シルト(地山ブロック状)
2. 10YR2/3 暗褐色シルト
3. 10YR4/4 褐色微砂(地山)

P185

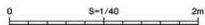


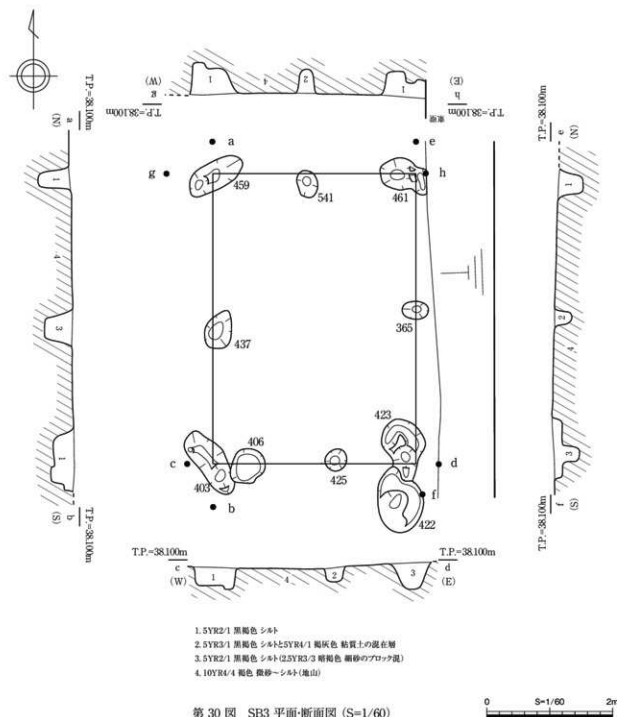
1. 5YR2/1 黒褐色微砂
2. 5YR2/1 黒褐色微砂(2.5Y5/3 黄褐色中~細砂のブロック状)
3. 10YR4/4 褐色微砂~シルト(地山)

第28図 SB2平面・断面図 (S=1/60)



第29図 P501・284・268・250・197・185平面・断面図 (S=1/40)



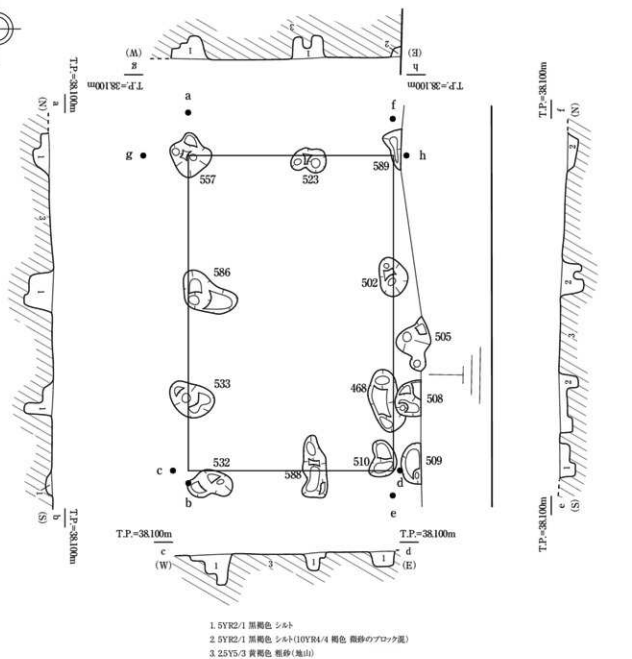


SB2 (第 28 図)

調査区南側の西壁際で検出した掘立柱建物である。構成する柱穴は北からP401、P417、P831、P786、P716で、建物の東筋にあたる。西側は調査区外に延びるため正確な規模は不明である。南北4間で南北長は6.7m、1間当たりの柱間は平均1.6m～1.7mほどである。柱の掘り込みも総じて浅く、顕著な柱痕跡が残るものも確認できなかった。出土遺物は無いため時期は不明である。

SB3 (第 30 図)

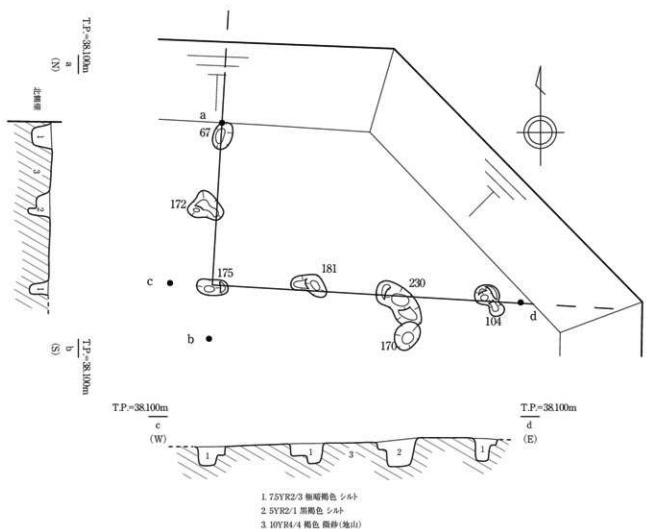
調査区中央の東壁際で検出した掘立柱建物である。構成する柱穴はP459、P541、P461、P437、P365、P403、P425、P423である。東西2間、南北2間の側柱建物で、東西3.2mに対して南北4.6mと南北に長い建物となる。柱間は東西で1.5から1.7m、南北で2.3から2.5mである。四隅の柱穴若干大きいものであるが総じて掘り込みは40から50cm程度となる。出土遺物は無いため時期は不明である。



第 31 図 SB4 平面・断面図 (S=1/60)

SB4 (第 31 図)

調査区中央のSB3の北に接する掘立柱建物である。構成する柱穴の柱筋はSB3より若干西にずれるもののおおむね同一軸線上に位置しており、一連の建物と考えられる。東西3.2m、南北5.2mの南北方向に長軸を持つ建物で、柱間は東西2間、南北3間である。柱間は1.6mから1.7m程で、柱穴はいずれも不整形で掘り込みも浅く、明確な柱痕跡が残るものは無い。遺物も出土しておらず時期は不明である。



第32図 SB5 平面・断面図 (S=1/60)

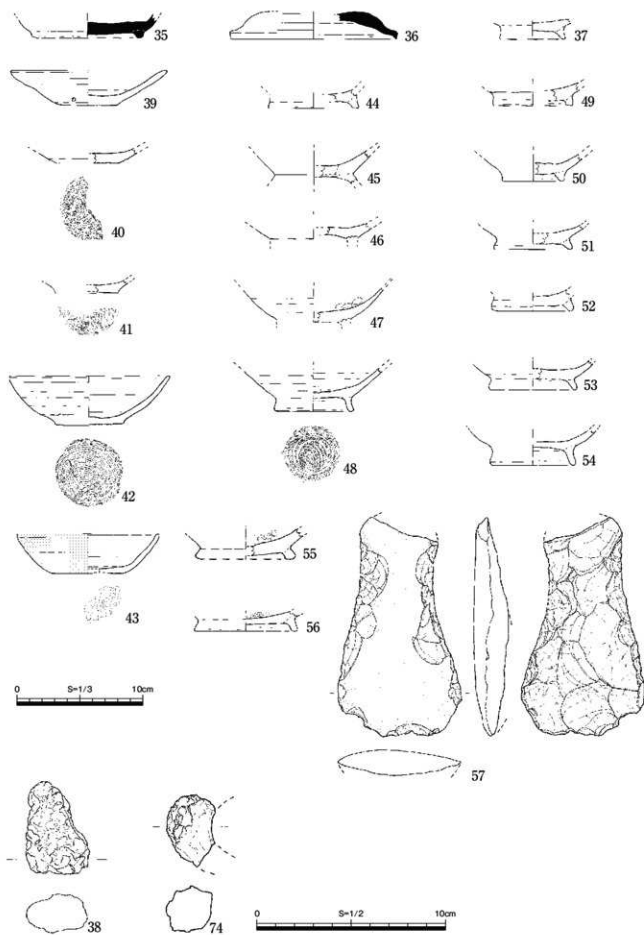
SB5 (第32図)

調査区北東隅で検出した掘立柱建物である。建物の南西部のみの検出であり、全体像は把握できなかった。構成する柱穴はP67、P172、P175、P181、P230、P104であり、東西3間以上、南北2間以上となる。検出できた範囲で南北2.6m、東西4.6mであり、柱間は1.3～1.5mほど他の掘立柱建物と比べて狭い。柱穴はいずれも不整形で長軸50cm程度の小ぶりなものであり、掘り込みは検出面から30cm程と浅い。柱痕跡が残るものは確認できなかった。柱穴から出土した遺物は無く時期は不明である。

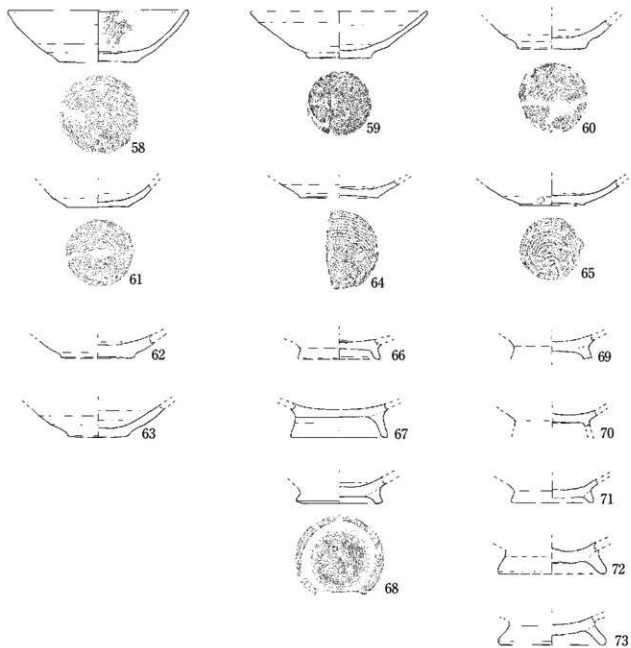
第3節 出土遺物(第33・34図)

出土遺物は各遺構で述べたものもあるが、ここで再び整理する。1区、2区ともに出土した遺物は打製石斧1点を除き古代、特に9世紀から10世紀代を中心とする時期に属するものと考えられる。

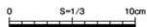
35、36はいずれも1区から出土した須恵器で、35は重機掘削時に出土した坏の底部である。36はP85から出土した坏蓋である。37から73は土師器の供膳具で、底部のみで全体像が把握できないものが多いが、埴器形のもの为主で、明らかに皿器形と考えられるものは39がある。また大別すると、内面を黒色化したもの(55、56、58、66、67)と外面に赤彩を施すもの(43)、内外面ともに無調整であるものがある。また胎土には海綿骨針を多く含むもの(28、43、49、51、53等)と、含まないまたは微量含むものに大別できる。



第 33 图 平成29年度末松遺跡出土遺物実測図1



第 34 図 平成29年度末松遺跡出土遺物実測図2



第5表 平成29年度遺物観察表(土器)

番号	遺構 出土位置	器種	口径 (mm)	残存高 (mm)	底径 (mm)	調整(外)		残存率	備考
						調整(内)	色調(内)		
35	1区 垂模削面	須恵器 有台環	—	(180)	(880)	同転ナデ	5BG6-1青灰	底部1/6	
						同転ナデ	5BG6-1青灰		
36	1区 85	須恵器 環蓋	134.0	(220)	—	同転ナデ	25Y5-1黄灰	1/7	かえし高3mm 内面ニ降灰
						同転ナデ	5Y6-1灰		
37	1区 87	土師器 有台塊	—	—	52.0	不明	75YR7-6橙	底部1/2	
						不明	75YR7-6橙		
39	2区 268	土師器 皿	124.5	27.5	51.0	同転ナデ	5YR7-8橙	定形	穿孔あり 底部ニ同転ヘラ切痕
						同転ナデ	5YR7-6橙		
40	2区 133	土師器 塊	—	—	50.0	ナデ	5YR6-6橙	底部1/2	底部同転糸切り痕
						ナデ	75YR6-6橙		
41	2区 315	土師器 塊	—	(110)	50.0	ナデ	5YR7-6橙	底部1/3	底部同転糸切り痕
						ナデ	5YR7-6橙		
42	2区 185	土師器 塊	127.0	39.5	54.5	同転ナデ	75YR8-4浅黄橙	完存	外面赤彩 底部同転糸切り痕
						同転ナデ	5YR7-8橙		
43	2区 501	土師器 塊	114.0	32.0	56.0	ナデ	5YR7-8橙	1/4	底部糸切り痕
						ナデ	75YR7/4ニ赤い橙		
44	2区 104	土師器 有台塊	—	—	72.0	ナデ	75YR6-6橙	底部1/4	
						ナデ	10YR7/4ニ赤い黄橙		
45	2区 197	土師器 有台塊	—	—	(62.0)	ナデ	10YR8-4浅黄橙	底部2/3	底部同転ヘラ切り痕
						ナデ	10YR6-4ニ赤い黄橙		
46	2区 202	土師器 有台塊	—	—	70.0	ナデ	75YR4-2灰褐	底部1/3	高台欠損
						ナデ	75YR4-2灰褐		
47	2区 250	土師器 有台塊	—	体部径 1100	(590)	ナデ、ユビオサエ	10YR6/4ニ赤い黄橙	1/2	高台欠損
						ナデ	75YR7-6橙		
48	2区 284	土師器 有台塊	—	—	63.0	同転ナデ	5YR6-6橙	底部完存	底部は糸切りのちナデか
						同転ナデ	75YR6-6橙		
49	2区 361	土師器 有台塊	—	(180)	64.0	ナデ	75YR8-4浅黄橙	底部1/3	
						ナデ	75YR8-6浅黄橙		
50	2区 297	土師器 有台塊	—	—	50.0	ナデ	75YR8-4浅黄橙	底部1/2	底部同転ヘラ切り痕
						ナデ	75YR7-6橙		
51	2区 593	土師器 有台塊	—	(200)	63.0	ナデ	75YR7/4ニ赤い橙	底部2/3	底部同転ヘラ切りのちナデか
						ナデ	75YR7/4ニ赤い橙		
52	2区 328	土師器 有台塊	—	(170)	66.0	ナデ	75YR6-2灰褐	底部完存	外面全て埋付着
						ナデ	75YR8-4浅黄橙		
53	2区 309	土師器 有台塊	—	(210)	70.0	ナデ	10YR7/4ニ赤い黄橙	底部1/4	底部は糸切りのちナデか
						ナデ	10YR7/4ニ赤い黄橙		
54	2区 316	土師器 有台塊	—	(280)	68.0	ナデ	25YR6-6橙	底部1/3	底部同転糸切りのちナデか
						ナデ	75YR7-6橙		
55	2区 567	土師器 内黒有台塊	—	(190)	80.0	ナデ	75YR7-6橙	底部1/3	
						ミダキ	10YR3-1黒褐		
56	2区 640	土師器 内黒有台塊	—	(160)	82.0	ナデ	75YR8-4浅黄橙	底部完存	底部同転ヘラ切り痕
						ミダキ	10YR3-1黒褐		
58	2区 黒色包含層	土師器 内黒塊	141.0	41.0	60.0	同転ナデ	75YR6-6橙	1/4	底部同転糸切り痕
						ミダキ	75YR2-1黒		
59	2区 黒色包含層	土師器 塊	141.0	37.5	51.0	同転ナデ	75YR8-6浅黄橙	1/2	底部同転糸切り痕
						同転ナデ	75YR8-6浅黄橙		
60	2区 黒色包含層	土師器 塊	—	—	55.0	ナデ	75YR8-6浅黄橙	1/4	底部同転糸切り痕
						ナデ	75YR7-6橙		
61	2区 黒色包含層	土師器 塊	—	—	52.0	ナデ	10YR7/4ニ赤い黄橙	1/2	底部同転糸切り痕
						ナデ	10YR6-2灰黄褐		

番号	遺構 出土位置	器種	口径 (mm)	残存高 (mm)	底径 (mm)	調整(外)	色調(外)	残存率	備考
						調整(内)	色調(内)		
62	2区	土師器 埴	—	—	380	ナデ	10YR6/4C35・黄橙	1/2	
	黒色包含層					ナデ	5YR7/6橙		
63	2区	土師器 埴	—	—	490	ナデ	7.5YR8/4浅黄橙	底部完存	底部糸切り痕
	黒色包含層					ナデ	7.5YR7/4C35・橙		
64	2区	土師器 埴	—	—	620	ナデ	7.5YR7/6橙	1/2	底部回転糸切り痕
	黒色包含層					ナデ	7.5YR7/6橙		
65	2区	土師器 埴	—	—	510	ナデ	7.5YR6/6橙	1/4	底部回転糸切り痕
	黒色包含層					ナデ	7.5YR6/6橙		
66	2区	土師器 内黒有台埴	—	—	660	ナデ	7.5YR7/6橙	底部完存	
	黒色包含層					ミガキ	2.5YR3/1黒褐		
67	2区	土師器 内黒有台埴	—	—	770	ヨコナデ	7.5YR7/6橙	底部2/3	
	黒色包含層					ミガキ	7.5YR2/1黒		
68	2区	土師器 有台埴	—	—	680	ヨコナデ	5YR6/6橙	底部完存	底部糸切り痕
	黒色包含層					ナデ	5YR6/6橙		
69	2区	土師器 有台埴	—	—	600	ナデ	7.5YR8/6浅黄橙	底部完存	底部回転ヘラ切り痕
	黒色包含層					ナデ	5YR7/6橙		
70	2区	土師器 有台埴	—	—	—	ヨコナデ	7.5YR7/6橙	底部完存	底部回転ヘラ切り痕
	重機棚間					ナデ	7.5YR6/6橙		
71	2区	土師器 有台埴	—	—	650	ヨコナデ	7.5YR6/6橙	底部完存	底部回転ヘラ切り痕
	黒色包含層					ナデ	7.5YR6/6橙		
72	2区	土師器 有台埴	—	—	840	ヨコナデ	7.5YR8/6浅黄橙	底部2/3	底部回転ヘラ切り痕
	黒色包含層					ナデ	7.5YR7/6橙		
73	2区	土師器 有台埴	—	—	860	ナデ	7.5YR8/6浅黄橙	底部1/2	
	黒色包含層					ナデ	7.5YR7/6橙		

第6表 平成29年度遺物観察表(土製品)

番号	遺構	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
	出土地点						
74	2区	フイゴ割口	380	260	250	166	内側ガラス状となる
	黒色包含層						

第7表 平成29年度遺物観察表(石製品)

番号	遺構	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石材	備考
	出土地点							
57	2区	打製石芥	1745	980	280	450	砂岩	上部欠損
	335							

第8表 平成29年度遺物観察表(金属製品)

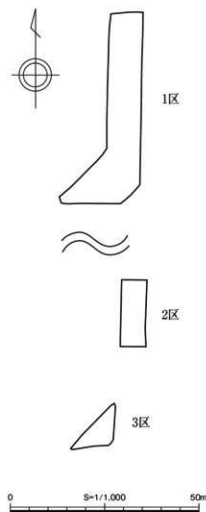
番号	遺構	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
	出土地点						
38	1区	鉄滓	490	340	210	333	
	106						

第5章 平成30(2018)年度の調査成果

第1節 調査の概要

平成30年度調査区は中林交差点の南側の1区、平成29年度1区の南側に位置する2区と3区の計3か所を調査した。2区は東西7m、南北18mの調査区である。3区は東西・南北それぞれ11m程の三角形の小調査区である。

調査は1区から開始した。重機で地山まで掘削して検出した結果、調査区全面で非常に高い遺構密度があることが明らかになった。また南側に南東—北西方向の溝が確認でき、土層の検討の結果近世以降の流路であると判断した(SD1・2)。なおこの溝の延長は令和4年度に実施した調査区で検出している。遺構掘削は南側から着手し、種別を問わず通し番号を附番した。小穴は半裁後土層の記録写真撮影、注記を行ったのち完掘した。溝についてはベルトを残して掘削し記録を行った。2区と3区は1区の調査が完了後に着手した。2区は発掘以前はコンクリート舗装された駐車場として利用されていた部分であり、すでに既存施設で破壊が確実であった部分を除いての調査である。また、北側約4分の1の範囲は地山が急激に落ち込む地形であり、遺構は検出できなかったため土層堆積の記録のみを行った。3区は全面に遺構が検出できたが、遺構の数は1区と比べて疎らである。検出できた遺構は小穴のみである。



第35図 平成30年度調査区配置略図
(S=1/1,000)

第2節 遺構

1. 1区(第36・37図)

1区は東西9m、南北50mのトレンチ状の調査区である。比較的大型の土坑や堅穴状遺構などの遺構は北壁にかかる形でわずかに検出したが、全体的な傾向としては小穴が密集する様相である。以下に主だった遺構および遺物が出土した遺構について概要を記す。

SD3(第38図)

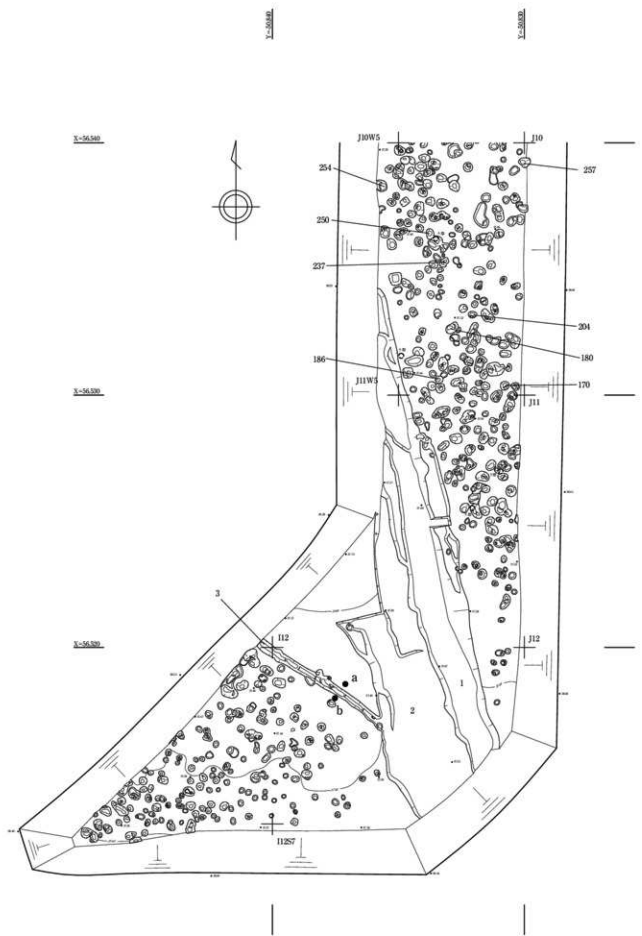
調査区南側で検出した溝である。南東—北西方向に直線的に伸びる。東端はSD2に合流する。幅30cm、深さ25cmで断面はV字に近い。底部は凹凸が多く北西方向に向かって緩やかに傾斜する。

SD4(第38図)

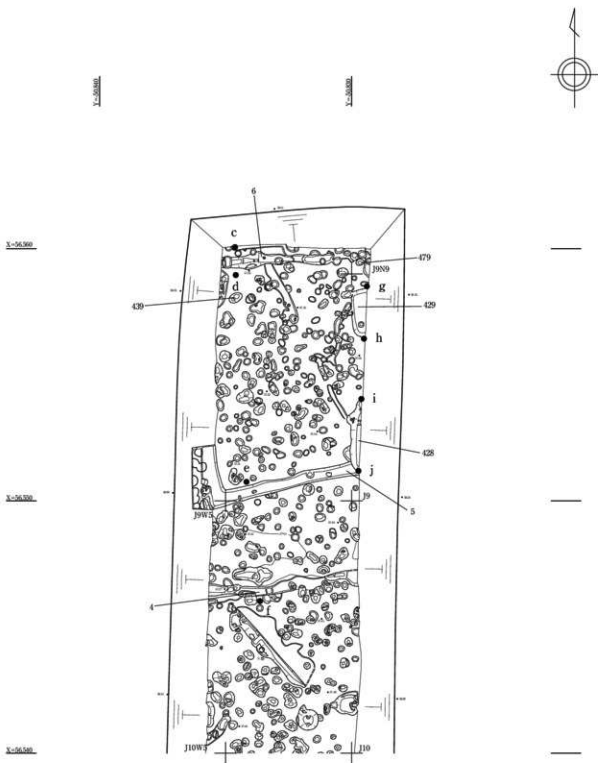
調査区北側で検出した溝である。東西方向からやや南西に振った方向に直線的に伸びる。掘り込みはごく浅いため上部は削平されてしまっているものと考えられる。また同様に幅も検出できた部分で30cm程であり、上端の幅は不明である。

SD5(第38図)

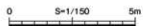
調査区北側で検出した溝である。検出当初は東西方向にのびる溝と考えたが、西壁際が不明瞭であったため調査区を拡張した結果、溝がL字状に屈曲する構造であることが確認できた。方位は東西方向からやや南西に振れる。幅45cmほどの狭い溝であり、深さも検出面から15cm程と浅い。東壁際でSI429に切られている。



第 36 图 1区 平面图1(南侧) (S=1/150)



第 37 图 1区 平面图2(北側) (S=1/150)



SD6 (第38図)

調査区北壁際で検出した溝である。方位はほぼ東西方向に直線的に伸びる。幅40cm、深さ30cm程を測り、断面形は不整形なU字状である。底部は凹凸が多く、また重複する小穴が多数あるため溝の形状が把握できない部分も多い。

SI428 (第38図)

調査区北東隅で検出した遺構である。検出できた部分は遺構の西側のみであるため全体像は不明である。南北310cm程の平面方形プランで、深さは50cm程を測る。底部は平坦で、壁の立ち上がりゆりやかである。遺構覆土はブロック土を多く含むもので、人為的に埋没したものと考えられる。検出時の状況からSD5と切ると判断した。

SI429 (第38図)

調査区北東隅で検出した遺構である。SI428検出できた部分は遺構の西側のみであるため全体像は不明である。南北200cm程の平面方形プランで、深さは45cm程を測る。底部は平坦で、壁の立ち上がりは急である。遺構覆土はブロック土を多く含むもので、人為的に埋没したものと考えられる。

P170 (第39図)

調査区南側で検出した小穴である。直径35cm程の平面円形プランで、深さ最大で30cmを測る。出土遺物は土師器有台壇の底部(第41図77)が出土している。



1. 10YR3/1 黒褐色 粘質土(10YR2/1 黒色 粘質土少混、地山ブロック混)
2. 10YR5/2 灰黄褐色 シルト
3. 10YR6/4 に近い黄褐色 シルト(地山)

SD3



1. 10YR4/2 灰黄褐色 シルト(地山ブロック混)
2. 10YR5/2 灰黄褐色 シルト(地山ブロック多混、炭化物混)
3. 10YR6/4 に近い黄褐色 シルト(地山)

SD6

T.P.=37,500m



SD5

1. 10YR4/2 灰黄褐色 粘質土(Fe比)
2. 10YR4/2 灰黄褐色 シルト(Fe比)
3. 10YR3/4 暗褐色 シルト(地山ブロック少混)
4. 10YR6/4 に近い黄褐色 シルト(地山)

T.P.=37,500m



SD4

T.P.=37,500m



1. 10YR5/2 灰黄褐色 細砂(10YR4/1 褐灰色 シルト多混、地山ブロック少混)
2. 10YR4/1 褐灰色 シルト
3. 10YR5/2 灰黄褐色 シルト、10YR3/3 暗褐色 シルト、10YR8/4 浅黄褐色 シルトの混在層(炭化物混)
4. 10YR5/2 灰黄褐色 シルト、10YR3/3 暗褐色 シルト、10YR8/4 浅黄褐色 シルトの混在層(15層2リヤや多い)
5. 10YR5/2 灰黄褐色 シルト(10YR8/4 浅黄褐色 シルトブロック多混、炭化物混)
6. 10YR5/2 灰黄褐色 シルト、10YR3/3 暗褐色 シルト、10YR8/4 浅黄褐色 シルトの混在層
7. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(10YR8/4 浅黄褐色 シルトブロック少混)
8. 10YR6/4 に近い黄褐色 シルト(地山)

SI428

T.P.=37,500m



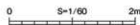
T.P.=37,500m



1. 10YR3/4 暗褐色 シルト(地山ブロック炭化物少混)
2. 10YR4/2 灰黄褐色 シルト(地山ブロック少混、炭化物混)
3. 10YR5/2 灰黄褐色 シルト(Fe比混)
4. 10YR3/4 暗褐色 シルト(地山ブロック混)
5. 10YR4/2 灰黄褐色 シルト(地山ブロック少混)
6. 10YR3/3 暗褐色 粘質土(地山ブロック少混)
7. 10YR6/4 に近い黄褐色 シルト(地山)

SI429

第38図 SD3-4-5-6、SI428-429 平面・断面図 (S=1/60)



P180 (第39図)

調査区南側で検出した小穴である。長軸54cm程の平面円形プランで、いびつな掘方であるが深さ最大で35cmを測る。出土遺物は外面が赤彩された内黒土師器有台碗の底部(第41図75)が出土している。

P186 (第39図)

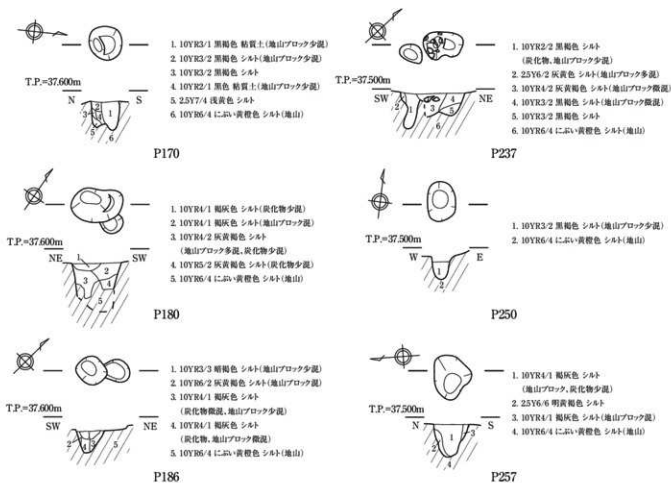
調査区南側で検出した小穴である。長軸30cm程の平面隅丸方形プランで、深さ22cmを測る。出土遺物は外面が赤彩された内黒土師器有台碗の底部(第41図76)が出土している。

P237 (第39図)

調査区南側で検出した小穴である。長軸40cm程の不整形な平面楕円形プランで、深さ25cmを測る。遺構の検出面に近い覆土中から土師器が集中して出土している(第41図80~83)。このうち81は柱状高台の有台皿で時期が11世紀後半頃まで下るものであり、残る82~84は9世紀中頃のものと考えられる。出土状況から81が混ざりこんだと考えにくいことから11世紀後半頃の遺構と考えられる。

P250 (第39図)

調査区南側で検出した小穴である。長軸42cm程の不整形な平面楕円形プランで、深さ25cmを測る。出土遺物は土師器有台碗の底部(第41図79)が出土している。



第39図 P170-180-186-237-250-257 平面・断面図 (S=1/40)



P257 (第39図)

調査区南側で検出した小穴である。長軸45cm程の不整形な平面楕円形プランで、深さ35cmを測る。出土遺物は土師器塚の底部(第41図84)が出土している。

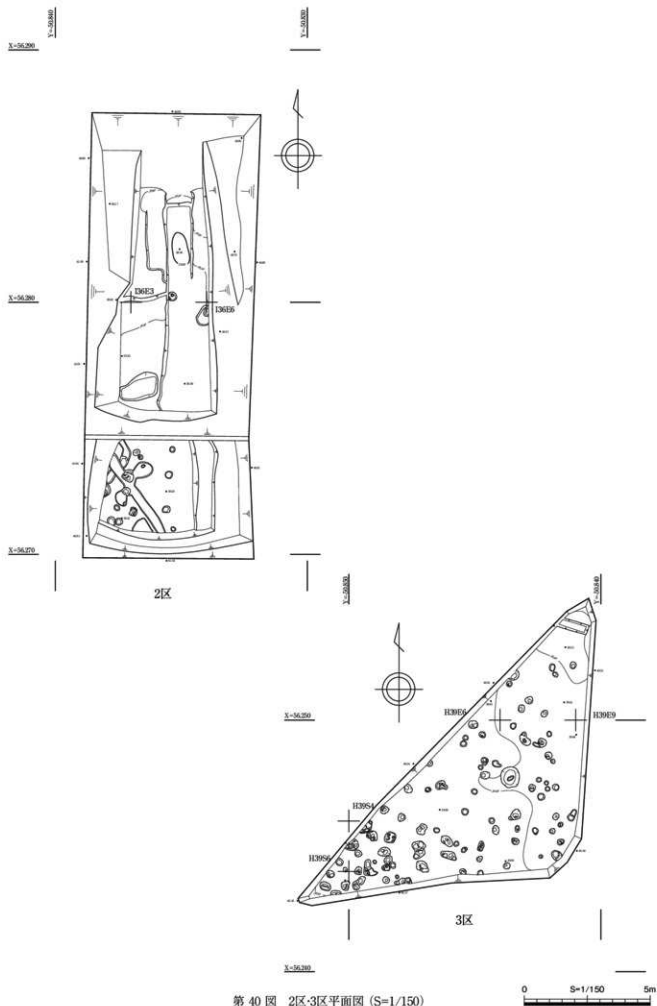
2. 2区・3区 (第40図)

2区は北側の大半が遺構を検出できず、わずかに確認できた遺構も小穴や不整形な溝のみみられる程度である。また3区も全面に遺構の分布を確認できたが、小穴のみであり遺物も包含層中から1点土師器塚が出土したのみである。いずれの調査区ともに特筆すべき遺構がないが、今後周辺で調査を重ねることによって集落変遷を検討すべきものと考えられる。

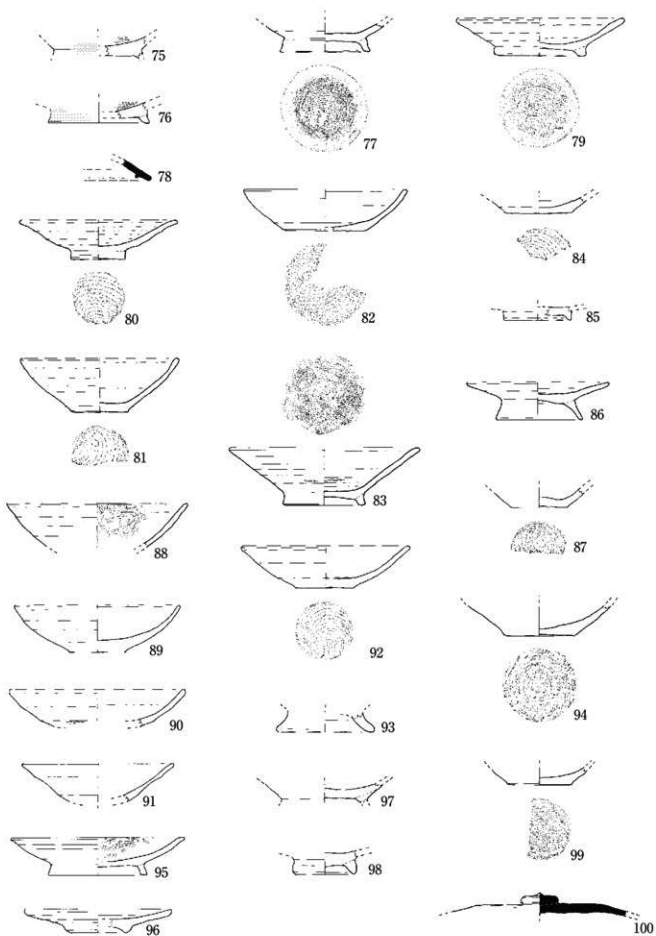
第3節 出土遺物(第41・42図)

他の調査区と比べると土師器塚皿類が集中して出土する様相が複数確認できた。先に述べたP237のほか、明確な遺構はとらえられなかったものの地山付近で土器が集中する個所(土器集中①・②)を検出しており、具体的な内容は不明であるが何らかの土器祭祀の場であった可能性も想起される。

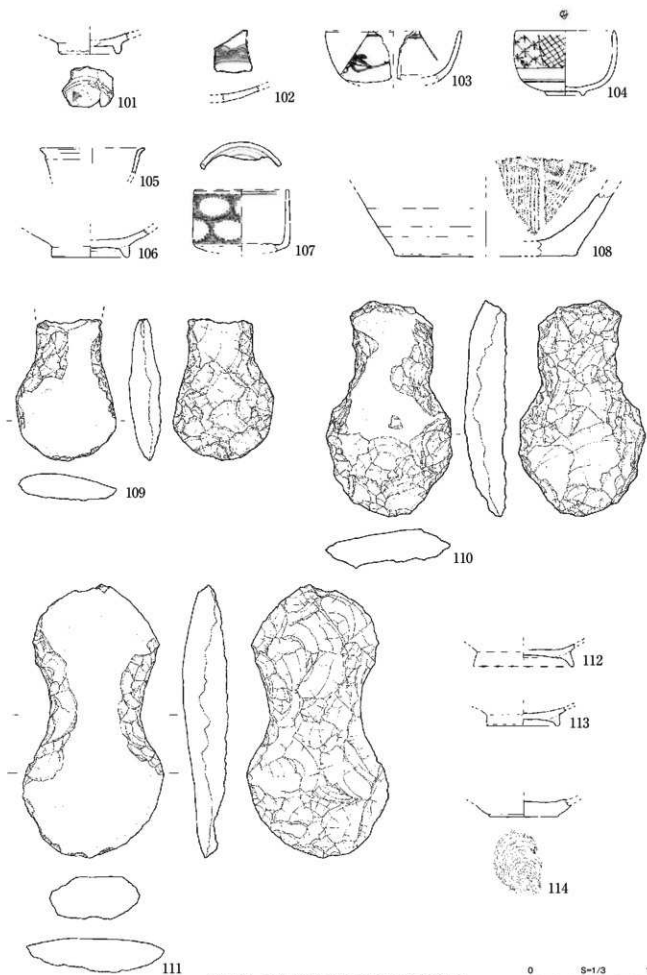
遺物の全体的な時期は9世紀中頃から後半の土師器が多いほか、若干遡る外面が赤彩された内黒土師器が出土している。中世の遺物はP237で出土した柱状高台を持つ皿を除くと近世以降の流路SD1・2から出土したものである。



第 40 图 2区-3区平面图 (S=1/150)



第 41 图 平成30年度末松道跡出土遺物実測図1



第 42 図 平成30年度末松遺跡出土遺物実測図2

0 5=1/3 10cm

第9表 平成30年度遺物観察表(土器)

番号	遺構 出土位置	器種	口径 (mm)	残存高 (mm)	底径 (mm)	調整(外)		残存率	備考
						調整(内)	色調(内)		
75	I区 180	土師器 内黒有台壇	—	—	(700)	ナデ	75YR6/4C2灰・褐	底部1/4	外面赤彩
						ミダキ	10YR2/1黒色		
76	I区 186	土師器 内黒有台壇	—	—	800	ナデ	75YR7/6橙	底部1/6	外面赤彩
						ミダキ	10YR3/1黒黒		
77	I区 170	土師器 有台壇	—	—	720	ナデ	75YR7/6橙	底部完存	底部回転糸切り痕
						ナデ	75YR7/4C2灰・黄橙		
78	I区 204	須恵器 坏壺	不明	—	—	回転ナデ	25Y7/19C白	小片	
						回転ナデ	10YR7/2C2灰・黄橙		
79	I区 250	土師器 有台壇	1340	300	730	回転ナデ	10YR7/4C2灰・黄橙	2/3	底部回転糸切り痕
						回転ナデ	10YR7/4C2灰・黄橙		
80	I区 237土器一括	土師器 有台壇	1260	315	430	ナデ	75YR6/6橙	底部完存	底部回転糸切り痕
						ナデ	75YR7/6橙		
81	I区 237土器一括	土師器 壺	1270	430	460	回転ナデ	75YR6/6橙	2/3	底部回転糸切り痕
						回転ナデ	75YR7/6橙		
82	I区 237土器一括	土師器 壺	1300	330	660	回転ナデ	10YR7/4C2灰・黄橙	2/3	底部回転糸切り痕
						回転ナデ	10YR8/4C2黄橙		
83	I区 237土器一括	土師器 有台壇	1520	410	660	回転ナデ	75YR6/8橙	完存	底部回転糸切り痕
						回転ナデ	75YR6/6橙		
84	I区 257	土師器 壺	—	—	540	ナデ	10YR6/4C2灰・黄橙	底部1/3	底部回転糸切り痕
						ナデ	10YR7/4C2灰・黄橙		
85	I区 254	土師器 有台壇	—	—	520	ナデ	75YR7/4C2灰・黄橙	底部1/4	削り出し高台
						ナデ	75YR7/6橙		
86	I区 439	土師器 有台壇	1140	300	690	回転ナデ	75YR7/6橙	2/3	
						回転ナデ	5YR7/8橙		
87	I区 439	土師器 壺	—	—	460	ナデ	75YR7/6橙	底部1/2	底部回転糸切り痕
						ナデ	75YR7/6橙		
88	I区 479	土師器 内黒壺	1440	—	—	ナデ	75YR6/6橙	1/3	
						ミダキ	10YR3/1黒黒		
89	I区 土器集中	土師器 壺	1320	375	440	回転ナデ	75YR8/4C2黄橙	底部完存	マメフ大 底部ヘラ切羽
						回転ナデ	75YR8/6C2黄橙		
90	I区 土器集中	土師器 壺	1400	—	—	回転ナデ	75YR7/6橙	1/4	
						回転ナデ	75YR7/6橙		
91	I区 土器集中	土師器 壺	1200	—	—	ナデ	75YR8/6C2黄橙	1/6	
						ナデ	75YR7/6橙		
92	I区 土器集中	土師器 壺	1340	335	460	回転ナデ	75YR7/6橙	2/3	底部回転糸切り痕
						回転ナデ	75YR7/6橙		
93	I区 土器集中	土師器 高台部	—	—	780	ナデ	75YR7/6橙	1/2	
						ナデ	75YR7/6橙		
94	I区 土器集中	土師器 壺	—	—	560	ナデ	5YR7/6橙	底部完存	底部ヘラ切羽
						ナデ	5YR7/8橙		
95	I区 包含層	土師器 内黒有台壇	1380	300	780	回転ナデ	75YR7/6橙	1/2	底部回転ヘラケズリ
						ミダキ	75YR2/1黒		
96	I区 包含層	土師器 有台壇	1170	185	520	回転ナデ	10YR7/4C2灰・黄橙	1/2	削り出し高台
						回転ナデ	10YR7/4C2灰・黄橙		
97	I区 包含層	土師器 有台壇	—	—	700	ナデ	75YR7/6橙	底部完存	全体的に摩耗
						ナデ	75YR8/6C2黄橙		
98	I区 包含層	土師器 有台壇	—	—	460	ナデ	75YR5/3C2灰・褐	底部完存	外面に膠付着
						ナデ	75YR7/6橙		
99	I区 包含層	土師器 壺	—	—	520	ナデ	75YR7/8黄橙	底部1/2	底部回転糸切り痕
						ナデ	75YR7/6橙		

番号	遺構 出土位置	器種	口径 (mm)	残存高 (mm)	底径 (mm)	調整(外)	色調(外)	残存率	備考
						調整(内)	色調(内)		
100	I区	須恵器 坏蓋	—	—	天井部 1120	回転ナデ	5Y5/1R	天井部1/4 つまり部完形	つまり径30mm 天井部回転へラ切りのちナデ
	包含層					回転ナデ	5Y6/1R		
101	I区	近世磁器 染付碗	—	—	300	—	10Y7/1R白	底部1/4	破目あり 呉須の発色うすい
	SD1					—	2.5GY8/1R白		
102	I区	近世磁器 染付皿	—	—	—	—	2.5GY8/1R白	小片	貫入 呉須の発色うすい
	SD1					—	—		
103	I区	近世磁器 染付碗	920	—	—	—	10Y7/1R白	1/6	呉須の発色濃い
	SD1					—	5GY8/1R白		
104	I区	近世磁器 染付碗	800	515	300	—	N8/灰白	1/4	呉須の発色うすい 見込み寿文か?
	SD1-2					—	2.5GY8/1R白		
105	I区	白磁 碗	840	—	—	—	7.5YR8/1R白	小片	
	SD2					—	7.5Y7/1R白		
106	I区	土師器 有台碗	—	—	620	ナデ	7.5YR7/6橙	底部完存	
	SD2					ナデ	7.5YR7/6橙		
107	I区	近世磁器 染付碗	760	—	—	—	10YR8/1R白	1/3	瀬戸焼か
	SD1					—	5Y7/1R白		
108	I区	珠洲焼 播鉢	—	—	140	回転ナデ	N4/灰色	1/12	
	SD1					回転ナデ	N7/灰白		
112	2区	土師器 有台碗	—	—	800	ナデ	5YR7/8橙	1/3	全体的に摩耗
	重機掘削					ナデ	5YR7/8橙		
113	2区	土師器 有台碗	—	—	580	ナデ	7.5YR8/4浅黄橙	底部完存	
	重機掘削					ナデ	7.5YR8/6浅黄橙		
114	3区	土師器 碗	—	—	540	ナデ	10YR8/3浅黄橙	底部1/2	回転糸切り痕
	包含層					ナデ	10YR8/3浅黄橙		

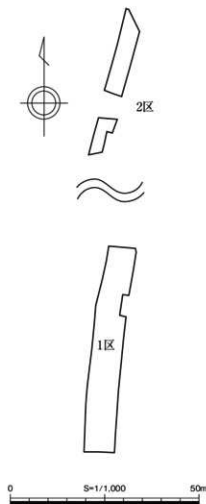
第10表 平成30年度遺物観察表(石製品)

番号	遺構	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石 材	備考
	出土地点							
109	I区	打製石斧	1130	800	25.0	245	安山岩	上部欠損
	SD1							
110	I区	打製石斧	1710	100.5	33.0	520	粗粒凝灰岩	完形
	SD2							
111	I区	打製石斧	2170	112.5	36.0	940	凝灰岩	完形
	SD1							

第6章 令和2(2020)年度の調査成果

第1節 調査の概要

令和2年度の調査は平成30年度調査範囲の北側で、南北約100mの範囲である。調査区は大きく南北に分かれ、南側を1区、北側を2区とした上で、さらに2区は北側のN区と南側のS区に分かれての調査となった。2区は北端を除くと比較的遺構の密度が低く、また遺構の種類も小穴のみである。一方1区は全体的に遺構が密集しており、特に中央から南側は大型の土坑状の遺構が複数みられることが全体的な様相といえる。また1区から古代と中世の遺物が多く出土しており、大きく時期が異なる集落が存在したと考えられる。なお、1区の西側は令和4年度に広範囲を調査しており、上記と同様に古代と中世の遺構が存在することが明らかになっている。この調査の報告時に本章の成果を改めて検討すべきものと考えられるため、ここでは事実関係を列記する形で報告としたい。



第43図 令和2年度調査区配置略図
(S=1/1,000)

第2節 遺構

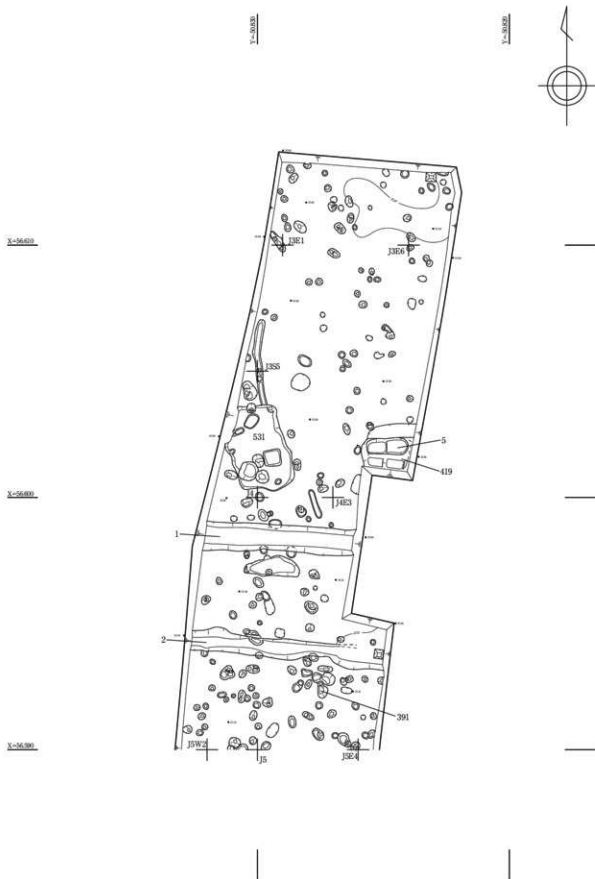
1. 1区(第44・45図)

南北74m、幅約8mほどの南北に長い調査区である。調査は重機で地山検出面まで掘り下げ検出できた遺構を掘削した。遺構番号は当初の遺構検出時に明らかに大型の遺構として認識できたものを先行して附番し、以下遺構種別を問わず通し番号を割り振った。調査の過程で覆土の色調から中世(上層)の遺構と古代(下層)の遺構に識別できると判断し、各遺構の覆土を観察・記録する際の基準とした。

検出できた遺構は溝3条、堅穴建物1棟、堅穴状遺構または土坑27基及び小穴である。以下に主な遺構を列記する。

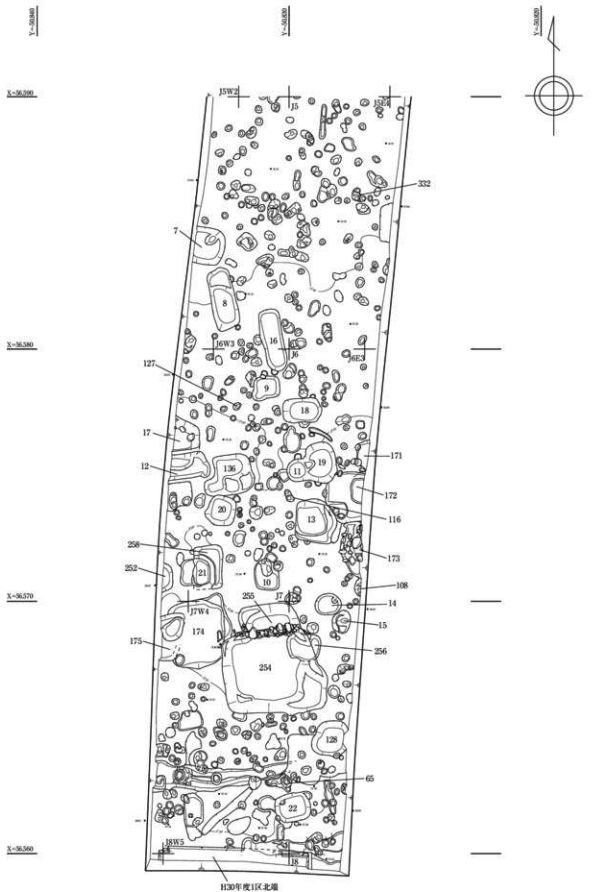
SI531(第46図)

調査区北側の西壁際で検出した堅穴建物である。北西隅は調査区外であるものの、おおむね全体像を把握することができた。北西-南東方向に長軸をもつ平面隅丸長方形プランで、南北3.4m、東西2.3m程である。検出面からの掘り込みは20cm程度と浅く、上部は削平されたものと考えられる。周溝は確認できず、伴う柱穴や竈も不明である。床面は凹凸が大きく、貼り床の痕跡は認められない。覆土は古代(下層)のもので、焼土や炭化物が多数含まれている。出土遺物は覆土中から複数出土しており、うち実測できた5点を掲載した。(第58図115~119) 煮炊具は115の土師器塙と119の長胴甕がある。115は口縁部を握み挙げるように屈曲し、胴部上位は横方向のカキ目が残し、下部は削り調整を行っている。119は胴部上段のみが出土しているが、外面に横方向のカキ目が残る。供膳具は116の内外面赤彩の土師器坏蓋と117の土師器高坏脚部、118の須恵器坏がある。

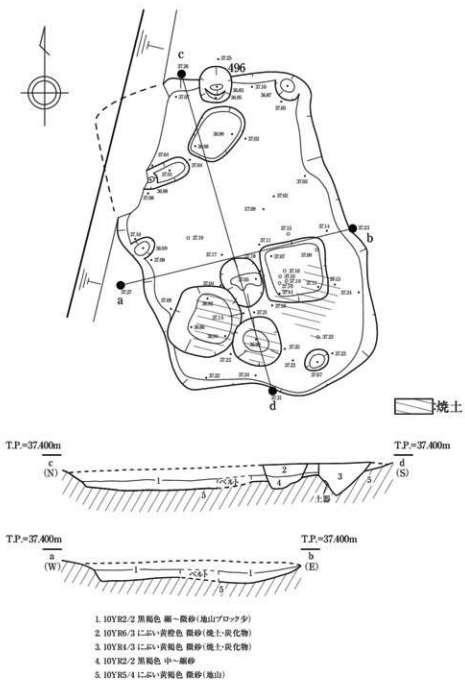


第 44 图 1区平面图1(北侧)(S=1/150)

0 S=1/150 5m



第 45 图 1区平面図2(南侧) (S=1/150)



第 46 図 SI531 平面・断面図 (S=1/40)



SD1・2 (第48図)

調査区北側で検出した、東西方向にのびる2条の並行する溝である。北側のSD1は地山で確認できたもので幅50cm程であるが、調査区東壁で最大幅1.8m、最上部から底部まで50cm程の溝である。断面形は緩やかに窪む断面U字形で、特に北側の立ち上がりは緩やかである。SD2はSD1と比べると幅が狭く、掘り込みも浅い溝である。両溝とも覆土は中世(上層)のものと判断した。遺物は出土していない。この並行する溝は道路状遺構と考えられる。道路幅はおおよそ4.4mを図る。

SK5・419 (第49図)

調査区北側の東壁際で検出した、方形プランの土坑(SK419)及びこれを切る東西長の土坑(SK5)である。SI419は遺構の北西隅のみが検出できており、全容は不明である。いずれも覆土は中世(上層)のものと判断した。SI419は南北1.3m、東西2mの範囲を検出した、地山からの掘り込みは約40cmである。SI5は東西1.7m、南北60cm程の土坑で、掘り込みは約18cmと非常に浅い。出土遺物はSI419から5点掲載した(第58図121~125)。いずれも古代の土師器・須恵器であり、覆土から想定できる時期とずれがあることから、後世の混ざり込と考えられる。

SK7 (第49図)

調査区中央の西壁際で検出した土坑である。西側は調査区外にのびるため東西幅は不明である。南北1.4m、東西1.2m以上の平面隅丸方形プランで、覆土から古代(下層)に属すると判断した。掘り込みは西壁で最大36cmほど掘りこまれている。遺物は出土していない。

SK8 (第49図)

調査区中央で検出した南北方向にのびる平面隅丸方形プランの土坑である。南北2.4m、東西98cmを測り、検出面からの深さは約50cmである。断面は箱状で底部は平坦となる。覆土は上下2層に分かれ、上層は地山土が多く混じり人為的に堆積した様相を呈する。覆土から中世のものと判断した。出土遺物は3点掲載している(第58図129~131)。129と130は中世土師器である。129が底部から内湾しつつ口縁まで立ち上がるもので、130は平底風の底部から口縁まで若干反しつつ立ち上がる。14世紀後半ごろのものか。131は古瀬戸瓶子の小片である。

SK9 (第50図)

調査区南側で検出した土坑である。南西隅が若干突出する平面方形プランで、南北90cm、東西1.4m、深さ約30cmの浅い遺構である。出土遺物はない。覆土から中世(上層)と判断した。

SK16 (第50図)

SI8と類似する土坑である。南北2.5m、東西85cm程の南北に長い平面プランで、断面は箱状に95cmほど掘りこまれる。覆土は中世のものが主体であり、南から北方向へブロック土や炭化物が混じる覆土で埋没したと考えられる。遺物は出土していない。

SK18 (第50図)

調査区南側で検出した平面隅丸方形プランの土坑である。東西1.56m、南北92cm、深さ80cm程で、断面は箱状に掘りこまれている。覆土は中世のもので、炭化物を含む。出土遺物は青磁塊1点が出土している(第58図132)。小片であるが外面に篋彫りの連弁文が刻まれており、14世紀後半頃のものと考えられる。

SK11・19 (第50図)

調査区南側で検出した土坑である。十字にベルトを残し掘削した結果、2基の土坑が重複していると判断した。新しいものをSK11、切られる古いものをSK19とした。SK11は平面円形プランで、南北90cm、東西110cm、深さ76cm程を測る。SK19は平面隅丸方形プランで南北の長軸164cm、東西は約100cmとなる。断面形は箱状で地山から60cm程掘りこまれ、南から北方向へブロック土や炭化物を多く含む覆土が流れ込むように埋め戻されていることが確認できた。出土遺物はSK19から青磁碗底部の小片が1点出土している(第58図134)。

SK20 (第51図)

調査区南側で検出した平面隅丸方形プランの土坑である。一辺110から160cm、深さ34cm程で、断面は緩やかなU字状となる。覆土は上層主体である。出土遺物はない。

SK13 (第51図)

調査区南側で検出した土坑である。平面形は不整形な長方形プランで、南側と東側には中段にテラス状の段を持つ。南北170cm、東西120cm程で、掘り込みは最も深い点で検出面から約64cmである。中世土師器の皿1点が出土している。(第58図135)

SK136 (第51図)

調査区南側で検出した土坑である。SK12、SK20と重複しており、いずれの遺構にも切られている。平面隅丸方形プランで東西方向に長軸を持つ。東西194cm、南北158cm、断面は箱状で最も深い点で約100cm掘りこまれる。覆土は上層主体で、ブロック土を多く含む。遺物は出土していないが、中世の遺構と考えられる。

SK21 (第51図)

調査区南側で検出した土坑である。SI258に切られている。平面隅丸方形プランで東西115cm、南北106cm、断面は箱状で最も深い点で約40cm掘りこまれる。覆土は上層主体である。遺物は出土していないが、中世の遺構と考えられる。

SK12・17 (第52図)

調査区南側の西壁にかかる形で検出した土坑である。SI12がSI17を切る。いずれの土坑も調査区外まで続いたため全体像は不明である。SI12は東西方向に長い土坑で、南北98cm、東西は150cm以上となる。掘り込みはSI17より浅く、最も高い位置から底部まで約50cmである。SI17はSI12に切られるものの、掘り込みが深いため底部で平面形を確認することができた。南北220cm、東西は100cm以上の平面方形プランと考えられる。底部は平坦で肩口にかけてゆるやかにたちあがる。覆土は上層主体である。遺物は出土していないが中世の遺構と考えられる。

SK171・172・173 (第53図)

調査区南側の東壁際にかかる形で検出した土坑である。断面の検討の結果3基の土坑と1基の小穴(P108)が重複しており、さらにSI172がSK19とSK13にそれぞれ切られている。SI171は南北134cm以上、東西45cm以上の平面方形プランである。掘り込みは約20cm程度と浅い。SI172はSI171とSI173を切る。南北200cm、東西150cm以上の土坑で、掘り込みは約34cmである。SI173は南北230cm以上、東西90cm以上で、P180に切られる。掘り込みは約45cmで、底部で礫が多数出土した。またこの礫につぶされる形で石製の行火(第59図139)及び珠洲焼片口跡(第59図137)が出土している。底部のみの出土であり口縁形態が不明であるため時期の絞り込みに苦しむが、14世紀後半から15世紀中頃のものであろうか。

SI174・175、SK252 (第54図)

調査区南西隅で検出した土坑である。地山で検出した時点で遺構上部は削平してしまっている。SI174とSI175は重複しており、SI175が切る。SI174は平面隅丸方形プランで、一辺270cm、掘り込みは約5cm程度と非常に浅く、底面は西に向かって傾斜している。SI175は調査区西壁で南北210cm程の土坑である。大半が調査区西壁外に延びるため規模は不明である。掘り込みは最も高い位置から約40cmを測る。SK252は断面図で最大幅222cmを測る。上部から20cm程でテラス状の段を持ち、さらに幅118cm程の土坑状遺構となる。掘り込みは最上部から58cm程となる。いずれも覆土は上層主体で、SI175から14世紀中頃の珠洲焼の壺口縁部が出土している(第58図136)。

SI254・255、SK256 (第55図)

調査区南側で検出した大型の竪穴状遺構である。SI254がSI255およびSK256を切る。SI254は東西380cm、南北332cm、検出面からの掘り込みは約60cmを測る。南東隅は一段高い平坦面を持つ。

SI254で特に着目されるものは北壁際に築かれた石積である。拳大から人頭台程の大ぶりな河原石を2段から4段ほど積み上げており、SI255との重複部分を補強するためのものと考えられる。出土遺物は中世陶磁器類が数点出土しており、(第59図143・144、第60図145)特に145の折縁深皿と考えられる小片はP116から出土したものと接合した。

SI255はSI254に切られるため規模は不明であるが、東西230cm程の平面方形プランである。SK256は長軸135cm程の平面楕円形の土坑である。覆土からいずれも中世でSI254との時期差は大きくないものと考えられる。SI255の覆土はブロック土を非常に多く含むもので、人為的に埋め戻された後にSI254に建て替えられたものと想定できる。

SK22 (第56図)

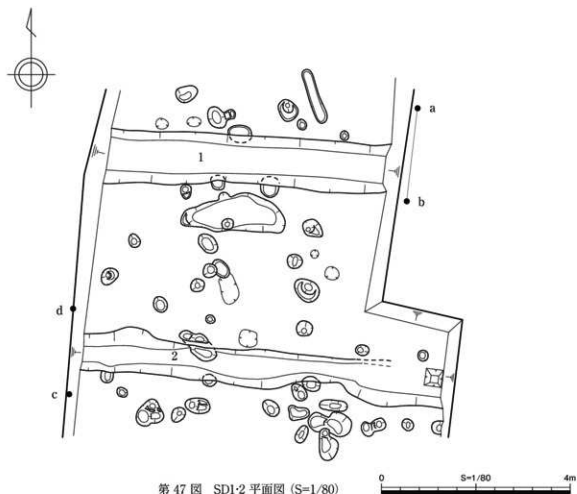
調査区南東隅で検出し隅丸方形プランの土坑である。北西隅が突出するいびつな形状であるが、長軸150cm、深さ約40cmを測る。覆土は上下層に分けられ、最終的に埋没した層から大ぶりな礫とともに珠洲焼播鉢1点が出土している(第60図147)。口縁部が内傾気味に肥厚し、口縁部の櫛目波状文帯は見られない。14世紀後半から15世紀初頭のものか。

SK128 (第56図)

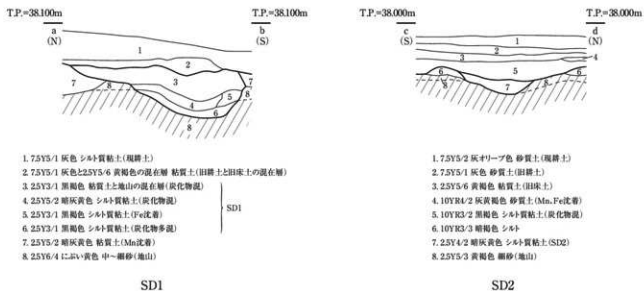
調査区南側の東壁際で検出した土坑である。東端は調査区外であるがおおむね全体像は把握できた。平面形は楕円に近い隅丸方形プランで、長軸140cm、深さ86cmを測る。覆土は中世のもので炭化物を多く含む。

SK15 (第56図)

調査区南側で検出した小土坑である。長軸90cm程の平面楕円形で、掘り込みは約34cm、覆土は下層主体のものである。



第 47 図 SD1-2 平面図 (S=1/80)



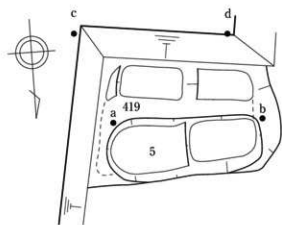
1. 75Y3/1 灰色 シルト質粘土 (層粘土)
2. 75Y3/1 灰色 と 25Y3/6 黄褐色 の混在層 粘質土 (田跡土と田床土の混在層)
3. 25Y3/1 黒褐色 粘質土と地山の混在層 (炭化物混)
4. 25Y3/2 暗灰黄色 シルト質粘土 (炭化物混)
5. 25Y3/1 黒褐色 シルト質粘土 (Fe沈着)
6. 25Y3/1 黒褐色 シルト質粘土 (炭化物多混)
7. 25Y3/2 暗灰黄色 粘質土 (Mn沈着)
8. 25Y6/4 に近い黄色 中～細砂 (地山)

SD1

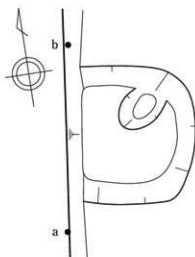
1. 75Y3/2 灰中～灰黄色 シルト質粘土 (層粘土)
2. 75Y3/1 灰色 砂質土 (田跡土)
3. 25Y3/6 黄褐色 粘質土 (田床土)
4. 10YR4/2 灰黄褐色 砂質土 (Mn, Fe沈着)
5. 10YR3/2 黒褐色 シルト質粘土 (炭化物混)
6. 10YR3/3 暗褐色 シルト
7. 25Y4/2 暗灰黄色 シルト質粘土 (SD2)
8. 25Y3/3 黄褐色 細砂 (地山)

SD2

第 48 図 SD1-2 断面図 (S=1/40)



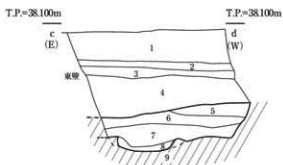
SK5-419 平面図



西壁

1. 7.5Y5/2 灰オリーブ色 砂質土(旧耕土)
2. 2.5Y5/6 黄褐色 粘質土(旧床土)
3. 7.5Y5/1 灰色 砂質土
4. 10YR3/2 黒褐色 砂質土(下半にFe沈着)
5. 10YR2/2 黒褐色 粘土(炭化物混)(SI7)
6. 10YR2/2 黒褐色 シルト
7. 10YR5/2 に近い黄褐色 細砂(地山)

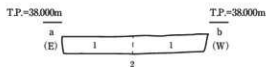
SK7 平面・断面図



1. 2.5YR4/1 黄灰色 粘質土(旧耕土)
2. 10YR4/4 褐色 粘質土(Fe多沈)(旧床土)
3. 7.5YR3/2 黒褐色 粘質土(Fe多量沈着)
4. 2.5Y3/2 黒褐色 シルト質粘土
5. 2.5Y3/1 黒褐色 細砂(φ1cm前後の地山(ブロック少混))
6. 2.5Y3/2 黒褐色 シルト(φ1cm-2cmの地山(ブロック少混))
7. 6層と7層の混在層
8. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 細砂(炭化物少混)
9. 10YR4/3 に近い黄褐色 細砂(地山)

SI419

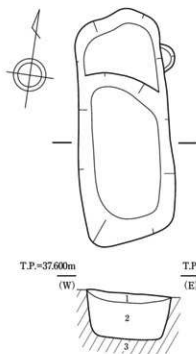
SK419 断面図



1. 2.5Y3/2 黒褐色 砂質土(炭化物多混)
2. 2.5Y3/1 黄灰色 粘土(ブロックと地山(ブロック混))
2. 2.5Y4/4 オリーブ褐色 細砂(混砂(SI419))

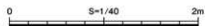
SI5

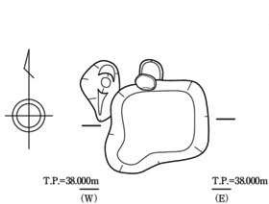
SK5 断面図



1. 10YR5/4 に近い黄褐色 細砂-限砂(Fe混沈着)(10YR2/2 黒褐色 粘土が少量混)
2. 10YR2/2 黒褐色 シルト質粘質土
3. 10YR5/4 に近い黄褐色 細砂(地山)

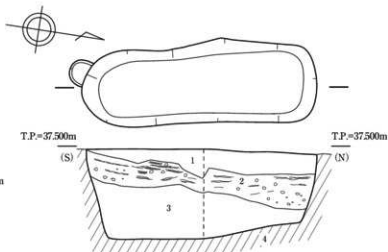
SK8 平面・断面図





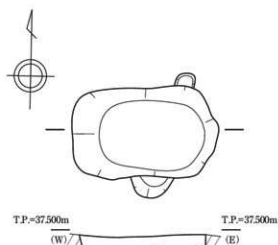
1. 10YR3/2 黒褐色 砂質土(炭化物混)
(10YR5/4 に近い黄褐色 の粘土ブロック(φ2cm程)混)
2. 10YR4/4 褐色 粗砂

SK9 平面・断面図



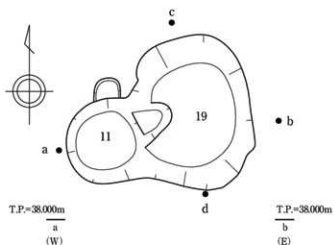
1. 10YR3/2 黒褐色 砂質土
2. 10YR4/3 に近い黄褐色 粗砂と1層の互層(炭化物混)
(φ1-2cmの明黄褐色 粘質土ブロック少混)
3. 10YR4/3 に近い黄褐色 粗砂(φ1cm)10YR3/2 黒褐色 砂質土ブロック土少混)
4. 10YR4/3 に近い黄褐色 粗砂(地山)

SK16 平面・断面図

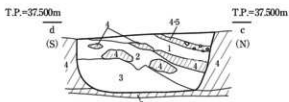


1. 10YR3/1 黒褐色 シルト
2. 10YR4/3 に近い黄褐色 粗砂に1層が混じる(炭化物混)
3. 10YR4/3 に近い黄褐色 粗砂(炭化物混)
4. 10YR4/3 に近い黄褐色 粗砂(地山)
5. 5Y4/2 灰オリーブ色 砂層(粗砂主体)(地山)

SK18 平面・断面図

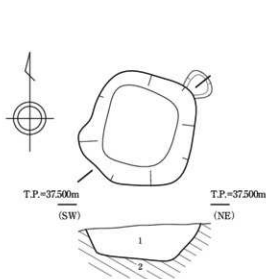


1. 10YR5/3 に近い黄褐色 砂質土(φ1-2cmの黒色 ブロック少混)に少し大礫少混)
2. 10YR5/3 に近い黄褐色 粗砂(最下層は灰色 砂礫層)(地山)



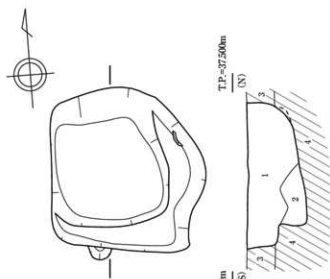
1. 10YR3/1 黒褐色 シルトと地山の混在層(炭化物混)
2. 10YR3/1 黒褐色 シルトと地山の混在層(炭化物多混)
3. 10YR3/1 黒褐色 シルト(炭化物多混)
4. 10YR4/3 に近い黄褐色 細-粗砂(地山)
5. 5Y4/2 灰オリーブ色 礫層(少し大礫)(地山)

SK11-19 平面・断面図



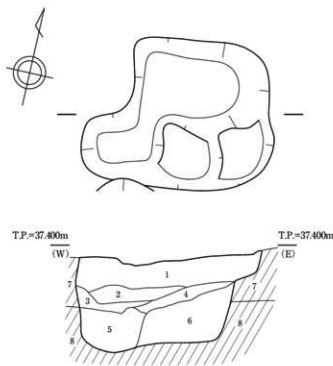
1. 5Y3/1 オリーブ黒色 シルト
2. 10YR4/3 に近い黄褐色 粗砂(地山)

SK20 平面・断面図



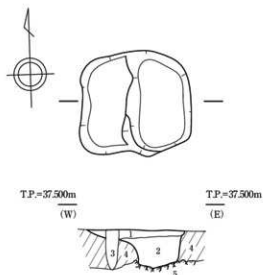
1. 10YR4/2 灰黄褐色 シルト質粘土
2. 1層と3層の混在層
3. 10YR4/3 に近い黄褐色 粗砂(地山)
4. 5Y4/2 灰オリーブ色 粗砂(φ5cm程度混入)(地山)

SK13 平面・断面図



1. 10YR4/1 褐色色 シルトと地山ブロックの混在層(φ2~3cmの礫少混)
2. 10YR4/1 褐色色 シルト質粘土
3. 10YR4/1 褐色色 粘土に10YR6/1 褐色色 粘土ブロック多混じる(Fe沈着)
4. 10YR4/3 に近い黄褐色 シルト質粘土と10YR4/1 褐色色 シルトの混在層
5. 10YR4/1 褐色色 シルトと地山ブロックの混在層
6. 10YR4/1 褐色色 シルト(炭化物混)
7. 10YR4/3 に近い黄褐色 シルト(地山)
8. 礫層(地山)

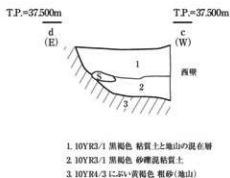
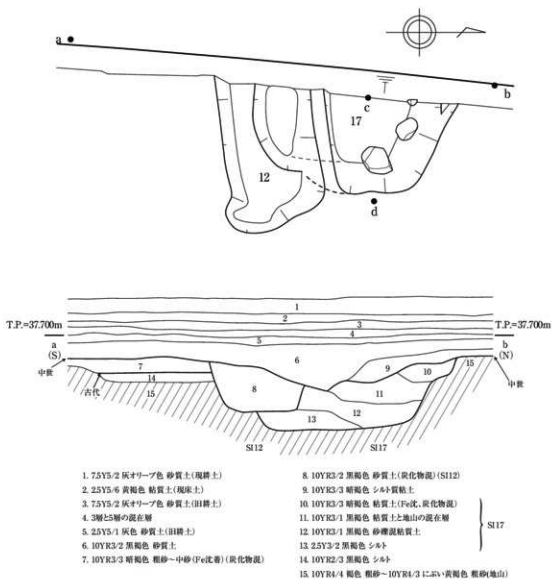
SK136 平面・断面図



1. 25Y4/2暗灰黄色 粘質土
2. 25Y5/3黄褐色 シルト質粘質土
3. 25Y4/1黄褐色 砂礫混粘質土(上層からの切合)
4. 10YR4/3に近い黄褐色 粗砂(地山)
5. 礫層(地山)

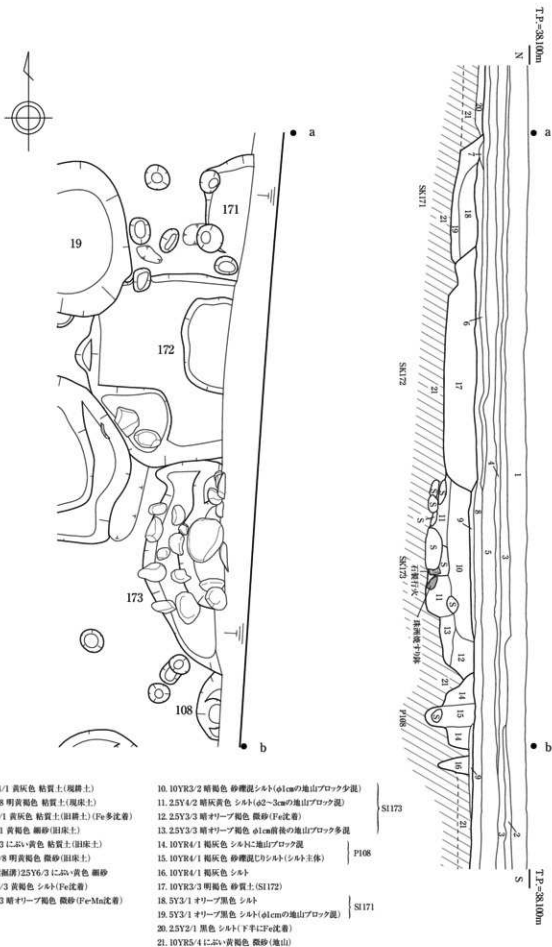
SK21 平面・断面図





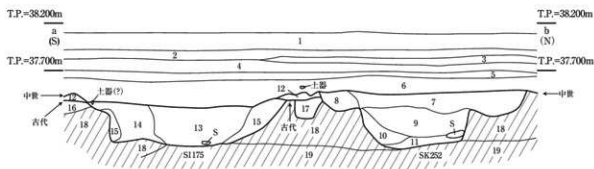
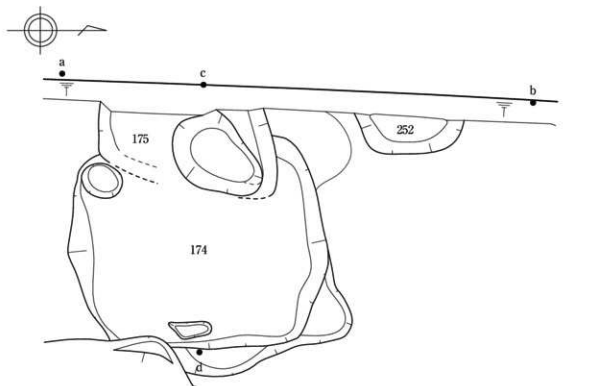
第 52 図 SK12-17 平面・断面図 (S=1/40)



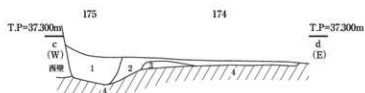


1. 2.5YR4/1 黄灰色 粘質土(現耕土)
2. 2.5Y6/8 明黄褐色 粘質土(現床土)
3. 2.5Y 5/1 黄灰色 粘質土(田耕土)(Fe多沈着)
4. 2.5Y 5/1 黄褐色 細砂(田床土)
5. 2.5Y 6/3 にぶい-黄色 粘質土(田床土)
6. 2.5Y 6/8 明黄褐色 微砂(田床土)
- 7.(中實茶飯跡)2.5Y6/3 にぶい-黄色 微砂
8. 10YR3/3 黄褐色 シルト(Fe沈着)
9. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 微砂(Fe-Mn沈着)
10. 10YR3/2 暗褐色 砂礫混シルト(ϕ 1cmの地山ブロック少量)
11. 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト(ϕ 2~3cmの地山ブロック混)
12. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 微砂(Fe沈着)
13. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 ϕ 1cm前後の地山ブロック多混
14. 10YR4/1 褐灰色 シルトに地山ブロック混
15. 10YR4/1 褐灰色 砂礫混シリルト(シルト主体)
16. 10YR4/1 褐灰色 シルト
17. 10YR3/3 明褐色 粘質土(SI172)
18. 5Y3/1 オリーブ黒色 シルト
19. 5Y3/1 オリーブ黒色 シルト(ϕ 1cmの地山ブロック混)
20. 2.5Y2/1 黒色 シルト(下平にFe沈着)
21. 10YR5/4 にぶい-黄褐色 微砂(地山)

第 53 図 SK171-172-173、P108 平面・断面図 (S=1/40)

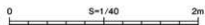


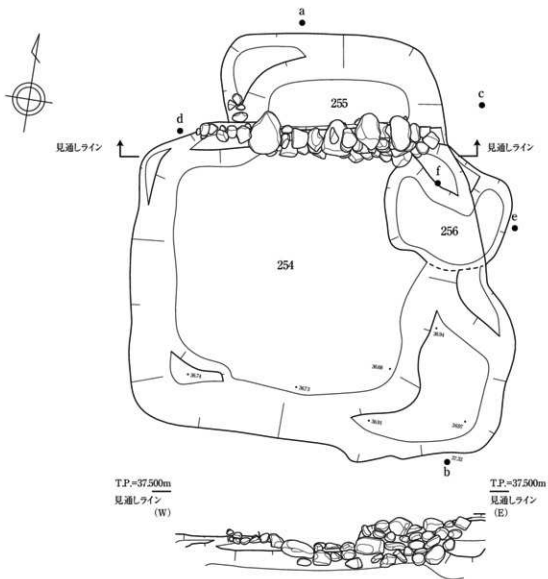
- | | | | |
|----------------------------|-------------------------------------|---|---------|
| 1. 7.5Y5/2 灰オリーブ色 砂質土(現耕土) | 7. 10YR2/2 黒褐色 シルト質粘土
地山ブロックの混在層 | 13. 10YR3/2 黒褐色 シルト(Fe沈着) | } SI175 |
| 2. 2.5Y5/6 黄褐色 粘質土(現耕土) | 8. 10YR3/2 黒褐色 細砂(Fe沈着) | 14. 10YR3/2 黒褐色 細砂(Mn, Fe沈着) | |
| 3. 7.5Y5/2 灰オリーブ色 砂質土(田耕土) | 9. 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂質土(Fe多沈着) | 15. 10YR4/2 灰黄褐色 粘質土(Fe, Mn沈着) | } SK252 |
| 4. 3層土層の混在層 | 10. 10YR3/2 黒褐色 砂質土(φ5cmの礫多混) | 16. 10YR4/2 灰黄褐色 粘質土と10YR4/4 褐色 シルトの混在層 | |
| 5. 2.5Y5/1 灰色 砂質土(田耕土) | 11. 10YR2/2 黒褐色 粘質土(φ5cmの礫多混) | 17. 10YR2/2 黒褐色 シルト(φ1~2cmの18層地山ブロック混) | } SK252 |
| 6. 10YR3/2 黒褐色 砂質土 | 12. 10YR2/2 黒褐色 細砂(18層地山ブロック混) | 18. 10YR4/4 褐色 シルト(地山) | |
| | | 19. 礫層(地山) | |



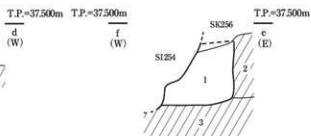
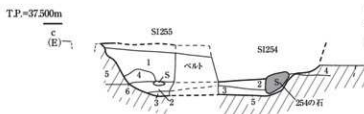
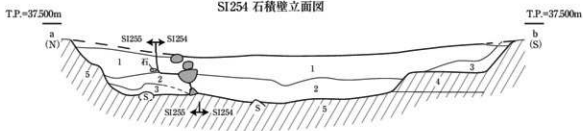
- | | |
|--|---------|
| 1. 10YR3/2 黒褐色 シルト(Fe沈着) | } SI174 |
| 2. 10YR3/2 黒褐色 シルトと10YR6/1 暗灰色 粘土ブロックの混在層にφ2~3cmの地山ブロック混 | |
| 3. 10YR3/2 黒褐色 シルト(炭化物混) | |
| 4. 10YR3/4 に赤い黄褐色 細砂(地山) | |

第 54 図 SI174-175、SK252 平面・断面図 (S=1/40)





SI254 石積壁立面図



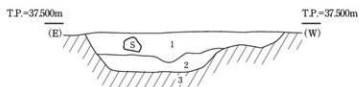
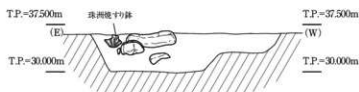
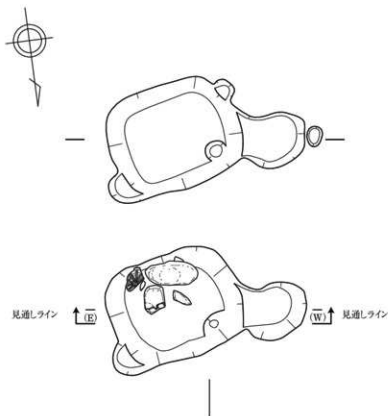
- SI254
- 10YR3/3 明褐色 砂質土
 - 2.5Y3/2 黒褐色 シルト(Fe沈着)
 - 2.5Y3/2 黒褐色 シルトに ϕ 2-3cmの4割地山ブロック混
 - 10YR5/4 に近い黄褐色 微砂(Fe多量沈着)(地山)
 - 2.5Y4/4 オリーブ褐色 粗砂(Fe多量沈着)(こぶし大礫混)

- SK256
- 2.5Y4/2 暗灰黄色 中～細砂(Mn沈着, Fe少沈着)
 - 10YR5/4 に近い黄褐色 微砂(地山)
 - 2.5Y4/4 オリーブ褐色 粗砂(こぶし大礫混)(地山)

- SI255
- 10YR3/2 黒褐色 シルトと地山4割の混在層
 - 2.5Y4/4 オリーブ褐色 粗砂
 - 10YR3/2 黒褐色 シルト(Fe沈着)
 - 10YR5/4 に近い黄褐色 微砂
 - 2.5Y4/4 オリーブ褐色 粗砂(こぶし大礫混)(地山)
 - 10YR5/4 に近い黄褐色 粗砂と2.5Y3/2 黒褐色 シルトの混在層(地山)

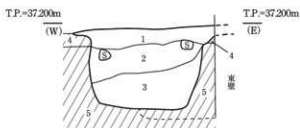
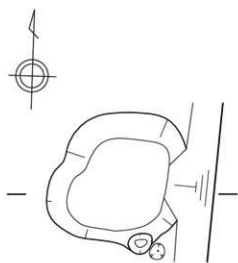
第 55 図 SI254-255,SK256 平面・立面・断面図 (S=1/40)





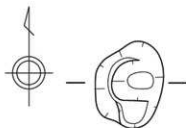
1. 5Y3/1 オリーブ黒色 シルト質粘土
2. 10YR3/1 黒褐色 砂礫混粘質土
3. 10YR4/3 に赤・黄褐色 細・微砂 (Fe多沈着) (地山)

SK22



1. 10YR3/2 黒褐色 シルト(炭化物多混, 下半Fe沈着)
2. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 粗砂~中砂 (φ1cmの地山ブロック混) (炭化物少量)
3. 2.5Y4/3 オリーブ褐色 粗砂 (φ1cmの地山ブロック混) (炭化物少量)
4. 2.5Y5/3 黄褐色 微砂(地山)
5. 5Y4/2 灰オリーブ色 砂礫(粗砂主体) (地山)

SK128



1. 2.5Y3/2 暗オリーブ褐色 シルト質粘土 (Mn沈着)
2. 10YR4/3 に赤・黄褐色 微砂(地山)

SK15

第 56 図 SK22-128-15 平面・立面・断面図 (S=1/40)



2. 2区 (第57図)

2区は1区の北側に位置している。1区の調査が終了後に着手した。調査区の中央は既存施設のため調査ができず、その南北の調査区を北側(N区)と南側(S区)に分けて調査を実施した。

検出した遺構は小穴及びびのびのあいまいな浅い溝状遺構のみである。記録は各遺構で半截またはベルトを残して土色を観察・記録し、完掘した。

この調査区において特段注目すべき遺構は無い。全体の傾向としてはN区の北側は遺構密度が急に高くなり、令和3年度調査区に続いていく様相が見て取れる。

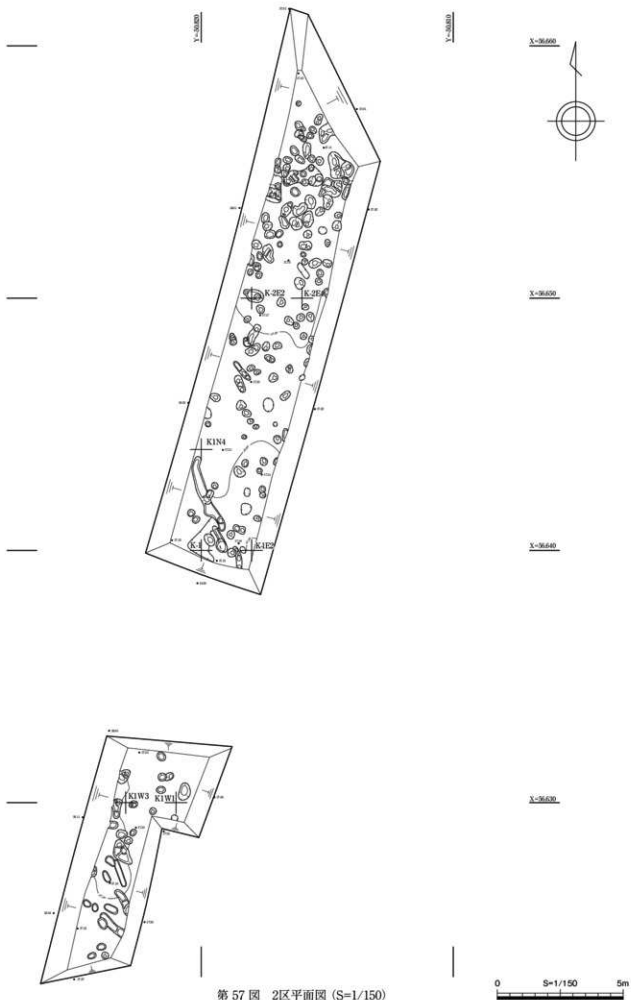
第3節 出土遺物(第58・59・60図)

令和2年度調査で出土した遺物のうち掲載したものは36点である。各遺構の説明において取り上げたものもあるが、本節で改めて概観する。出土した遺物は遺構の傾向と同じく古代と中世に大別され、遺物量は中世のものが多い。

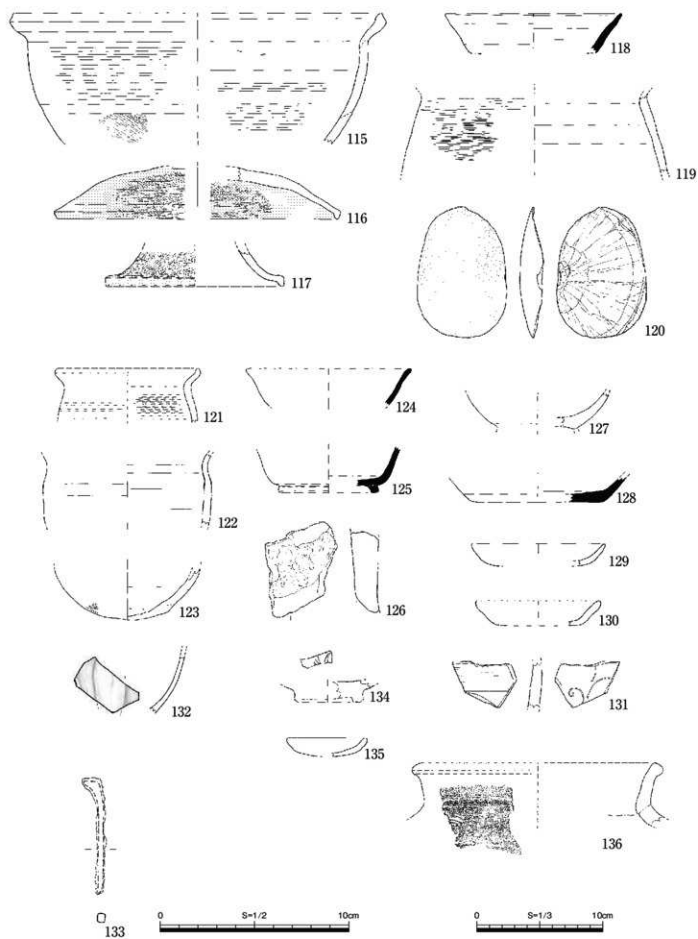
古代のものとしては第58図115から128がある。115は土師器埴で口縁部の断面三角形に近い形状のものである。116は土師器の坏蓋で、内外面ともに赤彩が施される。口縁部は小さく三角形状を呈する。117は高坏の脚部で、外面が赤彩される。118は須恵器坏で、底部から口縁部に向けて外傾して口径14.1cmに対して残存器高3.1cmと扁平な形状である。これらはおおむね8世紀の範疇と考えられる。このほか、土師器は煮炊具(121~124)、供膳具(127)などがあり、須恵器は124・125・128などの坏が出土している。

中世のものとしては、土師器皿(129・130・135)、青磁(132・134)、瀬戸焼(131・140・141・145・149)、珠洲焼(136~138・142・147・148)などがある。土師器皿は計6cm前後(135)と10cm前後(129・130)に分かれ、129には灯明痕が確認できる。これらの傾向は藤田邦雄氏の編年で末松遺跡A6埋納ピットが指標となっているⅣ期の特徴と考えられ、14世紀後半から末頃と位置付けられる(藤田1997)。青磁はいずれも小片であるが、132は鍋や間弁は省略されたやや不明瞭な連弁文を描く埴である。瀬戸焼は唐草文が施された瓶子(131)、卸皿(141)、折縁深皿(145)などが出土している。珠洲焼は片口鉢が吉岡康暢氏の編年でⅣ期後半からⅤ期、14世紀後半から15世紀中頃の中で収まるものと考えられる(吉岡1994)。

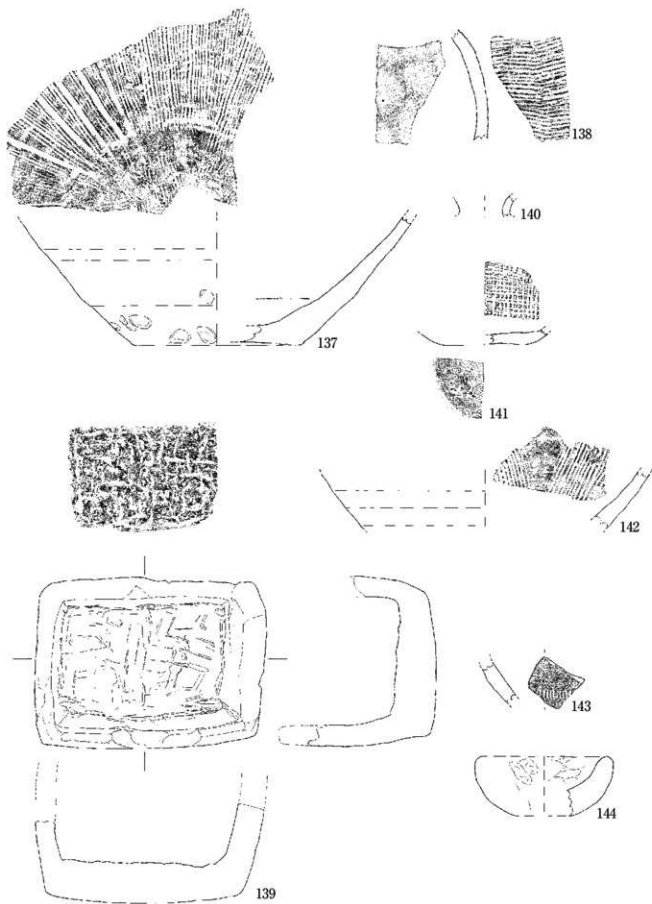
このほか石製品として、行火(139)や砥石(150・151)が出土している。砥石はいずれも目が細かく薄手に整形された仕上げ砥石とみられる。



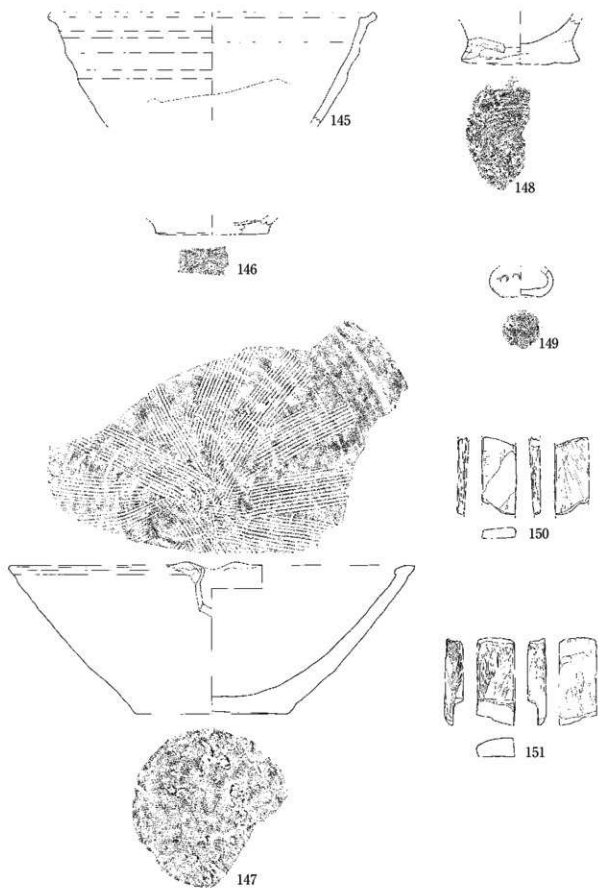
第 57 图 2区平面图 (S=1/150)



第 58 图 令和2年度末松遺跡出土遺物実測図1



第59図 令和2年度末松遺跡出土遺物実測図2



第60图 令和2年度末松遺跡出土遺物実測図3

0 S=1/3 10cm

第11表 令和2年度遺物観察表(土器)

番号	遺構 出土位置	器種	口径 (mm)	残存高 (mm)	底径 (mm)	調整(外)		色調(外)		残存率	備考
						調整(内)	色調(内)				
115	1K	土師器 壺	3000	—	頸部径 271.0	カキム、ハケ	75YR7/6橙	口縁部1/9	内外面:煤片着		
	531					カキム、ケズリ	75YR7/6橙				
116	1K	土師器 坏蓋	2280	—	—	ミガキ	5YR5/8明赤褐	口縁部1/9	内外面:赤彩		
	531					ミガキ	5YR5/8明赤褐				
117	1K	土師器 高坏脚基部	—	—	脚部径 142.0	ミガキ	5YR6/8橙	2/3	外面:赤彩		
	531					ヨコナテ	75YR7/6橙				
118	1K	須恵器 坏身	141.0	(31.5)	—	回転ナデ	25Y7/2灰黄	1/4			
	531					回転ナデ	25Y6/2灰黄				
119	1K	土師器 甕	—	630	頸部径 1800	カキム	75YR7/6橙	頸部1/6	外面:煤片着		
	531					ヨコナテ	75YR7/6橙				
121	1K	土師器 甕	1160	—	頸部径 101.0	カキム	75YR7/4C2.5a+橙	1/7			
	419					カキム	75YR7/6橙				
122	1K	土師器 甕	—	(58.0)	頸部径 128.0	ヨコナテ	5YR7/6橙	1/4	体部径134mm 内外面頸部:炭化物付着		
	419					ヨコナテ	75YR8/4浅黄橙				
123	1K	土師器 甕または壺	—	(43.0)	680	ケズリ後ハケ、ナデ	75YR7/3C2.5a+橙	2/3	内面に炭化物付着 外面:煤片着		
	419					指頭1行肌ありヨコナテ	75YR6/2灰褐				
124	1K	須恵器 坏	1320	(30.0)	—	回転ナデ	5B7/1明青灰	1/4			
	419					回転ナデ	5Y7/2灰白				
125	1K	須恵器 有台坏	—	(37.0)	800	回転ナデ	N7/灰白	1/4			
	419					回転ナデ	N7/灰白				
127	1K	土師器 有台壺	—	(28.0)	高台径 36.0	ナデ	5YR7/6橙	底部1/3	内外面:赤彩の可能性あり		
	391					—	5YR8/4淡橙				
128	1K	須恵器 坏	—	(20.0)	106.0	回転ナデ	10YR8/1灰白	底部1/4			
	391					回転ナデ	10YR8/1灰白				
129	1K	土師器 甕	107.0	(18.0)	—	ナデ	75YR7/4C2.5a+橙	1/5	灯明皿か?		
	8					ナデ	75YR7/3C2.5a+橙				
130	1K	土師器 甕	(100.0)	(20.0)	(80.0)	ナデ	75YR8/4浅黄橙	小片			
	8					ナデ	75YR8/4浅黄橙				
131	1K	古瀬戸 瓶子(胴部)	—	(36.0)	—	—	10Y7/2灰白	小片	唐草彫文様あり		
	8					—	25Y8/1灰白				
132	1K	青磁 碗	—	—	—	—	25G7/1明オリーブ灰	小片	内外面貫入あり 垂弁文		
	18					—	25G7/1明オリーブ灰				
134	1K	青磁 碗	—	(18.0)	高台径 57.0	—	25GY5/1オリーブ灰	1/4	見込み:文様あり		
	19					—	5GY6/1オリーブ灰				
135	1K	土師器 甕	64.0	(15.0)	—	ナデ	5YR8/4淡橙	1/5			
	13					ナデ	75YR8/6浅黄橙				
136	1K	珠洲焼 壺口縁	(200.0)	(44.0)	—	ヨコナテ	5B5/1青灰	小片	頸部に波状かか?		
	175					ヨコナテ	5P16/1青灰				
137	1K	珠洲焼 片口鉢	—	(102.0)	138.0	ナデ	5P16/1青灰	1/4	一部陥灰あり		
	173					ナデ(粗雑)	5P15/1青灰				
138	1K	珠洲焼 甕または壺	—	(89.0)	—	タタキ	5P15/1青灰	小片			
	172					スピオサエ	5P16/1青灰				
140	1K	陶器(瀬戸) 瓶頸部	—	(17.0)	—	ヨコナテ	10Y6/1灰	1/4	陥灰層厚い 貫入		
	15					ナデ	N8/灰白				
141	1K	陶器(瀬戸) 脚皿	—	(13.0)	76.0	ナデ	5Y8/1灰白	1/4	内外面:炭化物付着 底部回転糸切り肌		
	15					脚皿	5Y8/1灰白				
142	1K	珠洲焼 部鉢	—	(47.0)	脚部径 222.0	ヨコナテ	5B7/1明青灰	体部1/7	内面一部炭化物付着		
	15					ナデ、脚皿	5B6/1青灰				
143	1K	陶器 壺?(胴部)	—	—	—	ナデ、文様	10B67/1明青灰	小片			
	254					ナデ	5B6/1青灰 10B67/1明青灰				

番号	遺構 出土位置	器種	口径 (mm)	残存高 (mm)	底径 (mm)	調整(外)		残存率	備考
						調整(内)	色調(内)		
144	1K	土製品 埴	(1100)	(480)	—	ヘラ状工具用いてナデ上	7.5YR7/4Cに赤橙	1/9	
	254					ユビオサエ、ナデ	7.5YR8/6浅黄橙		
145	1K	陶器(古瀬戸) 折縁深皿	2620	(890)	—	ヨコナデ、施輪	5Y6/3オリーブ黄	1/7	254-116から出土した2片。 漆継ぎの痕跡あり
	254-116					ヨコナデ	7.5Y5/3灰オリーブ		
146	1K	土師器 内黒陶	—	(120)	(900)	ナデ	7.5YR8/4浅黄橙	1/6	内黒 底部回転へう切り痕かき
	22					ミガキ	10YR8/3浅黄橙		
147	1K	珠洒焼 片口鉢	(3240)	1210	1250	ヨコナデ	N6/灰~N7/灰白	底部完存	
	22					ナデのち、タテハケ	N6/灰~N7/灰白		
148	1K	珠洒焼 壺または甕底部	—	(380)	950	ナデ、ケズリ	10B6/4暗青灰	1/2	底部静止糸切り痕
	332					ナデ	7.5Y7/1灰白		
149	1K	陶器(古瀬戸) 水滴	—	(220)	340	—	5Y6/4オリーブ黄	1/3	胴径51mm 丸型による画文
	127					—	2.5Y8/1灰白		

第12表 令和2年度遺物観察表(石製品)

番号	遺構 出土地点	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石材	備考
126	1K 2	石製品	760	580	240	438	凝灰岩	強く被熱、内面煤付着
139	1K 173							
150	1K 65	砥石	620	280	85	21.2	砂岩	
151	1K 遺構検出	砥石	700	300	150	449	砂岩	

第13表 令和2年度遺物観察表(金属製品)

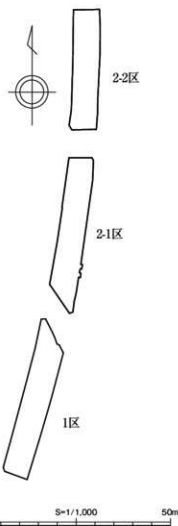
番号	遺構 出土地点	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考

第7章 令和3(2021)年度の調査成果

第1節 調査の概要

調査区は末松遺跡北東に位置する。末松遺跡は郷用水の周辺に広がる遺跡で、その広がり、林口川の南北方向の流れが一旦西方向に折れ、中林集落に当たる手前で再び北方向に流れを変える周辺一帯にあたる。

調査区は3区に分けて行った(第61図)。調査工程の関係上、先行して調査を実施した順番で調査区を設定した。第61図で示したように、南端に位置する調査区を1区とし、耕作地の稲刈り後に調査を実施した調査区を2区としている。2区については、農道により分断されている南側を2-1区、北側を2-2区として調査区を設定した。



第61図 令和3年度調査区配置略図
(S=1/1,000)

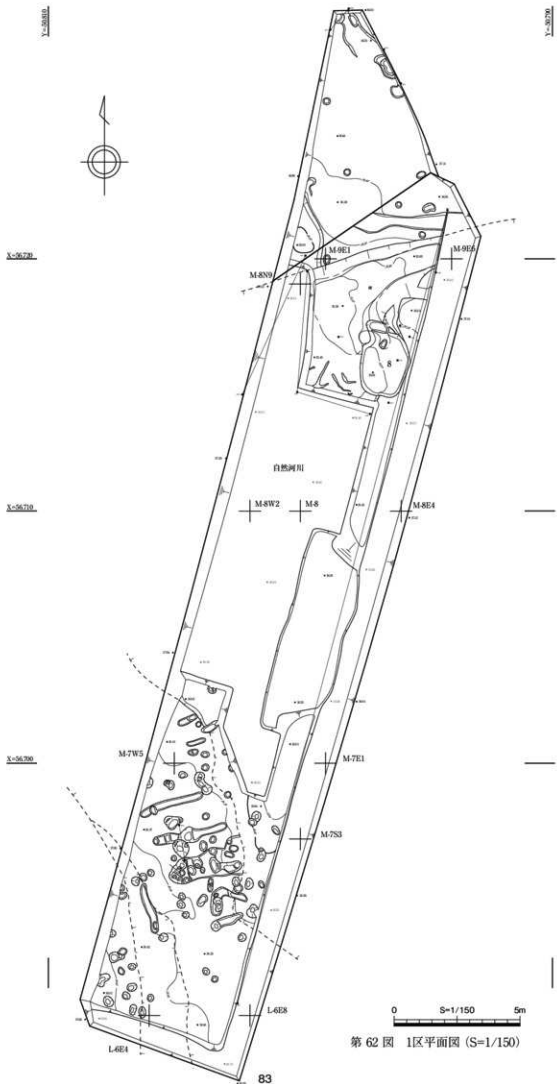
第2節 遺構

1. 1区(第62図)

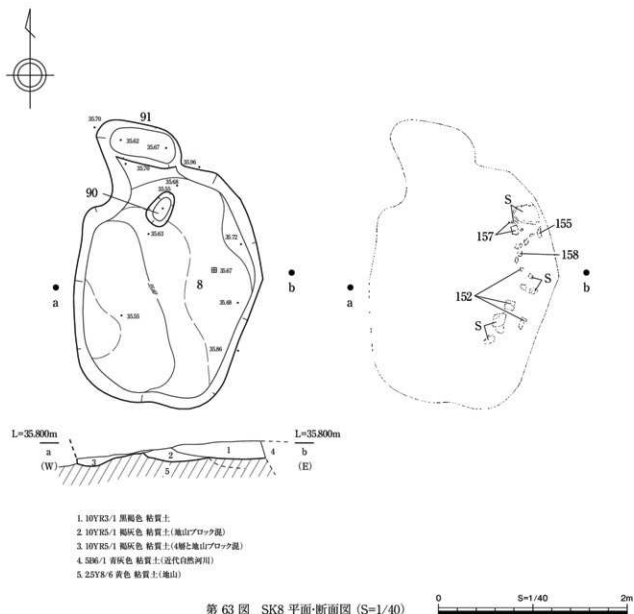
南北約40.0m×東西約6.5mの調査区である。調査区中央には近代以降の自然河川が東西に流れ、自然河川の南側でピットや溝、北側でSK8を検出した。

SK8(第63図)

調査区北側で検出した長軸2.6m、短軸2.0mの不定形な土坑である。自然流路掘り下げ時の下層で確認しており、深さは確認できた箇所20cmであった。北側には長径94cm、短径40cm、最深部8cmのP91が所在し、土坑内部には長径40cm、短径22cm、深さ15cmのP90が存在する。遺物は東部分で集中して出土しており、土師器埴(152)、土師器長胴甕(153)、須恵器長頸瓶(154)、須恵器瓶(155) 須恵器坏(156)、(157)、(159) 須恵器無台坏(158)が出土している。年代は8世紀後半から9世紀前半と考えられる。



第 62 图 1区平面图 (S=1/150)



2. 2-1区 (第64図)

南北38.5m、東西6.5mの調査区である。調査区南側ではSB1、SB2、SA1の他、多数のピットなどを確認した。また、調査区西壁付近ではSI102を検出している。調査区北側では遺構は希薄となり、1区で確認したものと同等に東西に流れる自然河川を確認している。

以下は主要遺構の概要である。

SI102 (第65図)

調査区南側西壁付近で検出した方形の堅穴建物で、西側部分の大半は調査区外となっているため、全容は不明である。北西-南東4.3m、北東-南西2.9m以上、面積8.3m以上、深さ約6cmを測る。床面には貼床が施されており、堅穴南東隅では炭化物を確認した。カマドは確認していない。堅穴内では複数のピットを検出しているが、SI102に付属するような柱穴は確認できなかった。遺物は、土師器の甕 (187) が出土している。

Y=30400

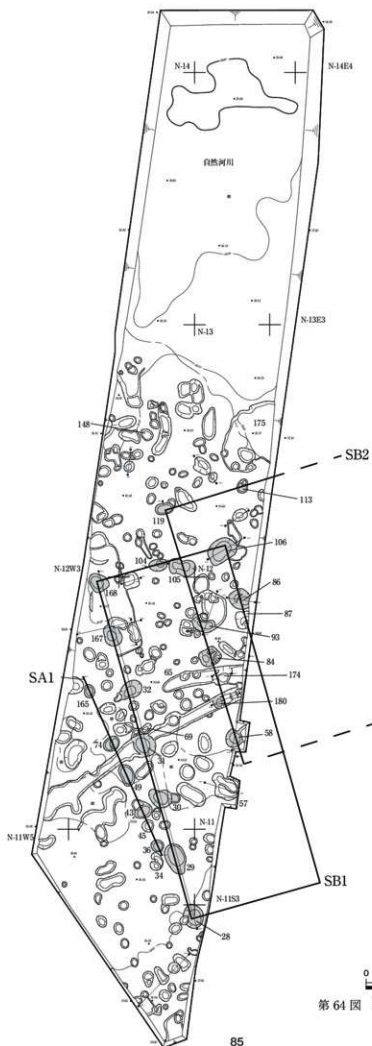
X=56770

X=56760

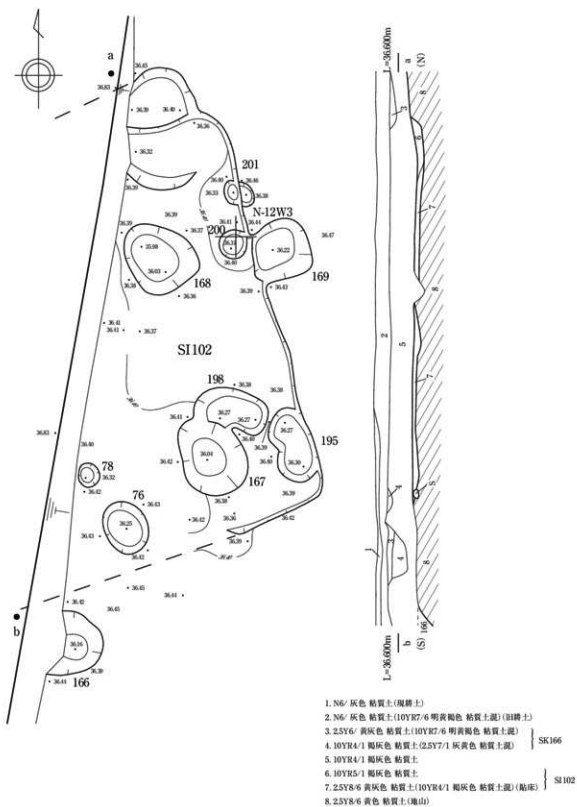
X=56750

X=56740

Y=30700

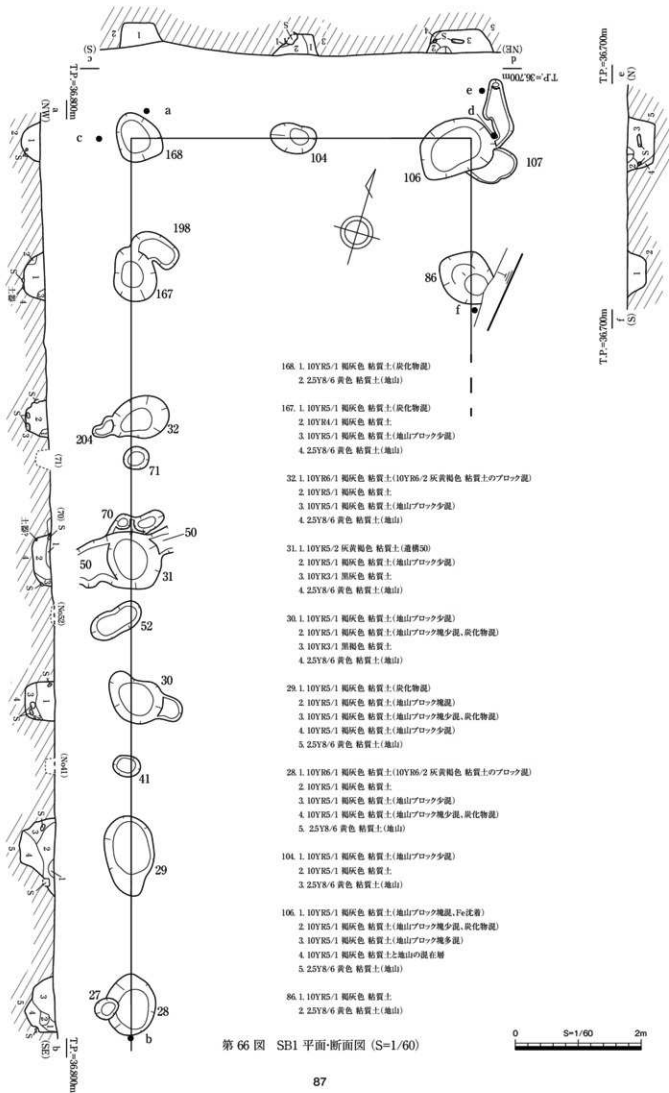


第 64 图 2-1区平面图 (S=1/150)

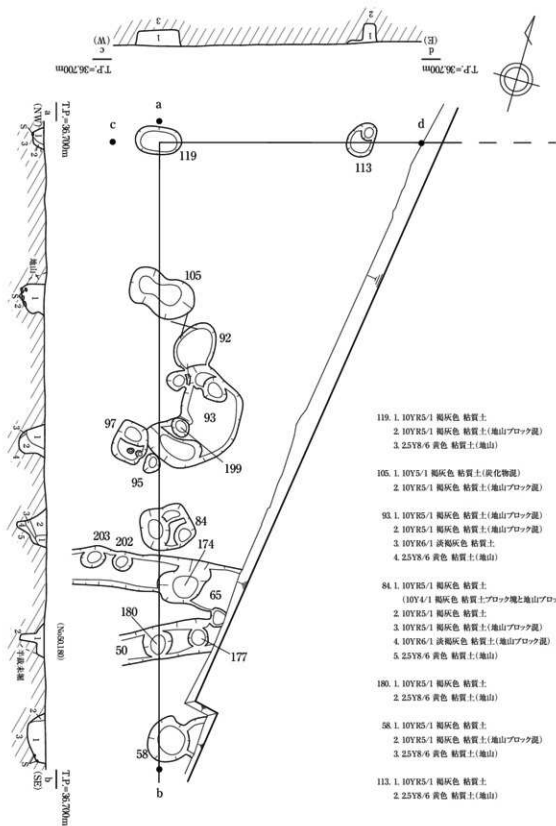


第 65 圖 SI102,SK166 平面·断面圖 (S=1/40)





166. 1. 10YR5/1 黒灰色 粘質土(炭化物混)
2. 2.5YR/6 黄色 粘質土(地山)
167. 1. 10YR5/1 黒灰色 粘質土(炭化物混)
2. 10YR4/1 黒灰色 粘質土
3. 10YR5/1 黒灰色 粘質土(地山ブロック少量)
4. 2.5YR/6 黄色 粘質土(地山)
32. 1. 10YR6/1 黒灰色 粘質土(10YR6/2 灰黄褐色 粘質土のブロック混)
2. 10YR5/1 黒灰色 粘質土
3. 10YR5/1 黒灰色 粘質土(地山ブロック少量)
4. 2.5YR/6 黄色 粘質土(地山)
31. 1. 10YR5/2 灰黄褐色 粘質土(遺構50)
2. 10YR5/1 黒灰色 粘質土(地山ブロック少量)
3. 10YR3/1 黒褐色 粘質土
4. 2.5YR/6 黄色 粘質土(地山)
30. 1. 10YR5/1 黒灰色 粘質土(地山ブロック少量)
2. 10YR5/1 黒灰色 粘質土(地山ブロック少量混、炭化物混)
3. 10YR3/1 黒褐色 粘質土
4. 2.5YR/6 黄色 粘質土(地山)
29. 1. 10YR5/1 黒灰色 粘質土(炭化物混)
2. 10YR5/1 黒灰色 粘質土(地山ブロック少量)
3. 10YR5/1 黒灰色 粘質土(地山ブロック少量混、炭化物混)
4. 10YR5/1 黒灰色 粘質土(地山ブロック少量)
5. 2.5YR/6 黄色 粘質土(地山)
28. 1. 10YR6/1 黒灰色 粘質土(10YR6/2 灰黄褐色 粘質土のブロック混)
2. 10YR5/1 黒灰色 粘質土
3. 10YR5/1 黒灰色 粘質土(地山ブロック少量)
4. 10YR5/1 黒灰色 粘質土(地山ブロック少量混、炭化物混)
5. 2.5YR/6 黄色 粘質土(地山)
104. 1. 10YR5/1 黒灰色 粘質土(地山ブロック少量)
2. 10YR5/1 黒灰色 粘質土
3. 2.5YR/6 黄色 粘質土(地山)
106. 1. 10YR5/1 黒灰色 粘質土(地山ブロック少量混、Fe沈着)
2. 10YR5/1 黒灰色 粘質土(地山ブロック少量混、炭化物混)
3. 10YR5/1 黒灰色 粘質土(地山ブロック少量混)
4. 10YR5/1 黒灰色 粘質土(地山の混在層)
5. 2.5YR/6 黄色 粘質土(地山)
86. 1. 10YR5/1 黒灰色 粘質土
2. 2.5YR/6 黄色 粘質土(地山)



第 77 図 SB2 平面・断面図 (S=1/60)

SB1 (第66図)

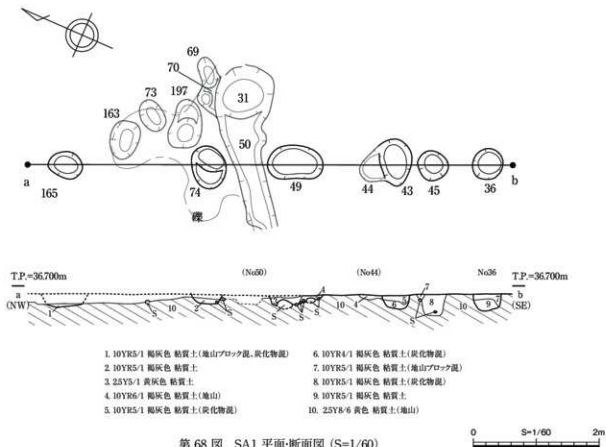
調査区南側に位置する掘立柱建物である。建物は北西-南東桁行6間以上、南西-北東梁行1間以上の建物で、建物の方位はN12°-Wである。建物の東側と南側は調査区外となるため、全体の様相はわからない。P167及びP168はSII102内で検出した。確認できる範囲での建物規模は北西-南東が14.0m、南西-北東5.2m、面積94.2㎡である。柱間の長さは北西-南東ラインのP168-P167間2.2m、P167-P32間2.2m、P32-P31間2.2m、P31-P30間2.3m、P30-P29間2.5m、P29-P28間2.6mで、P30-P29-P28間の柱間が長くなる。南西-北東ラインでP168-P104間2.6m、P104-P106間2.6mである。柱穴の形状は不定形で、長径70cm~125cm、短径45cm~85cm、深さは35cm~46cmを測る。

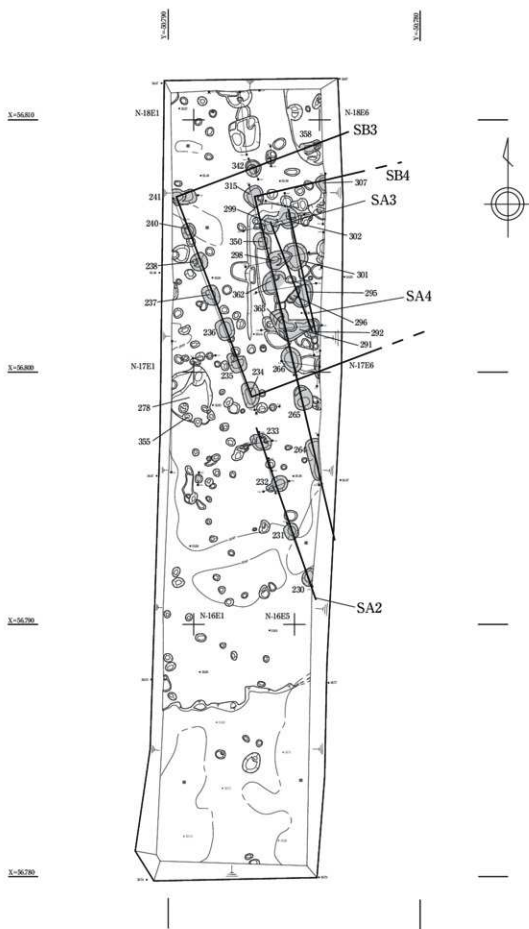
SB2 (第67図)

調査区の中央部よりやや南に位置する掘立柱建物である。SB1の北東部分と重複する。建物は北西-南東桁行5間以上、南西-北東梁行1間以上の建物で、建物の方位はN17°-W、重複するSB1とはほぼ同方位である。建物の東側と南側は調査区外となるため、全体の様相は確認できない。確認できる範囲での建物規模は北西-南東が9.5m、南西-北東が3.2m、面積30.4㎡である。柱間の長さは北西-南東ラインでP119-P105間2.4m、P105-P93間2.4m、P93-P84間1.35m、P84-P180間1.8m、P180-P58間1.55m、南西-北東ラインでP119-P113間3.2mである。柱穴の形状はやや崩れた楕円形が多く、長径50cm~110cm、短径45cm~65cm、深さは25cm~46cmを測る。

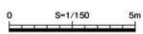
SA1 (第68図)

調査区南側に位置する北西-南東方向の櫛列である。SB1の西側に近接する。P165より北西部分は調査区外となるため、明確な長さは不明である。穴の形状は略円形から不定形なものと同様で、大きさは長径50cm~90cm、短径45cm~50cm、深さ11cm~28cmである。列の長さは約6.8mで、穴の間隔は1.3m~2.4mとばらつきがある。方位はN25°-Wである。





第 69 图 2-2区平面图 (S=1/150)



3. 2-2区 (第69図)

南北30.5m、東西6.0mの調査区である。調査区南側は遺構が希薄で、2-1区北側の自然河川と同じ流路と考える。調査区の北側に向かうに従ってピット等遺構の数が多くなる。大きさや形状は様々であるが、しっかりと掘られたピットが多い。錯綜するピット群の中で掘立柱建物や欄列などを重複する形で検出した。

本調査区ではSB3、SB4、SA2、SA3、SA4を確認した。

SA2 (第70図)

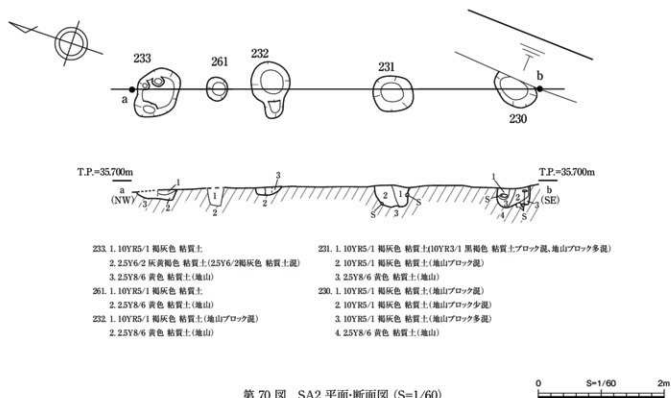
調査区中央付近に位置する北西-南東方向の欄列である。SB3の南側、SB4の西側に位置する。P230より南東部分は調査区外となる。穴の形状は略円形、楕円形、不定形と様々である。大きさは長径65cm~90cm、短径55cm~70cmで、深さ22cm~34cmである。列の長さは5.6mで、穴の間隔はP233-P232間1.8m、P232-P231間1.85m、P231-P230間1.95mである。方位はN20°-Wである。

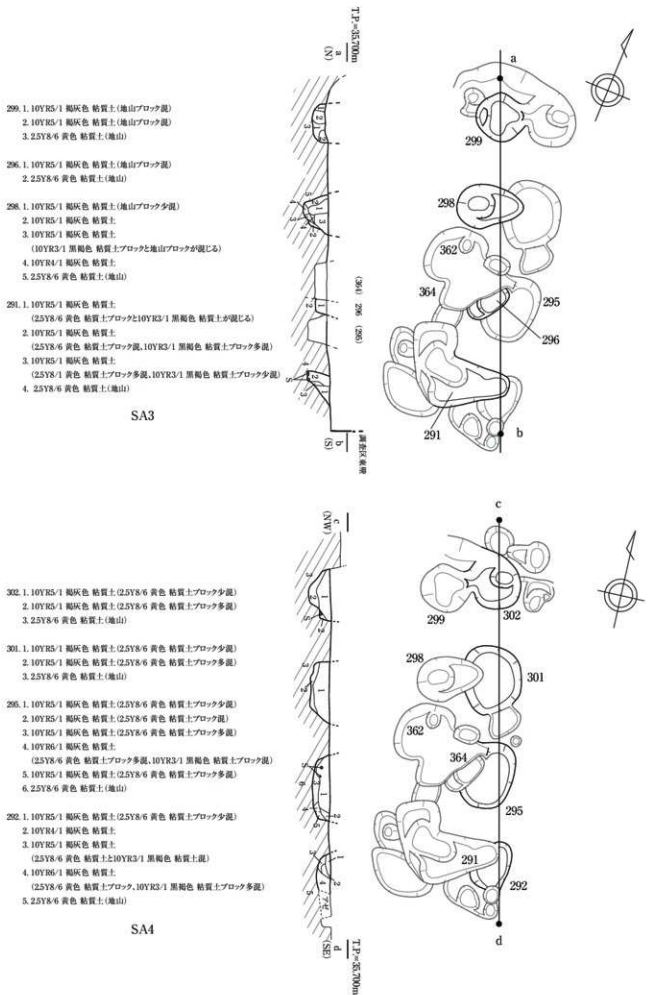
本報告では欄列としているが、北東側調査区外に柱穴が存在することも想定されることから、掘立柱建物になる可能性もある。

SA3 (第71図)

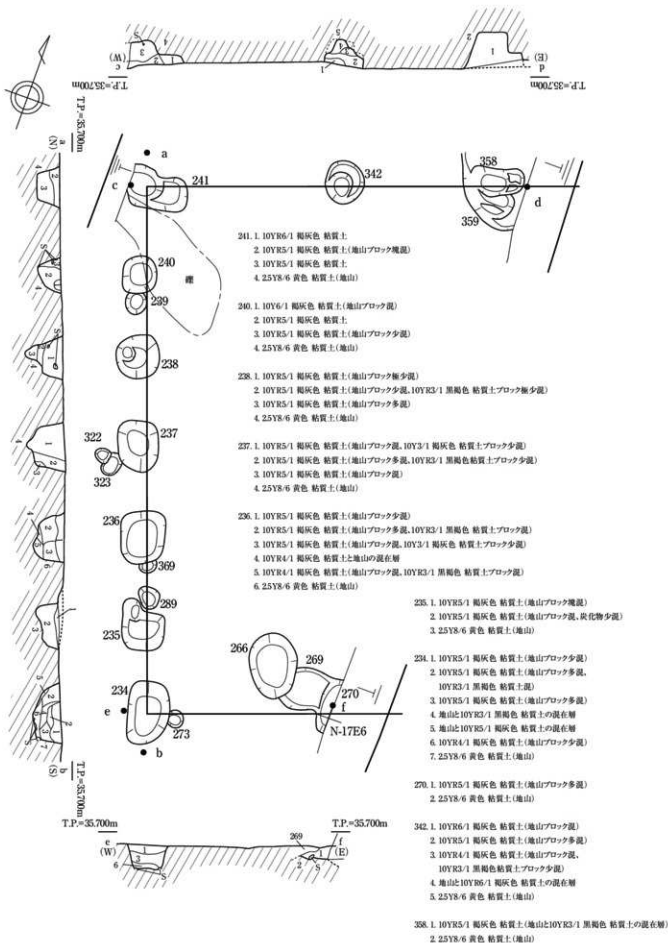
調査区北側のピット群の中から確認した欄列である。北西-南東方向の欄列で穴の形状は、そのほとんどが他の遺構と重複するため不明瞭である。大きさも他遺構と重複するため明確ではないが、確認できたところで長径70cm~100cm、短径50cm~75cm、深さ17cm~38cmを測る。列の長さは4.3mで、P299-P298間1.45m、P298-P296間1.5m、P296-P291間1.35mである。方位はN20°-Wである。

本報告では欄列としているが、北東側調査区外に柱穴が存在することも想定されることから、掘立柱建物になる可能性もある。

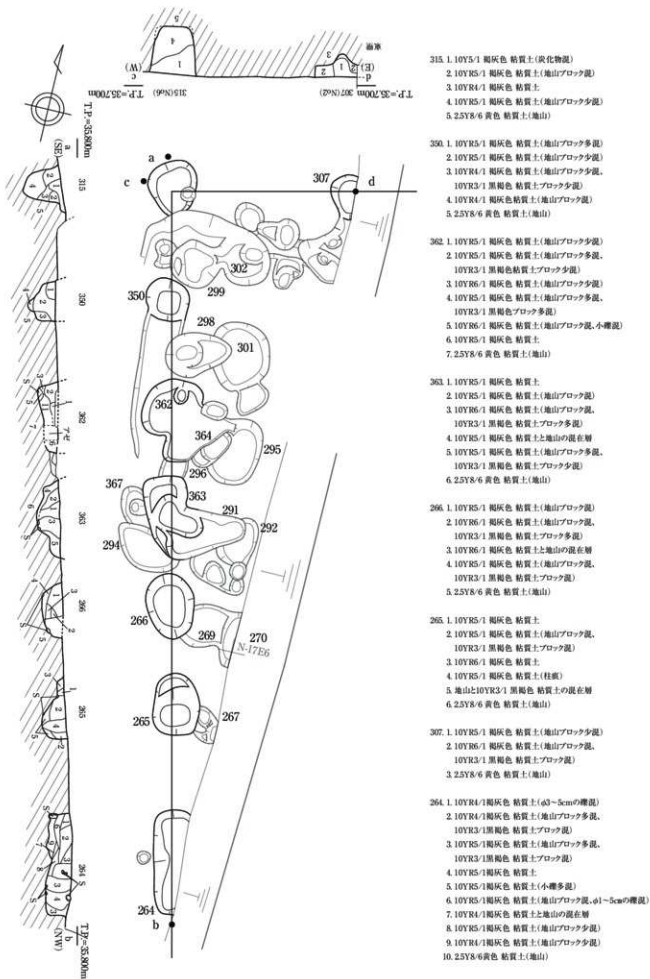




第71図 SA3-4 平面・断面図(S=1/60)

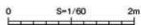


第72図 SB3 平面・断面図 (S=1/60)



315. 1.10Y5/1 褐色色 粘質土(炭化物混)
- 2.10Y5/1 褐色色 粘質土(地山ブロック混)
- 3.10YR4/1 褐色色 粘質土
- 4.10Y5/1 褐色色 粘質土(地山ブロック少混)
- 5.2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)
300. 1.10YR3/1 褐色色 粘質土(地山ブロック多混)
- 2.10Y5/1 褐色色 粘質土(地山ブロック少混)
- 3.10YR4/1 褐色色 粘質土(地山ブロック少混)
- 10YR3/1 黒褐色 粘質土(ブロック少混)
- 4.10YR4/1 褐色色 粘質土(地山ブロック混)
- 5.2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)
302. 1.10YR5/1 褐色色 粘質土(地山ブロック少混)
- 2.10Y5/1 褐色色 粘質土(地山ブロック多混)
- 10YR3/1 黒褐色 粘質土(ブロック少混)
- 3.10YR6/1 褐色色 粘質土(地山ブロック少混)
- 4.10Y5/1 褐色色 粘質土(地山ブロック多混)
- 10YR3/1 黒褐色 粘質土(多混)
- 5.10YR6/1 褐色色 粘質土(地山ブロック混、小礫混)
- 6.10Y5/1 褐色色 粘質土
- 7.2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)
303. 1.10YR5/1 褐色色 粘質土
- 2.10Y5/1 褐色色 粘質土(地山ブロック混)
- 3.10YR6/1 褐色色 粘質土(地山ブロック混)
- 10YR3/1 黒褐色 粘質土(ブロック多混)
- 4.10Y5/1 褐色色 粘質土と地山の混在層
- 5.10Y5/1 褐色色 粘質土(地山ブロック多混)
- 10YR3/1 黒褐色 粘質土(ブロック少混)
- 6.2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)
296. 1.10YR5/1 褐色色 粘質土(地山ブロック混)
- 2.10YR6/1 褐色色 粘質土(地山ブロック混)
- 10YR3/1 黒褐色 粘質土(ブロック多混)
- 3.10YR6/1 褐色色 粘質土と地山の混在層
- 4.10Y5/1 褐色色 粘質土(地山ブロック混)
- 10YR3/1 黒褐色 粘質土(ブロック混)
- 5.2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)
295. 1.10YR5/1 褐色色 粘質土
- 2.10Y5/1 褐色色 粘質土(地山ブロック混)
- 10YR3/1 黒褐色 粘質土(ブロック混)
- 3.10YR6/1 褐色色 粘質土
- 4.10Y5/1 褐色色 粘質土(柱礎)
- 5.地山と10YR3/1 黒褐色 粘質土の混在層
- 6.2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)
307. 1.10YR5/1 褐色色 粘質土(地山ブロック少混)
- 2.10YR6/1 褐色色 粘質土(地山ブロック混)
- 10YR3/1 黒褐色 粘質土(ブロック混)
- 3.2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)
294. 1.10YR4/1 褐色色 粘質土(φ3~5cmの礫混)
- 2.10YR4/1 褐色色 粘質土(地山ブロック多混)
- 10YR3/1 黒褐色 粘質土(ブロック混)
- 3.10Y5/1 褐色色 粘質土(地山ブロック多混)
- 10YR3/1 黒褐色 粘質土(ブロック混)
- 4.10Y5/1 褐色色 粘質土
- 5.10Y5/1 褐色色 粘質土(小礫多混)
- 6.10Y5/1 褐色色 粘質土(地山ブロック混、φ1~5cmの礫混)
- 7.10YR4/1 褐色色 粘質土と地山の混在層
- 8.10Y5/1 褐色色 粘質土(地山ブロック少混)
- 9.10YR4/1 褐色色 粘質土(地山ブロック少混)
- 10.2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

第73図 SB4 平面・断面図 (S=1/60)



SA4 (第71図)

SA3と方向は少し異なるがほぼ同じ場所に位置する櫓列である。北西-南東方向の櫓列で、穴の形状は略円形、楕円形で大きさは長径80cm～110cm、短径55cm～90cmで、深さは24cm～35cmである。列の長さは4.45mで穴の間隔はP302-P301間1.5m、P301-P295間1.5m、P295-P292間1.45mとほぼ等間隔である。方位はN13°-Wである。

本報告では櫓列としているが、北東側調査区外に柱穴が存在することも想定されることから、掘立柱建物になる可能性もある。

SB3 (第72図)

調査区北側に位置する掘立柱建物である。建物は北西-南東桁行6間、南西-北東梁行2間以上の建物で、建物の方位はN20°-W、2-1区SB2と同方位である。P241-P234の西側桁行ラインの南延長上にSA2が所在する。両遺構は同方向のため、同一遺構の可能性も考えたが、両遺構の柱穴間の距離に差異があること、P234とP233で少しずれが見られることから別遺構としている。建物の北東部分は調査区外となるため、全体の様相は確認できない。確認できる範囲での建物規模は北西-南東が8.4m、北側の南西-北東が5.5m、南側の南西-北東が2.9mである。柱間の長さは北西-南東ラインのP241-P240間1.35m、P240-P238間1.35m、P238-P237間1.4m、P237-P236間1.5m、P236-P235間1.45m、P235-P234間1.35m、北側の南西-北東ラインのP241-P342間3.05m、P342-P358間2.45mである。柱穴の形状は略円形、略方形など不定形で長径70cm～115cm、短径45cm～65cm、深さは23cm～58cmを測る。P235、P238、P241、P342、P358の柱穴内部にテラスがある。

SB4 (第73図)

調査区北側に位置する掘立柱建物である。SA3、SA4と隣接し、SB3と重複する。建物は北西-南東桁行6間以上、南西-北東梁行1間以上の建物で、建物の方位はN13°-Wで、SA4と同方位である。建物の北東部分は調査区外となる。確認できる範囲での建物規模は北西-南東が10.25m、南西-北東が2.3mである。柱間の長さは北西-南東ラインのP315-P350間1.75m、P350-P362間1.7m、P362-P363間1.7m、P363-P266間1.5m、P266-P265間1.7m、P265-P264間1.9mで、南西-北東ラインのP315-P307間2.3mである。柱穴の形状は不定形で長径70cm～155cm、短径70cm～80cm、深さ23cm～71cmを測る。P265、P363は内部にテラスを持つ。

第3節 出土遺物 (第74・75・76図)

出土遺物については、古代・中世の土器・磁器、及び土製品や鉄製品を図示した。

152から168は1区から見つかった遺物である。

152～159はSK8から出土した。152は土師器の場で、外面口縁部の一部には煤が付着する。153の器種も土師器の場の口縁部であるが、小片のため長胴壺になるかもしれない。154は須恵器長頸瓶の口縁部、155も瓶の口縁部で、内外面に自然釉がみられる。156は須恵器の無台坏で、口縁部は焼成時に重ね置きしたことにより体部と色調が変わっている。157は口径21cmの大型の坏の口縁部で、丁寧な仕上げをみせている。158と159は無台坏の底部で、159の内面には自然釉が認められる。

160～162は自然河川からの出土である。自然河川は近世・近代にかけての流路で、当該時期の陶磁器が大量に見つかっているが、古代・中世の遺物も見つかっている。本報告では古代の遺物で、実測可能なものを掲載した。160は須恵器甕の体部片である。内面調整は、同心円状のタタキの後にハケを施し、丁寧に仕上げている。161は須恵器長頸壺と考えられる肩部の破片、162は土師器壺の底部である。外底部には回転糸切りの痕跡が確認できる。

163～168はSK8で見つかった鉄製品である。表15観察表では器種名を入れているが、錆の付着が著しいことから、違う器種となる可能性がある。164は棒状の製品で、断面の一端が尖頭になっていることから刀子と推定した。166は鉄釘になるかもしれない。

1区における古代の主要な時期については8世紀後半から9世紀前半に位置付けられると考えられる。

167～198は2・1区から出土した遺物である。

174を除く167～178は、掘立柱建物SB1の柱穴から見つかった土器である。167は土師器内黒埴、169は内黒皿の小片である。169の外面上には赤彩痕が認められる。168は須恵器壺の底部で、内外面に煤が付着している。170と171は土師器甕の口縁部で、両者とも外面の一部に煤が認められる。172～175は土師器内黒埴である。173は台付でその他は無台である。173は外面に赤彩を施している。

176は須恵器甕の体部片で、外面の一部には煤が付着している。177は土師器埴、178は土師器内黒埴である。外面には赤彩が認められる。

179～186は掘立柱建物SB2の柱穴から出土した遺物である。179は須恵器の盤で、内外面に煤が付着する。180は円形の石製品であるが、用途不明である。181は土師器小型の甕、182は土師器の甕もしくは埴の口縁部で、外面の一部に煤が見られる。183と184は内黒埴で、183は外面に赤彩が認められる。185は須恵器有台坏で、口縁部は弱く反り返る。186は焼土の塊片である。

187はSI102から見つかった土師器甕の体部片である。

188～194は2・1区内におけるピットなどの遺構から出土した土器である。188は土師器内黒埴の底部で、外面に赤彩を施す。189は須恵器無台坏の底部、190はフイゴ羽口と考えられる土製品である。191は須恵器甕の体部片で、焼成がやや甘い。192と193は土師器内黒埴で、192の外面には赤彩が認められる。194は須恵器甕の体部で、外面の一部に煤が付着している。

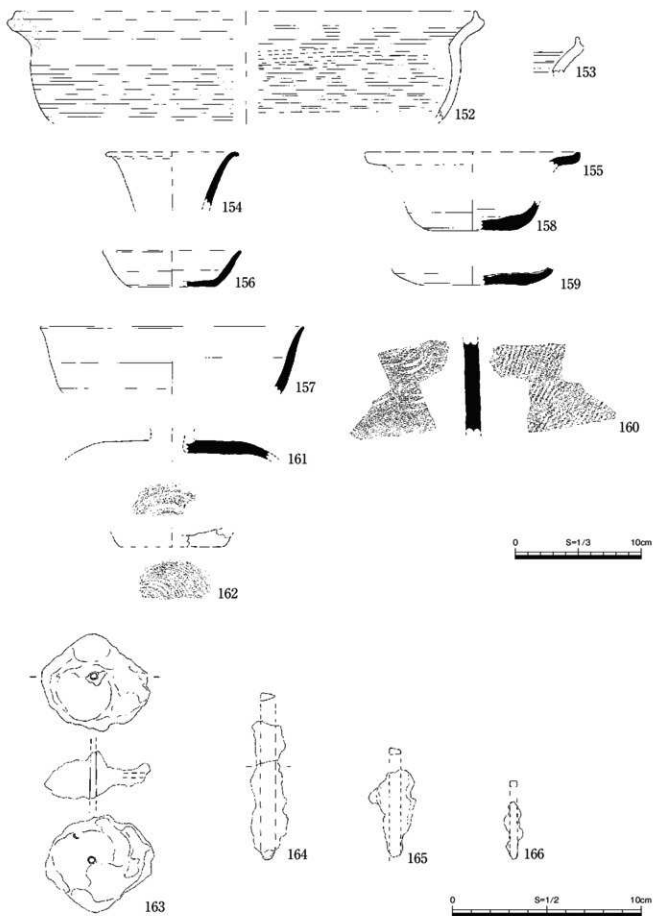
195～197は2・1区北側で確認した自然河川から出土した土器である。195は須恵器蓋で、扁平な形状をしたつまみが認められる。196は須恵器双耳瓶の体部片、197は土師器壺の底部で、外面から底部にかけて煤が付着する。また、外底部には回転糸切り痕が認められる。198は不定形な遺構175から見つかった鉄製品であるが、錆の付着が著しく器種はわからない。

2・1区では古代の遺物が主体となり、須恵器坏・甕や土師器埴の出土が目立つ。主体となる時期は9世紀中頃から後半頃と考えられる。

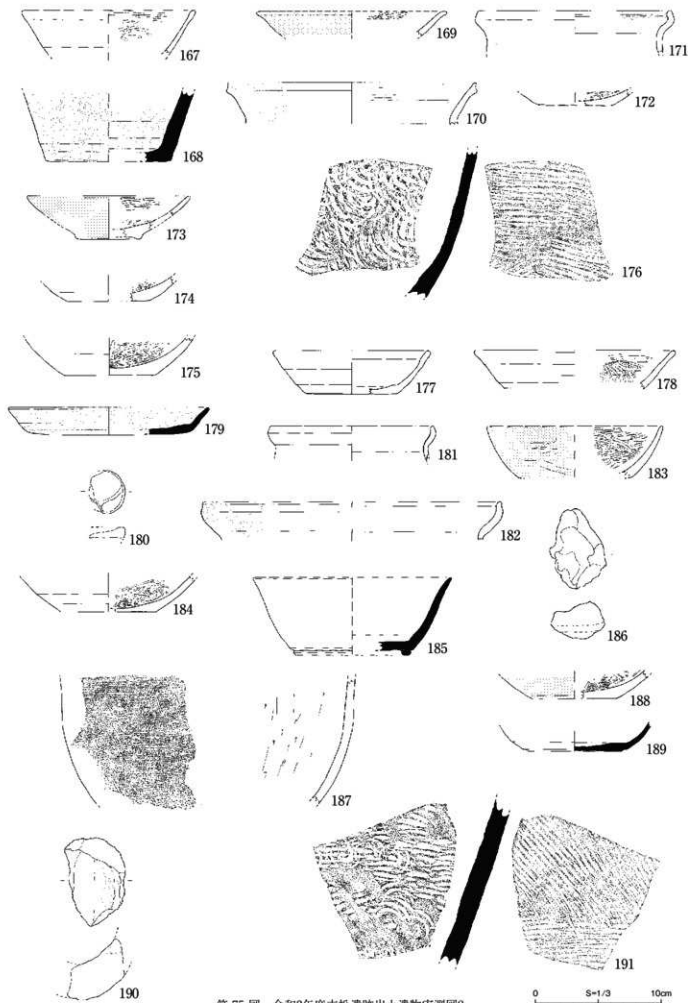
199～207は2・2区から見つかった遺物である。

199はSB3の柱穴にあたるP238から出土した土師器壺の体部片である。200はSB4の柱穴のひとつであるP266の中から発見された須恵器有台坏の底部である。201と205、206は中世の遺物である。201と205は口径8～9cmの小型の土師器皿である。201は不定形な土坑状遺構278からの出土である。206は白磁皿であるが、焼成がやや甘く、色調は光沢のないうすい灰色となっている。207は排土から見つかった須恵器双耳瓶の体部で、外面には自然釉が認められる。

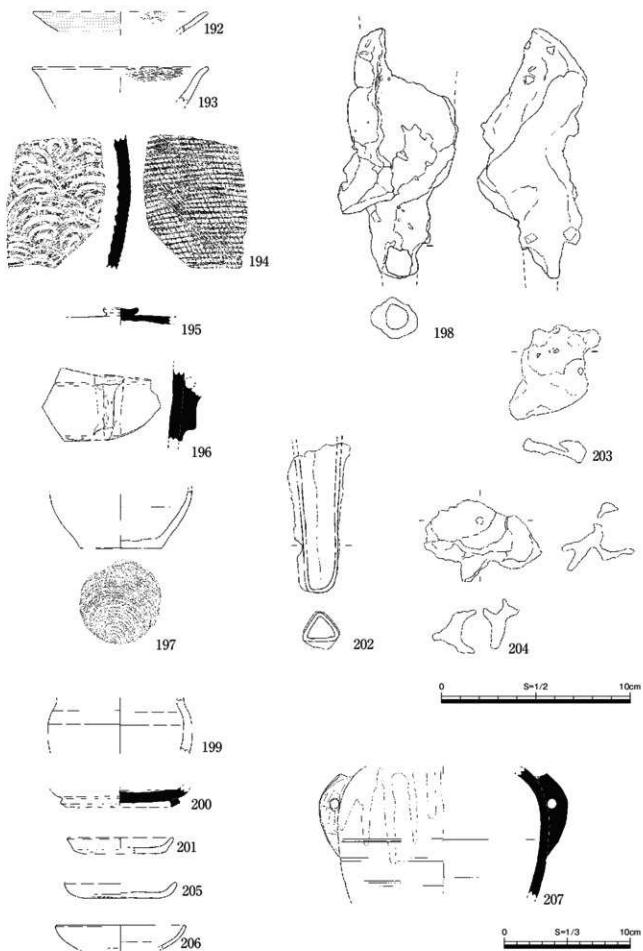
202は鉄製品であるが、錆の付着が著しく器種は不明である。203と204は鉄滓である。201の土師器皿が出土した不定形な土坑状遺構278内にあるP355で見つかったことから中世の時期と考えられる。



第74图 令和3年度末松遺跡出土遺物実測図1



第75图 令和3年度末松遺跡出土遺物実測図2



第76图 令和3年度末松遺跡出土遺物実測図3

第14表 令和3年度1区 遺物観察表(土器)

番号	遺構 出土位置	器種	口径 (mm)	残存高 (mm)	底径 (mm)	調整(外)		残存率	備考
						調整(内)	色調(内)		
152	1K	土師器 壺	380.0	(87.0)	—	ナデ、カキ目	75YR7/3C赤い橙	1/6	外面煤付者
	ナデ、カキ目					75YR7/4C赤い橙			
153	1K	土師器 長頸甕	—	(29.0)	—	ココナデ	75YR7/6橙	小片	内面煤付者
	カキ目					75YR8/4C黄橙			
154	1K	須恵器 長頸甕	106.0	(43.0)	—	ココナデ	10YR5/2R黄褐	1/6	
	ココナデ					2.5Y7/1R白			
155	1K	須恵器 瓶	172.0	(12.0)	—	回転ナデ	N7/灰白	口縁1/9	
	回転ナデ					5Y3/2ナリーブ黒			
156	1K	須恵器 坏	110.0	29.0	74.0	回転ナデ	N8/灰白	1/5	
	回転ナデ					N7/灰白			
157	1K	須恵器 坏	210.0	(54.0)	—	回転ナデ	5B7/1明青灰	口縁1/6	
	回転ナデ					N8/灰白			
158	1K	須恵器 無台坏	—	(23.0)	(80.0)	回転ナデ	N7/灰白	底部1/4	底部回転へつ切り後ナデ
	回転ナデ					N8/灰白			
159	1K	須恵器 坏	—	(14.0)	94.0	回転ナデ	N7/灰白	底部1/6	内面に10YR7/6明黄褐の有機物付着 底部回転へつ切り後ナデ
	回転ナデ					N7/灰白			
160	1K	須恵器 甕	—	—	—	格子状タタキ	5P87/1明青灰	小片	
	ハケのち青海波状タタキ					N7/灰白			
161	1K	須恵器 長頸甕	—	(15.0)	—	回転ナデ	N7/灰白	肩部1/6	
	回転ナデ					5P16/1青灰			
162	1K	土師器 壺	—	(9.0)	(40.0)	回転半切り	75YR7/4C赤い橙	底部1/4	
	ココナデ					75YR8/6C黄橙			

第15表 令和3年度1区 遺物観察表(金属製品)

番号	遺構 出土地点	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
164	1K 8	鉄製刀子か?	73.5	17.0	4.0	15.3	10YR3/1黒褐
165	1K 8	鉄釘か?	46.5	6.0	3.0	1.3	75YR4/1黒灰
166	1K 8	鉄鎌	3.5	4.0	3.0	8.8	75YR4/1黒灰

第16表 令和3年度 2区 遺物観察表(土器)

番号	遺構 出土位置	器種	口径 (mm)	残存高 (mm)	底径 (mm)	調整(外)		色調(外)		残存率	備考
						調整(内)	色調(内)				
167	2-II区 28(SB1)	土師器 内黒埴	1380	(360)	—	調整(外)	色調(外)	ヨコナデ	75YR6/4C ₂ 赤い橙	口縁1/8	
						調整(内)	色調(内)		ヨコナデ、ミガキ		
168	2-II区 28(SB1)	須恵器 壺底部	—	(570)	1000	調整(外)	色調(外)	同転ナデ	SBS-1青灰	1/3	
						調整(内)	色調(内)	同転ナデ	10BG7/1明青灰		
169	2-II区 29(SB1)	土師器 内黒埴	1520	(200)	—	調整(外)	色調(外)	ヨコナデ	25YR7/6橙	口縁部小片	外面赤彩
						調整(内)	色調(内)	ミガキ	N2・黒		
170	2-II区 29(SB1)	土師器 壺	1980	(340)	—	調整(外)	色調(外)	ヨコナデ	5YR7/6橙	口縁部小片	外面煤付着
						調整(内)	色調(内)	ヨコナデ、カキ目	10YR8/4浅黄橙		
171	2-II区 30(SB1)	土師器 壺	1550	(330)	—	調整(外)	色調(外)	ヨコナデ	10YR6/2灰黄褐	小片	外面煤付着
						調整(内)	色調(内)	ナデ	10YR8/3浅黄橙		
172	2-II区 30(SB1)	土師器 内黒埴	—	(130)	600	調整(外)	色調(外)	ヨコナデ	5YR7/6橙	底部1/3	底部回転赤切り
						調整(内)	色調(内)	ミガキ	N3・暗灰		
173	2-II区 31(SB1)	土師器 内黒埴	1300	—	520	調整(外)	色調(外)	ヨコナデ	N4・灰、25YR7/6橙	底部1/4 口縁1/9	外面赤彩、図上復元
						調整(内)	色調(内)	ミガキ	N3・暗灰またはN2・黒		
174	2-II区 31(SB1)	土師器 内黒埴	—	(200)	660	調整(外)	色調(外)	ケズリ	10YR8/3浅黄橙	底部1/6	
						調整(内)	色調(内)	ミガキ	N3・暗灰		
175	2-II区 167(SB1)	土師質 内黒埴	—	(300)	720	調整(外)	色調(外)	回転ヘラケズリ	5YR8/3淡橙	1/3	底部回転ヘラ切り
						調整(内)	色調(内)	ミガキ	N2・黒		
176	2-II区 168(SB1)	須恵器 壺	—	—	—	調整(外)	色調(外)	タタキ	N6・灰	小片	内面青海波状のタタキ 外面煤付着
						調整(内)	色調(内)	タタキ	N6・灰		
177	2-II区 86(SB1)	土師器 埴	1260	(350)	720	調整(外)	色調(外)	ヨコナデ	10YR8/3浅黄橙	小片	接合不可同一個体 図上復元
						調整(内)	色調(内)	ヨコナデ	10YR8/3浅黄橙		
178	2-II区 86(SB1)	土師器 内黒埴	1600	(310)	—	調整(外)	色調(外)	ヨコナデ	10YR7/4C ₂ 赤い黄橙	小片	
						調整(内)	色調(内)	ミガキ	N4・灰		
179	2-II区 58(SB2)	須恵器 盤	1600	220	1340	調整(外)	色調(外)	同転ナデ	SBS-1青灰	1/6	内外面煤付着
						調整(内)	色調(内)	ナデ	SBS-1青灰		
181	2-II区 93(SB2)	土師器 小型壺	1300	(290)	頸部径 1210	調整(外)	色調(外)	ヨコナデ	7.5YR7/4C ₂ 赤い橙	口縁部小片	内面煤付着
						調整(内)	色調(内)	ヨコナデ	7.5YR7/3C ₂ 赤い橙		
182	2-II区 93(SB2)	土師器 埴	(2380)	(300)	頸内径 (200)	調整(外)	色調(外)	ヨコナデ	7.5YR8/3浅黄橙	口縁小片	外面煤付着
						調整(内)	色調(内)	ヨコナデ	7.5YR8/3浅黄橙		
183	2-II区 93(SB2)	土師器 内黒埴	1400	(500)	(880)	調整(外)	色調(外)	ヨコナデ	7.5YR7/3C ₂ 赤い橙	小片	外面赤彩
						調整(内)	色調(内)	ヨコナデ後ミガキ	N3・暗灰		
184	2-II区 93(SB2)	土師質 内黒埴	—	(280)	760	調整(外)	色調(外)	ケズリ	7.5YR7/4C ₂ 赤い橙	底部1/3	底部回転ケズリ後ナデ
						調整(内)	色調(内)	ミガキ	N2・黒		
185	2-II区 93(SB2)	須恵器 有台坏	1580	620	940	調整(外)	色調(外)	同転ナデ	SBS-1青灰	1/4	
						調整(内)	色調(内)	同転ナデ	N6・灰		
187	2-II区 102(S)	土師器 壺	—	—	体部径 2380	調整(外)	色調(外)	カキム、ハケ	10YR7/3C ₂ 赤い黄橙	小片	
						調整(内)	色調(内)	縦方向のケズリ	10YR8/2灰白		
188	2-II区 65	土師器 内黒埴	—	(230)	660	調整(外)	色調(外)	開り後ヨコナデ	7.5YR7/3C ₂ 赤い橙	底部1/3	外面赤彩
						調整(内)	色調(内)	ミガキ	N2・黒		
189	2-II区 174	須恵器 坏	—	(240)	740	調整(外)	色調(外)	同転ナデ	N8・灰白	底部1/3	
						調整(内)	色調(内)	ヨコナデ	N8・灰白		
191	2-II区 57	須恵器 壺	—	—	—	調整(外)	色調(外)	タタキ	10YR7/2C ₂ 赤い黄橙	小片	焼成不良
						調整(内)	色調(内)	タタキ後一部ナデ	10YR7/2C ₂ 赤い黄橙		
192	2-II区 45	土師器 内黒埴	(1500)	(160)	—	調整(外)	色調(外)	ヨコナデ	5YR6/4C ₂ 赤い橙	口縁部小片	外面赤彩
						調整(内)	色調(内)	ヨコナデ後ミガキ	N2・黒		
193	2-II区 148	土師器 内黒埴	1400	(205)	—	調整(外)	色調(外)	ヨコナデ	10YR7/4C ₂ 赤い黄橙	1/7	
						調整(内)	色調(内)	ヨコナデ後ミガキ	N3・暗灰		
194	2-II区 34	須恵器 壺	—	—	—	調整(外)	色調(外)	タタキ	N7・灰白	小片	外面煤付着
						調整(内)	色調(内)	青海波状のタタキ	5PB7/1明青灰		

番号	遺構 出土位置	器種	口径 (mm)	残存高 (mm)	底径 (mm)	調整(外)		残存率	備考
						調整(内)	色調(内)		
195	21区 北側塚部	須恵器 つまみ付蓋	—	つまみ径 28.0	—	ヨコナデ	N6/灰	つまみ完存	
						ヨコナデ	N7/灰白		
196	21区 北側塚部	須恵器 双耳瓶	—	(58.0)	—	ナデ	10BK6/1青灰	小片	
						ナデ	10BG7/1明青灰		
197	21区 北側塚部	土師器 小壺	—	(46.0)	65.0	ヨコナデ、底部回転糸切り	10YR6/3C-3R、黄橙	底部完存	外面覆付者 底部回転糸切り痕
						ヨコナデ、ナデ	10YR6/4C-3R、黄橙		
199	22区 Z38(SE3)	土師器 小壺	頸部径 101.0	(44.0)	体部径 115.0	ヨコナデ	10YR5/3C-3R、黄褐	1/5	
						ヨコナデ	10YR5/2R、黄褐		
200	22区 266(SB4)	須恵器 有台杯	—	(16.0)	96.0	ヨコナデ	N7/灰白	底部1/4	
						ヨコナデ	N7/灰白		
201	22区 278	土師器 皿	84.0	13.0	73.0	ヨコナデ	7.5YR8/4R、黄橙	1/9	
						ヨコナデ	7.5YR8/4R、黄橙		
205	22区 包含層	土師器 皿	90.0	13.0	56.0	ヨコナデ	7.5YR8/4R、黄橙	1/4	底部静止糸切り痕
						ヨコナデ	7.5YR8/4R、黄橙		
206	22区 包含層	磁器 白磁皿	104.0	(19.0)	—	回転ナデ	7.5YR8/1灰白	小片	
						回転ナデ	7.5YR8/1灰白		
207	22区 排土	須恵器 双耳瓶	—	(104.0)	—	ヨコナデ	5Y6/2R、赤リージュ	小片	外面自然釉
						ヨコナデ	N8/灰白		

第 17 表 令和3年度 2区 遺物観察表(土製品)

番号	遺構		器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
	出土地点							
186	21区	焼土塊		63.5	(45.0)	27.5	51.2	
	90(SB2)							
190	21区	フイゴ削1		70.5	48.0	28.0	55.9	
	87							

第 18 表 令和3年度 2区 遺物観察表(石製品)

番号	遺構		器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石材	備考
	出土地点								
180	21区	不明		35.0	—	9.0	7.5	凝灰岩	径：35mm
	58(SB2)								

第 19 表 令和3年度 2区 遺物観察表(金属製品)

番号	遺構		器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
	出土地点							
198	21区	不明		130.0	59.0	不明	127.8	サビがひどく器厚不明
	175							
202	22区	不明		79.0	33.0	2.0	36.6	罎や瓶の脚部か？
	355							
203	22区	鉄滓		50.0	48.5	3.0	15.4	
	355							
204	22区	鉄滓		43.0	62.5	4.0	34.5	
	355							

第8章 総括

第1節 上林イシガネ遺跡の調査成果まとめ

本遺跡における今回の調査では、縄文土器や、古代及び中世の遺物が見つまっているが、主体となる時期は14世紀を中心とした集落の一部と想定される。

当該時期の主要な遺構としては、3区で確認した東西約9m、南北12m以上の区画溝SD1と、区画内に存在するSK25・26の土坑が挙げられる。3区の区画溝内に限らず、調査区全域には複数のピットがみられるが、掘立柱建物の柱穴として認められるものは確認していない。検出した区画溝SD1は北方へ延びていることから、生活拠点となる集落の中心は、本調査区北側一帯になると考えられる。

区画された溝SD1の区域内には、楕円形土坑SK25や円形土坑SK26を検出している。SK25の埋土には人頭大の自然石が集中して入り、その下からは完形に近い珠洲焼挿鉢(10)が出土している。

SK25に隣接するSK26は、遺物は確認できないものの、SK25と同様の覆土が人為的に入っている。

また、3区SD1からは、鉄製小刀(19)の完形品が出土している。

以上のように、土坑の埋土の状況、10の珠洲焼挿鉢や19の鉄製小刀は埋納品と推されることから、本調査区で見つかった3区の区画溝内は、集落から離れた信仰対象のエリアにあたると思われる。

第2節 末松遺跡の調査成果まとめ

本調査区では、古代及び中世の集落を確認した。

古代では、令和3年度調査の1区で8世紀後半を主体とするSK8が見つまっているが、当該時期における他の遺構は確認していない。本時期の集落の中心は、令和3年度調査1区の周辺部に展開していると想定される。

現在の中林集落内を横断する市道額谷・末松線と県道堀内・上林線が交差する平成29年度調査2区では掘立柱建物5棟、本遺跡の北端にあたる令和3年度調査2区では掘立柱建物4棟及び構列、本遺跡南端にあたる平成29年度調査1区からは掘立柱建物1棟を確認した。

いずれの調査区からも、9世紀半ば～後半の土師器壺を中心とした土器が出土しており、当該時期の集落域がそれぞれ存在したと考えられる。

また、平成29年度調査2区の北方にある平成30年度調査1区からは、完形品及び完形品に近い9世紀半ば～後半の土師器壺や皿が複数のピットから見つまっている。これらの土器は埋納によるものと考えられ、この一帯は、古代後半の集落外に展開する信仰対象地と推察される。

令和2年度調査1区では、14世紀を中心とした集落を確認した。主要な遺構では、竪穴状遺構や土坑、溝などで、遺物は生活用品にあたる土師器皿や珠洲焼挿鉢、青磁壺、石製行火などが出土した。SI174・175・254などの竪穴状遺構は集落内の同一箇所まで造り替えしており、SI254は造り替えにより掘方が脆弱となる部分を、自然石を積み上げて補強している。これら竪穴状遺構の北側には、SK8・16・18など様々な形状をもった土坑群が点在する。土坑群のさらに北側には東西方向のSD1・2が走っており、両溝については、道路状遺構の側溝と推される。

これらの遺構の配置状況から、計画的な宅地割りをもった集落があり、その北側には集落間を結ぶ道路が走るというような中世の景観を復元することができる。

<参考文献>

- ・末松遺跡調査団 1971「史跡末松庵寺」 石川県教育委員会
- ・北野博司 1989「末松遺跡」 石川県農業短期大学付属農業資源研究所増築工事に係る埋蔵文化財報告書
（財）石川県埋蔵文化財センター
- ・安英樹・立原秀明・藤井秀明 2000「野々市町末松遺跡群 農村活性化住環境整備事業(野々市地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書」
（財）石川県埋蔵文化財センター
- ・横山貴広 2001「末松A遺跡・末松しりわん遺跡 民間開発・地方特定道路整備事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書」
野々市町教育委員会
- ・柿田祐司・布尾和史 2005「野々市町末松遺跡一般国道157号線鶴来バイパス改築工事にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書」
（財）石川県埋蔵文化財センター
- ・垣内光次郎・伊藤雅文・金山智哉・山田由布子 2006「末松遺跡」 石川県立大学整備工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
（財）石川県埋蔵文化財センター
- ・安中哲徳・西田昌弘・空 良寛 2009「末松遺跡」 石川県立大学大学院棟建設工事及び大学連携インキュベータ整備工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書（財）石川県埋蔵文化財センター
- ・藤地孝大 2017「末松遺跡 ふるさと農道緊急整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」 野々市市教育委員会
- ・藤田邦雄 1997「中世加賀国の土師器様相」[中・近世の北陸—考古学が語る社会史—] 北陸中世土器研究会
- ・吉岡康暢 1994「中世須恵器の研究」 吉川弘文館
- ・田嶋明人 1988「古代土器編年軸の設定」[シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題] 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会



1区 1トレンチ全景(東から)



1区 1トレンチ西壁土層断面(東から)



1区 2トレンチ全景(南西から)



1区 2トレンチ西壁土層断面(東から)



2区 全景(北西から)



3区 全景 (南東から)



3区 西半全景 (完掘状況) (北東から)



3区 北壁土層断面 (南東から)



3区 サブトレンチ1 SD1 (e-f) 断面 (西から)



3区 サブトレンチ2 SD1 (g-h) 断面 (北から)



3区 SD1 (i-j) 断面 (北から)



3区 西壁土層断面 (北東から)



3区 SD1 (k-l) 小刀出土状況 (東から)



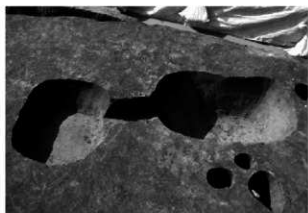
3区 P3 土層断面 (南から)



3区 SK25・26 遺構検出状況 (東から)



3区 SK25 遺物出土状況 (東から)



3区 SK25・26 完掘状況 (東から)



3区 上層遺構面検出状況 (南西から)



4区 全景（南東から）



1区 全景（北から）



1区 SD85・86 (西から)



1区 SD86・87, SK89 (東から)



1区 SD85 遺物出土状況 (西から)



2区 調査区南端全景 (SD640 以南) (北から)



2区 調査区南半全景 (SB2 付近) (南から)



2区 調査区北半全景 (SB3・4 付近) (南から)



2区 調査区北端全景 (SB5 付近) (南から)



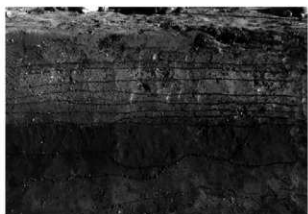
2区 調査区北端東西トレンチ全景 (西から)



2区 調査区北半 東壁土層(南西から)



2区 調査区南半 東壁土層①(西から)



2区 調査区南半 東壁土層②(西から)



2区 調査区南半 東壁土層③(西から)



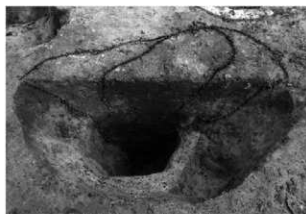
2区 SD640 土層断面(北西から)



2区 P268 遺物出土状況(南から)



2区 P185 遺物出土状況(東から)



2区 SK533 土層断面(南から)



1区 全景垂直航空写真(右が北)



1区 SD1・2・3 完掘(南から)



1区 全景(北から)



1区 全景(南から)



1区 西南部(東から)



1区 P237 遺物出土状況1 (南東から)



1区 P237 遺物出土状況2 (南から)



1区 P250 遺物出土状況 (西から)



1区 SD4・5 完掘 (西から)



1区 SI428 土層断面 (北西から)



1区 SI429 土層断面 (西から)



2区 南半全景 (南から)



3区 全景 (北から)



1区 SD1・2 完掘 (北東から)



1区 SI531 (竪穴住居) 遺物出土状況 (南から)



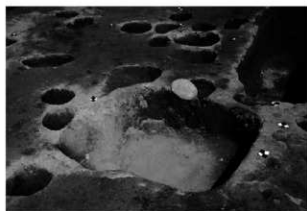
1区 SK419・5 完掘 (北西から)



1区 SK7 完掘 (北東から)



1区 SK8 完掘 (北東から)



1区 SK9 完掘 (南から)



1区 SK16 完掘 (北東から)



1区 SK18 土層 (南から)



1区 SK11・9 完掘(南東から)



1区 SK20・136 完掘(北東から)



1区 SK13 完掘(北東から)



1区 SK21・258 完掘(南東から)



1区 SK12・17 完掘(東から)



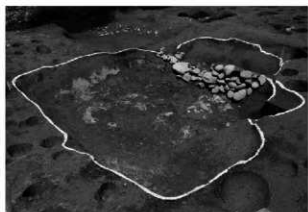
1区 SK171・172・173、P108 完掘(北西から)



1区 SK173 遺物出土状況(南西から)



1区 S1174・175 土層断面(南から)



1区 SI254・255、SK256 完掘(南東から)



1区 SI254・255 土層断面(西から)



1区 SK22 遺物出土状況(北から)



2区 全景(南から)



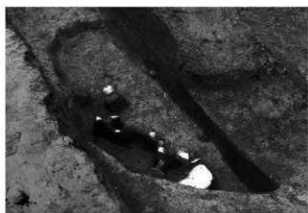
1区 全景(南から)



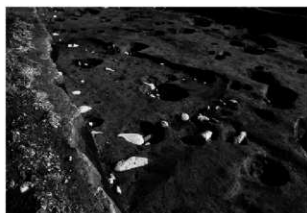
1区 全景 (北から)



1区 全景 (南から)



1区 SK8 遺物出土状況 (北東から)



2-1区 S1102 (竪穴住居) 完掘 (南西から)



2-1区 S11・2 (北西から)



2-1I区 全景 (南から)



2-2I区 全景 (南から)



2-2区 SB3・4、SA3・4 (北西から)



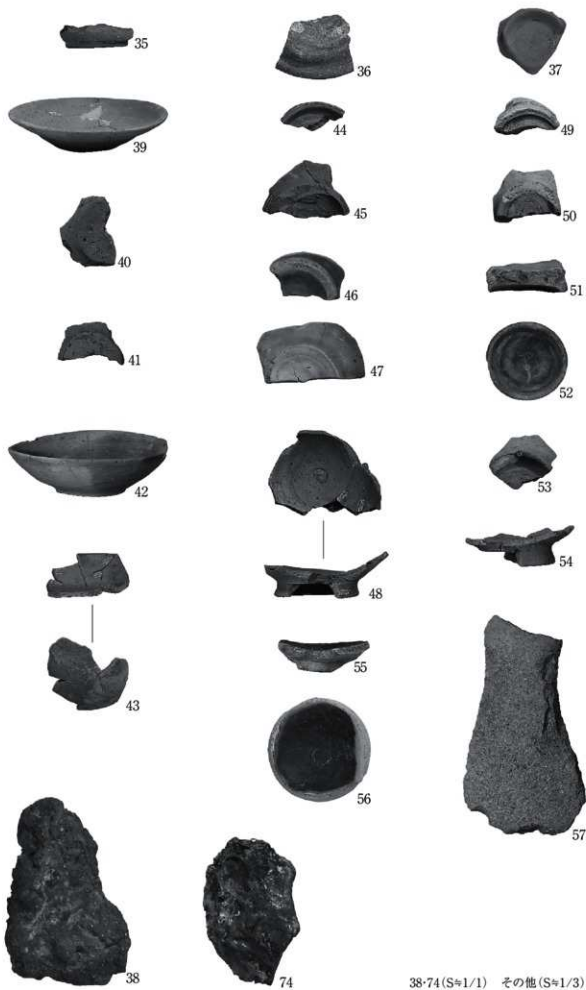
2-2区 全景 (北から)



19 (レントゲン)



10(S≒1/4) 19(S≒1/2) その他(S≒1/3)







75



76



78



80



81



88



89



90



91



77



82



83



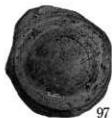
92



93



94



97



98



79



84



85



86



87



95



96



99



100



101



102



103



104



105



107



108



106



109



110



111



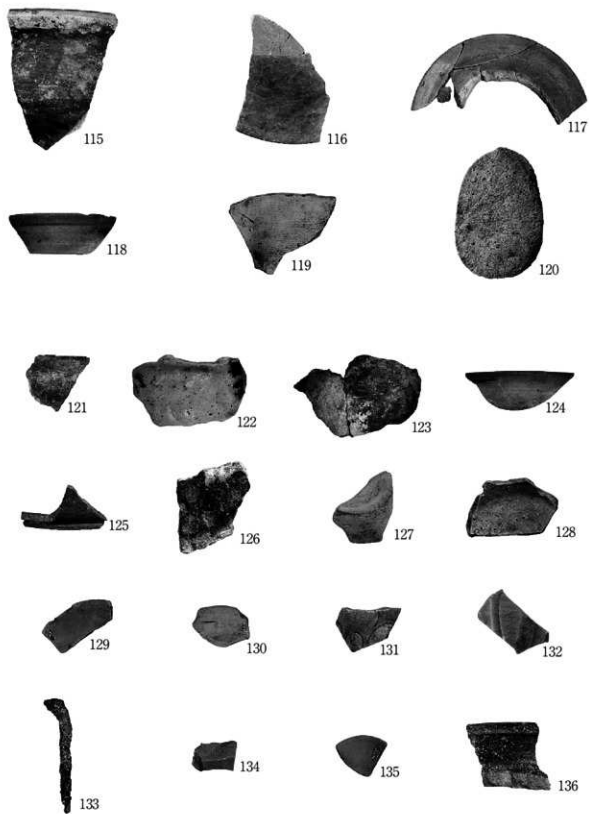
112



113

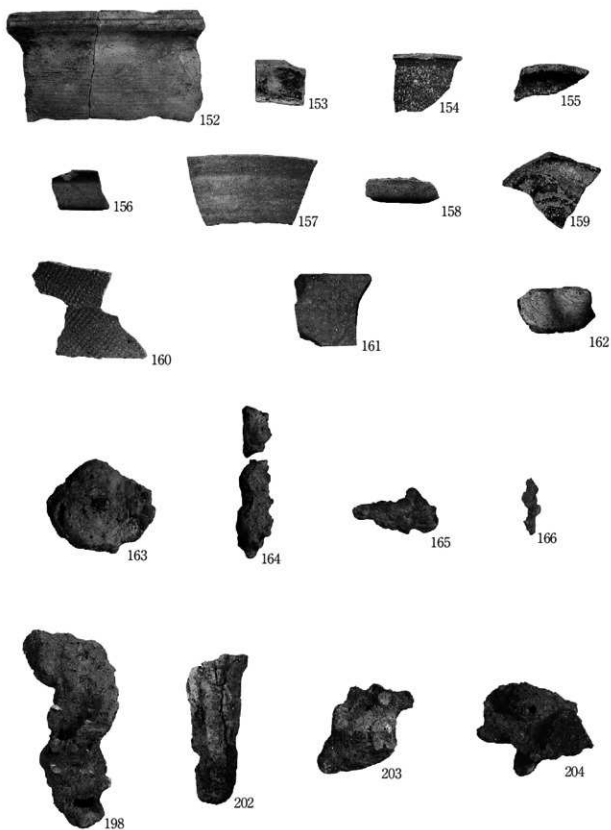


114

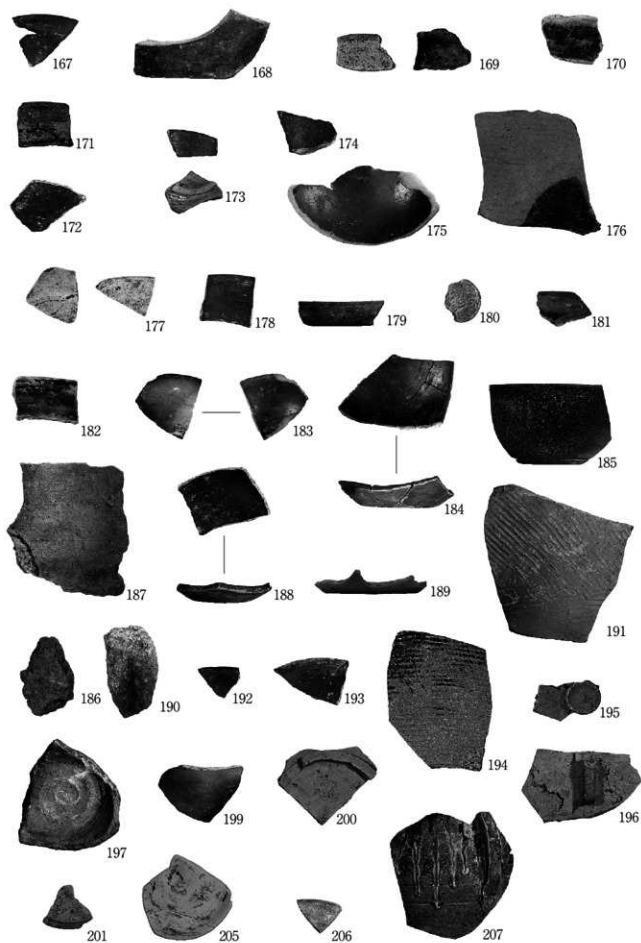


133(S=1/2) その他(S=1/3)





163-166, 198, 202~204 (S=1/2) その他 (S=1/3)



報告書抄録

ふりがな	かんばやししがねいせき すえまついせき
書名	上林イシガネ遺跡 末松遺跡
副書名	野々市市中林土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書1(都市計画道路 四十万末松線・堀内上林線)
シリーズ名	野々市市中林土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	1
編著者名	西村 慧子、慶地 孝大、徳野 裕子、田村 昌宏
編集機関	野々市市教育委員会
所在地	〒921-8510 石川県野々市市三納一丁目1番地 Tel:076-227-6122
発行機関	野々市市教育委員会
発行年月日	西暦 2023年3月27日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
上林イシガネ遺跡 平成28年度調査	石川県 野々市市 中林二丁目 上林三丁目	17344	1205800	36° 50° 58°	136° 60° 30°	2016年9月16日～ 2016年11月30日	1,570	記録 保存 調査
末松遺跡 平成29年度調査	石川県 野々市市 中林二丁目	17344	1205800	36° 50° 77°	136° 59° 92°	2017年11月7日～ 2018年1月23日	600	記録 保存 調査
末松遺跡 平成30年度調査	石川県 野々市市 中林二・三丁目	17344	1205800	36° 50° 80°	136° 59° 92°	2018年9月10日～ 2018年12月12日	589	記録 保存 調査
末松遺跡 令和2年度調査	石川県 野々市市 中林三丁目	17344	1205800	36° 50° 92°	136° 59° 93°	2020年6月25日～ 2020年9月30日	560	記録 保存 調査
末松遺跡 令和3年度調査	石川県 野々市市 中林三丁目	17344	1205800	36° 50° 95°	136° 59° 94°	2021年7月26日～ 2021年12月6日	755	記録 保存 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上林イシガネ遺跡 平成28年度調査	集落	縄文、古代 中世、近世	土坑、溝、自然河川	縄文土器、須恵器、古代・中世土師器 中世・近世陶磁器、打製石斧、砥石 鉄製小刀	
末松遺跡 平成29年度調査	集落	縄文、古代 中世	掘立柱建物、溝、小穴	須恵器、土師器、打製石斧、鉄滓 フイコ羽	
末松遺跡 平成30年度調査	集落	縄文、古代 中世、近世	溝、小穴	縄文土器、須恵器、古代土師器 中世・近世陶磁器、打製石斧	
末松遺跡 令和2年度調査	集落	古代、中世	竪穴状遺構、土坑、溝	須恵器、古代・中世土師器 中世陶磁器、砥石、行火	
末松遺跡 令和3年度調査	集落	古代、中世	竪穴建物、掘立柱建物、 橋列、土坑、自然河川	須恵器、古代・中世土師器、中世磁器 鉄製小刀・釘	

要約	<p>上林イシガネ遺跡は、縄文、古代、中世、近世の遺跡である。縄文や古代については、縄文土器や須恵器など遺物は出土しているが、遺構は確認していない。中世は14世紀を中心とした集落の一端を確認した。区画された溝のエリア内からは、土坑2基を掘出し、埋土の状況や出土遺物の状況から信仰地の可能性がある。近世は、自然河川が見つかっている。末松遺跡は、縄文、古代、中世、近世の遺跡である。縄文時代は、少量ではあるが、土器や打製石斧を確認することができた。古代は、8世紀後半と、9世紀中～後半の集落跡を確認した。本報告書においては、8世紀後半は土坑1基のみの検出で、集落の中心は確認した土坑の周囲に存在すると考えられる。9世紀中～後半の集落は、本遺跡の北端、中央部、南端でそれぞれ確認しており、掘立柱建物が複数棟建っている。また、集落から離れた箇所では、ピットに土師器境や皿を埋納するエリアがあり、当該時期の信仰の場であったと思われる。中世では、14世紀を主体とする集落跡を確認した。竪穴状遺構や土坑が計画的に造られ、これらの遺構の北側に側溝を有した道路状遺構を掘出した。当該時期の集落の景観を復元するうえで興味深い調査成果となった。</p>
----	---

野々市市中林土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書1
(都市計画道路 四十万末松線・堀内上林線)

上林イシガネ遺跡・末松遺跡

発行日 令和5(2023)年3月27日

発行者 野々市市教育委員会

〒921-8510

野々市市三納一丁目1番地

電話 076-227-6122

E-mail shougai@city.nonoichi.lg.jp

印刷 高桑美術印刷株式会社